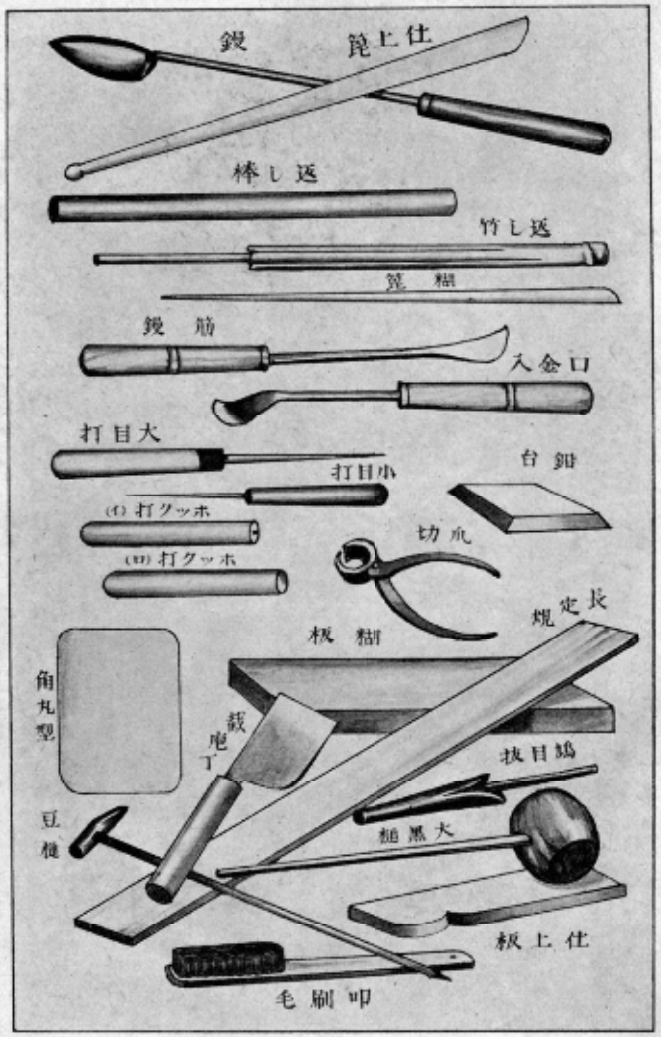


594
089-3

新書

のもくいさお
大妻コタカ著

金星堂版

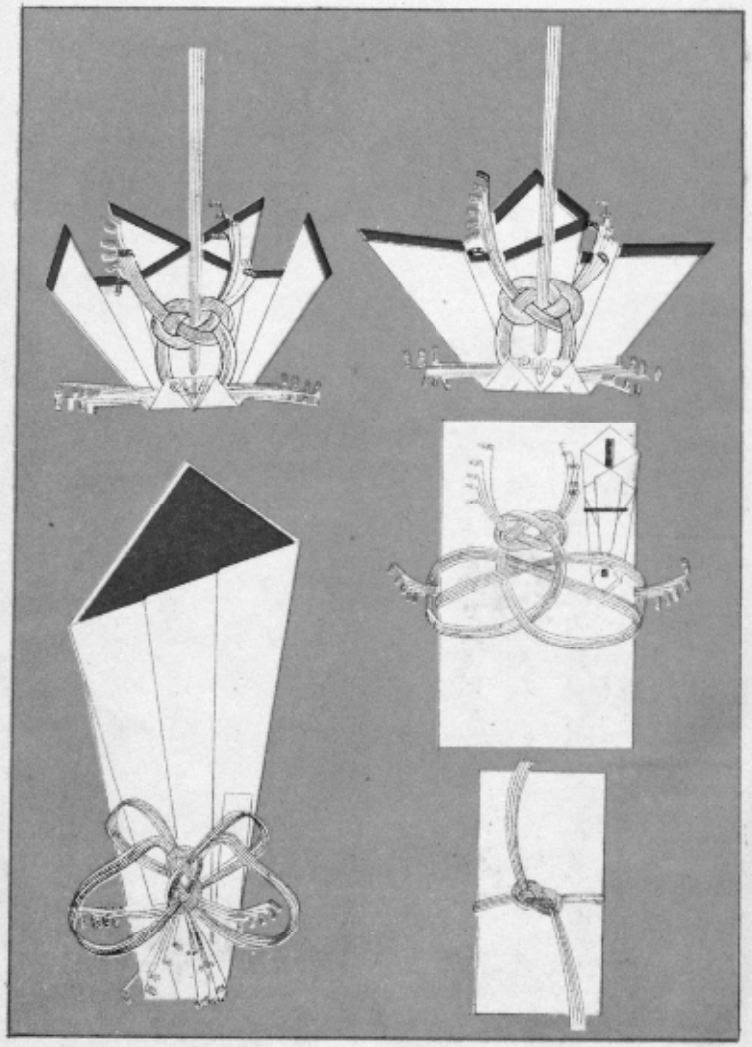


大阪市立図書館

3377

東京都千代田区 昭和 3377 大宅壮一文庫





はしがき

或る日、家事文庫刊行會の主幹が來訪せられまして、今回家事文庫を發行するにつき手藝の一科を設けたいから、私に其科目を擔任して呉れまいか、是非枉げて承諾を望むとのお頼みでございました。且つ申されますには、女子に手藝の必要なことは、今更くだ〳〵しく述べるまでもないのであるが之れを學ばうとする人のために良師がなくて、其希望を滿足させる事が出來ない場合が多々あるやうに思ひます。殊に講義錄の如きは何の素養もない人にても、容易く獨學の出來るやうに親切に書いてあるものが乏しいとのことでございました。私もそれは同感で常に之れを密かに遺憾に思つてゐた一

人でございます所から、身の淺學を顧みず敢てお請けして、本書に筆を染めました次第でございます。

かやうな次第で本書は、最も平易な言葉と文字とを使用致し、其上圖解を挿みましたから、文章と圖解とを對照しまゝれば、如何なる人にも了解されるだらうと存じます。且つ各手順によつて一々番號を附け、一々了解の出來る様に書いて置くことに致しました。

初め私は之を書き上げますと、新に宅に雇ひ入れました女中に之れを示し、彼の女に讀ませながら本書に書いてある通りに殆ど義務的に製作させました所、無學な彼の女にも、兎も角形が出來上りましたので、これならば何んな初學の方にても出來るだらうといふ自信が起つて、始めて印刷に附した次第でございます。

とは言へ、筆が廻らぬため説明の不十分な所も多いことゝ存じますから、夫れ等は版を重ねる時に訂正する事に致したいと思ひます。

袋物、摘細工、壘細工、編物、儀式用折紙、水引の結方等の各部何れもその種類は限りなく澤山ございますし、また後から〳〵研究し、考案した新形もございますけれど、紙數に限りのある本書には、その中私共の日常生活上に最も關係の多い必要なもの數種を記するに止めますことの不得止に立ち至りましたのは、私の深く遺憾に思ふ所でございます。この

苦しい思ひを償ふために、何れ近い内に講義錄見たやうな月刊の出版物を世に公にする積りでございますから、本書の不足な部分はそれによつて補つて戴きたいと存じます。

終りに臨み、淺學なる私にまで筆をお執らせ下さつた家事文庫刊行會の方々と、無經驗なる私を種々御指導下さつた東京女子商業學校長兼大妻技藝傳習所顧問甫守謹吾氏の御厚意を深謝致します。

九段にて

大妻一恵

おさいくもの新書目次

總論……一
袋物……五
一、用具と材料……五
用具……六
材料……一二
二、各部分の名稱……一五
三、製作上の心得……一八
裁斷丁の使ひ方……一八
型紙の裁ち方……一九
糊のつけ方……二一
貼り方……二三
袋取りの仕方……二四

用布の裁ち方……二五
筋のつけ方……二八
縫ひ方……二八
縮せの取り方……二九
仕上げの仕方……三一
小馳の打ち方……三三
小馳かけのつけ方……三四
ホックのつけ方……三五
心袋の貼り方……三七
帶紙の巻き方……三八
一、皿刳名刺入……三九
材料……三九
製作の順序……四〇
裁ち方……四〇
貼り方……四五
縫ひ方……四六

應用……五二
二、楊枝入……五二
材料……五三
製作の順序……五三
裁ち方……五三
貼り方……五六
縫ひ方……五七
三、袱紗挟み……六〇
材料……六〇
製作の順序……六一
裁ち方……六一
貼り方……六三
縫ひ方……六四
千鳥かけの仕方……六七
四、被せ附雨縢り紙入……七〇

材料……七一
製作の順序……七一
裁ち方……七一
貼り方……七五
縫ひ方……七七
五、利久形煙草入……八三
製作の順序……八四
裁ち方……八五
貼り方……八八
縫ひ方……九〇
應用……九九
六、名劍入附巻煙草入……九九
製作の順序……一〇〇
裁ち方……一〇〇
貼り方……一〇四

七、二つ折鏡入……一一〇
材料……一一〇
製作の順序……一一一
裁ち方……一一一
八、君が代二つ折り銀貨入……一一二
製作の順序……一一三
裁ち方……一一三
貼り方……一二九
縫ひ方……一三〇
九、團扇形二つ折り銀貨入……一三五
製作の順序……一三六
裁ち方……一三六
貼り方……一三六
縫ひ方……一三七
ホックの打ち方……一四〇

一〇、九重形琴爪入……一四一
材料……一四二
製作の順序……一四二
裁ち方……一四二
縫ひ方……一四七
一一、扇襠附紙入……一五二
材料……一五二
製作の順序……一五三
裁ち方……一五三
貼り方……一五八
縫ひ方……一六二
一二、鉛筆差附紙入……一六八
材料……一六九
製作の順序……一六九

裁ち方……一六九
貼り方……一七五
縫ひ方……一八〇
一三、折り襠附大人持ち箱迫……一九〇
材料……一九一
製作の順序……一九二
裁ち方……一九二
貼り方……二〇一
縫ひ方……二〇四
一四、二寸五分押しロ附暴ロ……二一七
材料……二一七
製作の順序……二一八
裁ち方……二一八
貼り方……二一八
縫ひ方……二一九

應用……二二二
一五、子供持月形バツグ……二二二
材料……二二二
製作の順序……二二三
裁ち方……二二三
貼り方……二二五
一六、新オペラバツグ……二二七
材料……二二七
製作の順序……二二八
裁ち方……二二八
貼り方……二二八
縫ひ方……二三〇
紐の通し方……二三四
摘細工……二三七
器具と材料……二三七
器具……二三七
材料……二四〇
摘み方の區別……二四二
實習……二五二
一、蝶の簪……二五二
材料……二五三
製作の順序……二五三
作り方……二五四
二、葉書差し……二五七
材料……二五七
製作の順序……二五八
作り方……二五九
三、團扇……二六二

材料……二六二
製作の順序……二六二
作り方……二六三
四、筆立……二六六
材料……二六六
製作の順序……二六七
作り方……二六八
五、寫眞挟み……二七一
材料……二七一
製作の順序……二七二
作り方……二七三
六、柱掛……二七八
材料……二七八
製作の順序……二七九
作り方……二八〇
七、額……二八四
材料……二八四
製作の順序……二八四
作り方……二八八
堰細工……二九四
器具と材料……二九四
器具……二九五
材料……二九六
實習……二九八
一、松毬……二九八
材料……二九八
製作の順序……二九九

二、井戸に朝顔……三〇一
材料……三〇一
製作の順序……三〇二
三、親子猿……三〇四
材料……三〇五
製作の順序……三〇五
編物……三〇八
器具と材料……三〇八
器具……三〇八
材料……三〇九
組み方……三〇九
實習……三一八
一、日の丸銀貨入……三一八
材料……三一八
製作の順序……三一八
二、寒冷え知らず……三二二
材料……三二二
製作の順序……三二二
三、湛かけ……三二四
材料……三二四
製作の順序……三二五
儀式用折紙水引……三二八
器具と材料……三二九
器具……三二九
材料……三二九
儀式用折紙と水引の結ひ方の種類……三三〇

製作上の心得……三三〇
水引の色の種類と用ゐ方……三三〇
儀式用の水引の色の上下……三三一
祝儀用と不祝儀用との水引……三三二
水引の結び方……三三二
水引の取扱ひ方……三三四
水引の掛け方……三三五
實習……三三五
一、金銀包と紙幣包及び水引の掛け方……三三五
金銀包……三三六
材料……三三六
製作の順序……三三六
紙幣包……三三九
二、祝儀用紙幣包……三三九

材料……三三九
製作の順序……三四〇
三、不祝儀用紙幣包……三四三
材料……三四三
製作の順序……三四三
紙幣包の水引の掛け方……三四四
四、祝儀用の水引の結び方……三四五
甲　鮑結……三四五
結ひ方……三四六
乙　わな鮑……三四八
結ひ方……三四九
丙　かたがへし……三五〇
結ひ方……三五一
丁　二本鮑……三五二

おさいくもの新書

大妻一惠著

總論

私は、多年研究致しました手藝の中から、袋物、摘細工、堰細工、編物、儀式用折紙、水引の結方の六科目に就いて、講說して見たいと思ひます。その記述の方法は、成るべく難解に流れず、目で讀みながら直ぐにそれを手に移して、實際に働かし用ゐらるゝ樣、しかも親しく敎師に就いて個人敎授を受けるよりも一層よい效果を收め得らるゝ樣、何人にも解り易く獨習の出來る樣に說明することに致しました。

一體手藝は、これまで久しく世人から忘れられてゐたものでございますが、

結ひ方……三五三
五、不祝儀用の水引の結び方……三五四
逆鮑結……三五四
結ひ方……三五五
六、末廣包と蝶結……三五六
材料……三五六
製作の順序……三五七
包紙の折り方……三五七
蝶結の結び方……三五九
七、雌蝶雄蝶……三六二
材料……三六二
製作の順序……三六二
折り方……三六二
水引の結ひ方……三六八
終

目次

近頃に至り、裁縫が一般婦人に必要であると同樣に、手藝もまた缺くべからざるものであると考へられて來た樣です。それは實科女學校が年々增設せられ、手藝に志す婦人が歲々增加するので以て知られます。これ畢竟時代の要求ではございますまいか。

我が國現今の實際に徵すると、一方學術の蘊奧を究めることが必要であると共に、他方に於ては手先きを敏捷に働かせる習慣を養成し、僅少の時間をも無益に過さぬと云ふ良習慣を養成することが肝要で、且つまた之れを精神的に活用して人生を意義あるものたらしめる工夫をせねばならぬのでございます。人生は長い樣でも限りがあります。限りある人生に、成るべく多くの收獲を取り入れ樣としますには、短い時間でも無益に過さぬといふ心掛が極めて肝要であります。手藝は、精神の修養には最も良きもので、女子の精神を統一する卽ち凝念には最良の方法でございます。手先きを熱心に働かせてゐると、自然と無念無想の境に入り、邪念は一掃されてしまひます。世に謂ふ名作とか逸品と

か申す樣なものゝ出づるは、作者が無念無想の境に入つた刹那の作物でございませう私共の手藝もまた此境に入つた時には、これを入神の作とても申しませうか、意想外の美しい品物が出來上るのでございます。

されば、此の手藝は、單に手先きの働きではなく、心と手と同時に働かなければならないのでございまして、心に一點の邪念の萠してゐる間は、決して心と手との働きが一致する事は出來ません。この心と手との働きとを一致させるには熱心に仕事に取りかゝるのでなければなりません。その熱心があつて、心と手と一致して同時に働くのでございます。心と手と同時に働いて無念無想の境に入つた際に、始めて美しき作品は生れ出づるのでございまして、所謂上手下手といふことは熱心不熱心といふことに歸因するのでございます。

かう申しますと、手藝といふものは、決して簡單な技藝でなく、六ヶ敷いものゝ樣な感じが起りますが、心の邪念を拂ひ、いつも落ち着いた心で手を下しますれば、誰でも自然にその域に進むことの出來るものでございます。今各科

目に亙つて考へて見ましても、或る物は辛氣臭く、或る物は根氣負けがして癇癪が起つて致し方がないなどいふ人もございますが、それは自分の仕樣とする物に對して、俗にいふ氣乘りのせぬ故で、平つたく申せば熱心が足らないからのことでございます。手藝といふものは、一つは一つより趣味の深いもので、決して無味乾燥なものではございません。殊に儀式用折紙、及び水引の結方などに至つては趣味津々として汲めどもつきせぬ泉の如き感がありまして、極めて面白いものでございます。また日本婦人の美を發揮する國粹保存の上から見ても極めて必要なものでございます。

尙申したいことは限りなく多うございますが、それは他日に讓りまして、次きに各その科目に就いて說明をすることに致しませう。

一　袋物

袋物は、年々新意匠を案出して、新形、新形と工夫を凝されますので、その種類甚だ多く、一々數へ上げる事は困難でございます。從つてその用途も種々雜多で、小さい子供の腰に下げる巾着の類を始めとして、紙幣や銀貨を入れる金入、葉巴類または散步や旅行に携帶する手提類などその數に限りがありません。それでは、これを製作するに六ケ敷い技能を要するかと申しますと、その作品によつてそれ〴〵に違ひこそあれ、その法則に從つて致しさえしたなら、何人にも容易に出來、その上一般家庭などに於ては僅かの時間に、小切を應用して、美しい袋物を作ることも、さしたる難事ではないのでございます。廢物利用といふ上から申しましてもまた、袋物の製作は此上もない趣味多きものであると思ひます。

一、用具と材料

袋物の製作上につきて、必要なる用具と材料とを列擧致しますと、凡そ左の通りてございます。

用具

一、裁板　その大さは、各自の隨意てございますが、從來私が用ゐて最も便利だと感じて居りますのは、幅九寸、丈一尺三寸、厚さ一寸三分の朴の木て作つたものてございます。その用途は、袋物を製作するに當つて裁ち方、貼り方仕上げなどをすべてこの板の上て致しますのてございます。

二、裁庖丁　これは一名角庖丁ともいひ、型紙及び用布、その他すべての物を裁つ場合に用ゐるものてございます。

三、尺度　これは五厘目つきの曲尺一尺のものを用ゐ、目盛りをした方のなるべく地の薄いものが都合が宜しいのてございます。

四、長定木　これは赤樫て作りました幅一寸三分、長さ一尺三寸厚さ二分位の細長いもので、物を裁つ時の定木に致しますのてございます。

五、正直定木　これは張子紙やその他の心紙に用ゐる厚紙を正確に裁たうとする時に使用し、赤樫て作つた鉤の手に曲つたものてございます。製圖用の三角定木を用ゐましても差支へございません。何れにしても正確なものを撰ばなくてはなりませんのてございます。

六、糊板　これは朴の木て作りました幅三寸、丈六寸、厚さ六分の板てあつて、糊を練る臺に用ゐますのてございます。

七、糊篦　これは糊を練つたり、用布や型紙その他のものに糊をつける時に用ゐるもので、枯竹で作つたものが宜しうございます。

八、鏝　これは型紙を用布に貼りつけた時や、縫ひ目を折つた時、また用布の小皺や布目を正す時などに用ゐまして、鋼鐵の兩磨きが最も宜しうございます。

九、筋鏝　これは用布或は型紙に筋を入れるのに用ゐまして、鏝と同じ質の金て作るのてございます。

一〇、仕上げ篦　これは一名返し篦ともいひ、貼り込み、折り返し、引き返し、出來上りの物の形を正しくする時や仕上げなどに使用致します。而して長さ一尺許りの枯竹や煤竹の枯れたので作つたもので、その末端は、裏の方を圓く肉を持たせて削り、表の方を薄く削つて全體に磨きをかけて滑かに致したものでございます。

一一、目打錐　これには大小二種ございますが、何れも末端まで丸く尖つた細い錐で、線を引く時、折り返しの時、角を正す時、縫ひ目を揃へて仕上げをする時、また型紙に穴を明ける時、小馳を打つ時、用布に穴を明ける時などに使用致しますのでございます。

一二、叩き刷毛　これは型紙や用布にベタに糊をつけて貼る時、また塵を拂ふ時などに用ゐるのであつて、形の小さい柄のついたものを使用致します。

一三、大黒槌　これは樫の木で作つた小さい槌でございまして、縫ひ目の折りをしつかりとつける時や、ホックを打つ時に用ゐるのでございます。

一四、鐵錘　これは一名とんかちともいひ、鐵で作つた小さい錘でございまして、主として小馳その他の金具を打つて平にする時に使用致します。

一五、筒返し棒　これは櫻の木で作つた直徑四分、丈七寸の丸い棒でございまして、煙草入などの筒を返し、又仕上げをする時に用ゐます。尙附屬として直徑二分、丈七寸位の竹の細い棒もあるのでございます。

一六、返し竹　これは直徑四分、丈七八寸の丸竹で作り、一方の末端を四寸ばかり四つに割つて末端に丸味をつけて磨きをかけたもので、簪入または煙草入の筒を返す時に用ゐるのでございます。

一七、丸み型　これは幅一寸、丈一寸五分位の眞鍮で作つた極く薄い板で、恰ど裁縫用の袂形の樣なものでございます。これは被せその他の丸みの所に、形よく丸みをつけるのに使用致します。

一八、喰切り　これは小さい釘抜に刃をつけた樣な形のもので、小馳の足などの金を切る時に用ゐるのでございます。

一九、やつとこ　これは一寸喰切りの樣な形をしてゐて、その尖端が細く長く伸びて刃のつかない物でございます。これは小馳の足の曲りを直したり、或はホックの疵が大きすぎてその壺へ這入らぬ時に、その疵を挾み縮めたりなどするに使用致します。

二〇、輕便ホツク打　これは赤樫で作つた丸棒の尖端を丸く回めた物でございまして、その棒の長さは三寸五分、丸さは直徑六分で、回の形は皿形に回んだものと、直徑二分、深さ三分位に回んだものとの二種あります。これはホックを打ちつける時に、そのホックが潰れぬ樣に、この回みの穴を上から當てゝ槌で叩くのに用ゐるのでございます。

二一、鳩目拔　これは尖端の方に至るほど細くなつた卷煎餅に柄をつけた樣な格好の鋼鐵で作つたもので、その穴の尖端の緣に刃がつけてございます。而して、これには大小の二種ありまして、大の鳩目拔の方は、其丸穴の直徑が一分五厘で、小の方は五厘であつて、何れも用布に穴を明ける時に用ゐるのでございます。

二二、鉛臺　これは鉛で作つた幅一寸、丈一寸五分、厚さ五分のもので、鳩目拔で用布に穴を明ける時に、用布の下に敷く臺に致します。

二三、鐵臺　これは幅一寸、丈一寸二分、厚さ二分の鐵で作つたもので、ホックや小馳を打ちつける時に用ゐるのでございます。

二四、口金入　これは鋼鐵で作つたもので、その尖端が大きく丸く平に開き、それに丸い木の柄がついてゐます。墓口やバッグの口金をつける時に使ふのでございます。

二五、木型　これにはいろ〳〵の種類がありまして、製作するものによつて、それ〳〵寸法が異ひます。而してこの木型は袋物の製造に使用し、大抵朴や櫻の木で作るのでございます。

二六、膳り扱　これは朴の木や櫻の木で作つた幅二寸、丈六寸、その厚さは製作する箱の寸法に合せて二分、二分五厘、三分、三分五厘と數種ございます。

これは箱迫、紙挿などの千鳥がけその他南方の側へ糸をかけて縢り合せる場合に使用致します。

二七、仕上げ布　これはよく洗つて糊氣や垢を落し去つた奇麗な手拭か半巾て、仕上げをする時にそれを少し濡らして用ゐるのでございます。

その他、**針**、**針刺**、**指貫**なども要りますけれど、それ等は普通裁縫に使用するものと同樣でございますから、此處には省くことに致します。唯針箱は用具に長い物が澤山ありますので、私は、高さ一尺、幅は裁ち板の這入る位の大さ、長さは長定木を自由に入れられる程の物で、中に上げ底を一つつけ、その上げ底の下に用布を納める樣にしたものを工夫して用ゐて居ります。

材料

一、用布　用布の品質はその人の好みによつて、如何樣布地を用ゐても宜しいのでございますが、鍛をかけた時または僅かな濕りのために縮んだりするものは避けねばならないのでございます。

二、皮　皮にもいろ〳〵の種類がございますけれど、なめし皮、鹿皮、銀付のへがし皮などを用ゐるのでございます。

三、縫ひ糸　縫ひ糸は主として絹糸を用ひます。木綿糸や人絹などは絹糸と違つて締めが弱く、直ぐに切れ勝ちでございますから、能ふ限り用ゐないが宜しいと思ひます。

四、型紙　型紙は用布に貼るものと、心紙用のものとの二種を要します。即ち

（イ）**生判紙**　生漉きの日本紙で、すべて用布に貼る型紙に用ゐます。

（ロ）**張子紙**　漉き返し（浅草紙）の樣な紙で、地の厚いものと地の薄いものと凡そ十五種ばかりありまして、一々番號で區別され、一番張子紙よりも二番張子紙が厚く、三番張子紙よりも四番張子紙が厚いといふ樣に、その番號の順に、次第に厚くなります。これは主として心紙に使用し、普通三番張子紙

から八番張子紙までの間を用ゐます。然し場合によつては用布に貼る型紙とすることもあるのでございます。

(八)大判紙　張子紙に似た稍々地の薄い質の脆い紙でございまして、これは場合によつて心紙または型紙に用ゐます。

(ニ)板目紙　これは半紙の板目紙で、帳簿の表紙の様な厚紙でございまして、五枚貼り以上十枚貼り位までの物を心紙にすることがございます。

五、竹紙　これは竹の皮を薄く漉いて製し、その裏に紙を貼つたもので、濕れものを入れる袋をこしらへる場合に貼ります。

六、經木　これは木を極めて薄く板に削つたもので、襠などの心に用ゐます。

七、糊　盤石糊と姫糊との二種を用ゐます。而して盤石糊は、紙入、煙草入その他の口を貼る時や、蟇口或はバッグなどの口金をつける場合に用ゐ、姫糊は主として型紙を用布に貼りつける時に使用するのでございます。

その他、蟇口用やバッグ用の口金、ホック、小馳、護謨テップ、打ち紐、底鋲などが要りますが、それ等はすべて使用する時に説明することに致します。

二、各部分の名稱

着物や羽織の各部分に特殊の名稱がついてゐる様に、袋物にもまた各々の部分に次ぎの様な名稱があるのでございます。

一、胴　表用布全體を胴と申します。

一、脊　袋の後の所を脊といひ、また後とも申します。

一、前　胴の用布が前の方に折り返つた所、主として小馳かけの糸のついてゐる邊りを申します。

一、被せ　小馳及びホックのつく所で、脊の上の方を前の上に折り被せた所を申します。而して大被せ、小被せ、前被せなどの種類がございます。

一、襠　紙入などの兩方の横についた厚みを作り、物が多く這入る様に工夫

したものでございます。

一、**前口**　單に口ともいひ、袋の前の所につける口を申します。

一、**段口**　前口の下につく口を申します。

一、**上口**　前口の上につく口金體を申します。

一、**深口**　位置は上口と同じてございますが、その口の丈が袋の底まで届いてゐるのを申します。

一、**金留**　深口や上口などに上に五分ばかり用布を下向きにつけたものをいひ、これは紙入などを逆樣にした時、中から小錢の轉り出るのを受留めるためにつけたものでございます。

一、**馬乘**　口の所の右の方または兩脇を少し明けて縫ひ合せない所を申します。

一、**縢り**　袋の横或は口などを打ち紐または縢り糸で縢つたものを申します。

一、**山丈**　出來上りの袋の丈を、二つなり三つなりに折つた所の、その高さを申します。

一、**幅**　型紙や用布、また縫ひ上げた後の横の寸法を申します。

一、**丈**　すべて型紙や用布などのことを申します。

一、**裏**　外裏、口裏、中裏、奥裏、深口裏、被せ裏などの名がございます。

一、**繰り**　半月形その他さまざまの形に繰り込んてある所を申します。

一、**並の縫ひ代と折り返し**　並の縫ひ代とは一分五厘に標をつけ、その内を端から一分の深さて縫ふことをいひ、折返しとは、その標の通りに一分五厘の深さて、裏の方へ折ることを申します。

一、**包み**　折返しと略同じてございますけれど、その寸法が折返しの凡そ二倍(三)位てあります。これは心紙を包んて貼る時の略語てございます。

一、**型紙の名稱**　型紙を大別すると、表型紙、裏型紙及び心紙の三種がございます。而して時に同種類のもの、例へば表型紙ばかりが二枚以上もあることがございますから、説明の便宜上、私はそれに被せ表の型紙とか、縢り表の型

紙とかと、その部分の名稱を以て呼ぶことに致します。

また心紙には縫ひ合せない前に型紙の上に貼りつけるものと、縫ひ上つてからこれを差し込むものとの二種ございます。而してその貼りつけるものを增紙といひ、後から差し込むものを差し込み心紙と申します。而して差し込み心紙には、多く張子紙（五番より八番まで）を用ゐますので、また差し張子の名がございます。增紙には大判紙や張子紙を用ゐ、張子紙の場合には六番以下の地の薄いものを使用致します。

この他、袋物の種類によつて種々の名稱がございますけれど、今は特に必要なもののみに止めて他は省くことに致します。

三、製作上の心得

裁ち庖丁の使ひ方

裁ち庖丁で物を裁たうとする時は、右の手で裁ち庖丁を輕く握り、左の手で定木を抑へてゐながら、裁ち庖丁を定木の縁に添はせて向ふの方から手前の方へ靜かに引き、定木の縁を削らない樣に注意して裁ち落すのでございます。

型紙の裁ち方

型紙には極めて地質の厚い紙と普通の厚さの紙との二種ございまして、各々その裁ち方が異ひます。しかし何れの型紙も定木と裁ち庖丁とを用ゐて裁ちます。そして裁つに當つて考へねばならぬことは、尤も正確に、少しの狂ひもない樣に裁つといふことでございます。

一、普通の厚さの型紙の裁ち方

（イ）　型紙に裁たうと思ふ紙を裁ち板の上に縱に載せ、紙の右の端に長定木を當てゝ耳を裁ち落し、その裁ち落した端から尺度を當てゝ幅の寸法を定め、また定木によつて正しく裁ち落します。すると幅は必要な寸法通りて、縱の方は紙の丈だけのものになります。

（ロ）　次ぎにその裁ち切つた紙を中表にして幅を二つに折りますと、裁ち目と裁ち目と重なつた細長いものになります。この裁ち目を向ふに、輪の方を手前にして平に置きますと、左右の端はまだ裁つてございませんから、不揃ひになつて居ります。次にその右の端から一二分這入つた所を裁ち目の方で切り込みを入れまして、それをまた元の通りに開いて切り込みと切り込みとに定木を當てゝ正しく裁ちます。これで右の端は正しい角になつたわけでございます。

（ハ）　次ぎに再び幅を正しく二つに折り、製作仕様とするものゝ寸法通りに右の端から裁ち庖丁で切り込みを入れ、殘りの紙は再び開いて最後の丈を定木によつて正しく裁ち落します。すると必要な寸法通りのものが裁ち切れたことになります。

尚、被せの丸味または丈の終りの刳りになつてゐる場合には、いつも幅を二つに折つて裁たねばなりません。又場合によつては最初に丈を定めて裁ち、そして後に各々の標の切り込みを入れても差支ございませんが、この場合には丈の寸法を正確に裁つて置きませんと、丈が狂ひ易うございますから、十分の注意を要します。

二、厚い型紙の裁ち方　厚い紙を正しく裁ちますには、先づ紙の一方の角から一二分の所に正直定木、または三角定木を當て、その定木の通りに標をつけますと角が一つ出來ますから、この角から寸法を定めて裁ちます。而してこの厚い紙は、主として心紙や差張子などに用ゐますから　若しその形が正確に裁たれて居りませんと、如何程格好よく縫ひ上つてゐる袋でも、心紙通りに歪んだりなど致しましてよほど見苦しくなりますから、十分注意を拂つて裁たねばなりません。

糊のつけ方

一、型紙に糊のつけ方　型紙に糊をつける場合には、大抵その糊代は五厘以下でございまして、多くは縁に一寸つけて置きます。而して糊のつけ方は、裁

ち板に向つて右の小端に型紙の表の縁を糊代だけ出し、左手で型紙の糊代に近い方をしつかりと抑へ、糊篦の尖端に糊をつけて右手に持ち、型紙の手前から向ふの方へ、糊篦の皮の方で輕くつけて行きます。すべて糊はゴテ〳〵と澤山つけずに、うつすらと平につけ、用布に貼つた時に用布の表に滲み出ない樣にしなければなりません。若し糊がむらにつきました時には、篦の先きでそつと扱く樣にして平に致します。

留糊の仕方



（第一圖）

二、留糊の仕方　用布と型紙とがずれない樣に、特に留糊といふものを施すことがございます。留糊の仕方は、留糊を施さうと思ふ所を、裁ち板の小端に第一圖の樣にあてゝ、前の糊づけと同樣の方法で一直線に幅五厘位に糊をつけ、而して用布に貼るのでございます。

その他用布や型紙の面にベタに糊をつけることがございますが、それは製作する時にその方法を説明することに致します。但し用布にベタに糊をつけることを引き糊といひ、型紙にベタに糊をつけることをベタ糊と申します。

貼り方

型紙を用布に貼りつけますには、先づ型紙の周圍の縁に糊をつけ、（特殊の場合は此限りに非ず）用布の上へ平に載せ、周圍を平に貼る場合には掌でそつと平に抑へて鏝を當てゝ貼りつけます。また袋取りを施す時は、最初に兩横を鏝で貼りつけ、然る後丈の方へ袋取りをして鏝で貼りつけます。

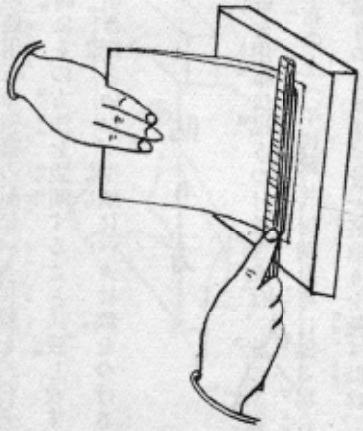
この型紙を用布に貼る時に注意せねばならないことは、用布が正しくなつてゐるかどうかを改めることでございます。卽ち、最初用布に鏝を當てゝ皺を伸し、用布の地の目を正しくして置き、その用布の地が縞物である時は、その縞物が曲らぬ樣に、また模樣ものであつたら出來上つてから、その模樣が逆樣に

ならぬ樣に注意致さねばなりません。

袋取りの仕方

袋取りといふのは、用布の丈の端を型紙よりも弛ませたり、つらせたりすることで、その弛ませる仕方を表の袋取りといひ、用布をつらせる仕方を裏の袋取りと申します。この袋取りは、表用布と裏用布とを合せて袋を拵へる時、表の方を弛み加減にし、裏の方を少しつり加減にして縫ひ合せますと、その袋が格好よく出來るから、そのために致すのでご、ざいます。

袋取りの仕方



（第二圖）

表の袋取りの仕方　表の袋取りは、型紙に用布の兩横を平に貼つて置き、袋取りを仕樣と思ふ所から、五厘位（地質または場合によつて多少の加減を致します）外側へ一寸目標をつけ、而して型紙の方を見て、袋取りをしない方の丈を左の手で持ち、右の手で尺度か仕上げ篦かを持ち、左の手を上にあげながら右の手の尺度で、型紙を先刻の目標に向つて左から右に數回第二圖の樣に扱き、型紙の緣が目標の所まで届く樣にして其處を貼りつけます。

二、裏の袋取りの仕方　裏の袋取りは、表の時と反對に、用布の方を見て表の時と同じ仕方て用布を扱きます。すると用布が少しつり加減になつて型紙が弛みますから、其の儘貼りつけます。

用布の裁ち方

一　用布の幅の割り方　袋物に用ゐる用布は、錦巾といつて、大抵曲尺二尺

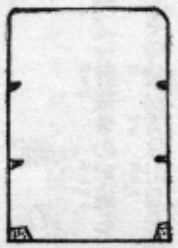
二寸五分幅の物を普通と致します。そしてこれを片つ端から入用なだけ裁ち切るか、または仕立る物によつて最初に相當にその幅を割りつけて裁ちます。その割りつけ工合によつて、二つ割、四つ割、五つ割、六つ割、七つ割の名稱がございます。而して三つ割といふのは、曲尺二尺二寸五分の布の幅を三つに割つたものをいひ、四つ割は四つに割つたものを、五つ割は五つに割つたものを、六つ割は六つに割つたものを、七つ割は七つに割つたものを各々申します。手提袋、煙草入及び箱迫などは多く三つ割を用ゐ、男持ちの懐中物などはそれより少し幅の狹い四つ割て作ります。五つ割は多く女持ちの懐中物に當て、六つ割は銀貨入や名刺入などの樣な小物に用ゐます。七つ割は楊枝入などの樣な最も小さい物ばかりを拵へます。その外、製作仕樣とする種類によつて適宜に幅を割りつけることもございます。而してその長さは仕立てる品物によつて長短さま〴〵に致さねばなりませんので、一定して居りません。

二、用布の裁ち方

型紙を貼りつけた用布を裁つには、その型紙から外に餘つてゐる用布を、裁ち目が曲らぬ樣に型紙通りに定木を當て〻裁ち庖丁で正しく裁ち落します。而して何れも用布は、型紙の形と同樣に裁たねばなりませんが、小さい切り込みや、丈の兩端の深い切り込みの所は、正直にこれを裁たずに、第三圖に示してある樣に其處だけ特に用布を殘して置きます。この圖中の黑い所は、用布を裁ち殘した部分を現はしたものでございます。

（第三圖）

用布の裁ち方



三、緣糊の仕方

用布を裁ちましたらば、その裁ち目がほつれたり、毳立つたりしない樣に、必ず裁ち目へ糊をつけて置かねばなりません。これを緣糊と申します。その方法は、用布の方を見て普通の糊づけの時と同じ樣に致しまして、その裁ち目へ糊をつけて置くのでございます。若し裁ち目がほつれたり、毳立つたり致しました場合には、直ぐに裁ち庖丁でほつれ糸や毳立つたものを裁ち取り、緣糊をして留めて置きます。

筋のつけ方

型紙の面に筋をつけるには、造花用の筋鏝または目打か鏝かを用ゐます。筋のつけ方は、筋をつけ繰とする部分に定木を當て、左の手で動かぬ樣にしつかりとそれを抑へ、定木の緣に添はせて向ふから手前の方へ引いてつけます。

縫ひ方

一、一針抜きの半返し　縫ひ代は所によつて異りますが、大方一分弱の深さで、その縫ひ方は針目を細かく、普通一針抜きの半返しに致します。しかし所によつては本返しにする所もございます。而して被せの丸味、その他の剩りになつてゐる所や角々は、一層針目を細かく、形の通りに正しく縫はねばなりません。

二、巻き縫ひ　また幾重にも用布が重つて厚くなつてゐる所、卽ち前口や段口、深口などの所は、其處へ縫ひかゝつた時に、その最初の針で一二回巻き縫ひを致します。巻き縫ひとは縫ひ目の緣へ糸をぐるりと絡ませることを申すのでございます。また所によつては隱くし綴、まつり縫ひ、普通のグシ縫ひ、裾けなどを用ゐることがございます。さうして縫ひ目を返して取る袱はすべて五厘でありまして、外になる方を五厘號かせ、中になる方を五厘引かせます。而してミシン機械のある方は、それを使用して縫ふ方が手際よく出來上りまです。

尙本書では、一分弱の深さで、一針抜きの半返し又はミシンで縫ふ場合には、便宜上「**並の縫ひ代で縫ひます**」といふ略語を用ゐることに致します。

縮せの取り方

袋の用布が折り返つて被さる所は、裏用布の方より表用布の方が、丈が長目になつて居りますから、その緣を兩方揃へて縫はうとすると、勢長い方を皺を寄せ

て縮めて縫ふ様になります。この皺を寄せて縮めることを縮せを取ると申します。而して縮せは手で縫ひながら取るのが普通でございますけれど、正確に出來上るのと、容易いために、裏用布と表用布との縁を貼り合せ（この貼り合せる時に目打錐の尖端で小さく皺を寄せて貼りつけます）而してミシンで縫ふ仕方もございます。

而して手で縫ひながら縮せを取る方法は、縮せを取らうとする場所へ來た時に、表の弛みを三つに分ける様な心持ちて、弛みの三分の一の所で巻き縫ひをし、かうして三針位縮せます。貼り合せて縮せを取りミシンて縫ふ方法は、縮せを取らうとする場所の前後を糊て貼りつけ、弛の所だけ一分弱の縫ひ代て、表に汚點の出ない範圍にうつすらと濕らせ、目打錐の尖端て幾つも小皺を寄せて上から鏝をかけ、小皺をおち着かせてからミシンて縫ふのてございます。（第四圖參照）

縮せの取り方

（第四圖）

仕上げの仕方

縫ひ上つたばかりの袋物は、此處彼處に凸凹が出來てゐたり、小皺が寄つてゐたり、ぶく〳〵に膨れたりしてゐて到底その儘では不手際て使用に堪へませんから、角々は目打錐の尖端て引き出したり、仕上げ篦て正したり、小皺を伸し、ぶく〳〵を取つたり致します。此樣にすることを仕上げをすると申します。而して袋物の上手下手は、この仕上げの仕方一つて定まる位に、仕上げといふものは大切なものてございます。

この大事な仕上げを上手にする方法は、縫ひ上げた袋物を最初五分間位、霧を吹いた程の生濕りの仕上げ布に包んて置きます。すると仕上げ布の濕りが、自然と袋物に移りますから、それを取り出し、目打錐と仕上げ篦とて形を正し、殊に縫ひ目の縁の凸凹になつた所などは、目打錐の尖端て正し、皺せの所は裏

大圖

用布の方から仕上げ篦でよく扱いて被さり易い樣に癖をつけ、すつかり形が調つた所で鏝をかけますと、小皺やふく〳〵は何處へいつたか分らない樣に直ります。この最後に鏝をかける時は、鏝を直接袋に當てずに、必ず半紙を一枚間に敷いてかけなければなりません。さうしないと、鏝をかけた後がピカ〳〵光つたり、糊のついてゐるのを知らずにかけて、袋を汚したりすることがあつて、實に危險でございます。

倘仕上げをするに當り　仕上げ布を濕らして使ふのは、その濕りが幾分か心紙や型紙や用布などに滲みて、それ等のものが自然としなやかになり、各部分が自分の思ふ樣に、自由に直し得るからでございます。若し乾いた儘のものを仕上げ仕樣と致しますなら、縫ひ目などは糊で堅くなつてゐて、形よく直すことが六ヶ敷うございます。

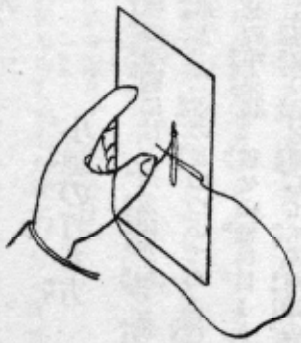
前にも申しました樣に、すべて袋物は正しく縫ふばかりでなく、この仕上げが最も大切でございますから、出來上つた際には必ず仕上を致さなくてはなりませんの。

小馳の打ち方

袋物の小馳には　海鼠附小馳と笹小馳との二種を用ゐます。海鼠附小馳は角製の爪と、二本の足のついてゐる海鼠形の金屬とからなり、その打ち方は、袋の被せの中央に、被せの縫ひ目より三厘下つた所の裏側に爪を當て、被せの表側から海鼠の足を通して爪の兩端の穴に貫き出し、鐵臺の上に載せて爪の兩端の用布をギユッと力を入れて下に抑へてゐながら喰切りて、その二本の足を爪の表と平に切り、用布を元通りに平にして足の切り口を平に豆鐵鎚で敲き潰して、海鼠と爪とが離れない樣に致します。若し海鼠の足が爪の穴より小さい樣な場合には、眞直ぐに切らずに少し斜に曲げて切り、これは打ちつけて置くのでございます。

小馳かけのつけ方

小馳かけは、小馳の爪をかけて止める糸で、その形は袴の相引の門留と同樣でございます。而してその長さは、小馳の幅より二分廣く作ります。これをつける方法は、先つ小馳かけをつけ樣と思ふ所へ、裏側の方からその寸法より少し大き目な張子紙を貼りつけ、鏝をかけて乾かし、乾いた所で小馳かけの寸法通りに、直接に糸を三本渡して縢りの下糸を掛へます。次ぎにその針を表の方に抜き出し、左の手に俛を持ち、右の手に針を持つて縢ります。その縢り方は、今抜き出した針についてゐる糸を、第五圖の樣にグルリと右の方に半圓を描いて向ふへ廻し、廻したらば自分の方に向かせて下糸をくゝらせ、半圓の中から抜き出し、糸を堅く締め、その締めが弛まぬ樣に、締め際から少し離れた所で、確かりと糸を拇指で抑へ、また糸を左の方からグルリと右の方に半圓を描いて向ふに廻し、次ぎに自分の方へ向かせて下糸をくゝらせ、半圓の中から抜き出して締めるといふ順序で、下糸を悉く縢るのでございます。而してもう一つて終るといふ所で、針を表から裏の方へ出して留め、その端を一寸程殘して切り、糊で貼りつけて置くのでございます。



小馳かけのつけ方

（第五圖）

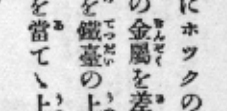
この小馳かけの糸の色は、裏用布と同じ色が宜しいのでございますが、場合によつては表用布と同じ色か、それに似よつた色の少し濃いものを用ゐる樣に致します。

ホックのつけ方

ホックは第六圖の樣な壺と疣との二つの部分から成り立ち、壺は更に甲（帽子の樣

な形の）乙（皿の様なもの）の二つの金属からなり、疣は丙（山の細い山高帽子）丁（凧孔のある山の様な形のもの）の金属から出来てゐます。而して壺は被せの方へつけ、疣は前の方につけます。

ホックをつけるには、始め袋の中に鉛臺を入れ、被せの縁から二分這入つた所（小鞄の時なら小鞄をつける場所の少し内側）に小鳩目抜を當てゝ大黒槌で叩き、被せと前とに小さい孔を明けます。（前の孔は小鞄の時なら小鞄かけのつく場所になります）次ぎに袋の中から鉛臺を取り出し、更に被せだけの下に敷き、いま明けた孔を中心にして大の鳩目抜で一層穴を大きく明け、その穴に裏の方から甲の金属を差し込みます。すると帽子の鍔の様なものが裏の方からつかへますから、その鍔の所を鐵臺の上に載せて、表に出てゐる帽子の山の様な所へ乙の金属を被せ、その上に輕便ホック打の皿の方を當てゝ大黒槌で輕く叩きながら嵌め込みますと、甲と乙とは離れない様に堅く附着致します。



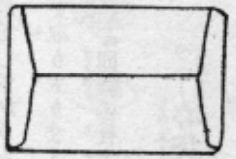
第六圖　ホックの解つけ方

次ぎにホックの疣の方をつけるには、先づ被せと同時に明けた穴に、裏の方から丙の金属を差し込みます。すると甲の時と同様に裏で鍔がつかへますから、鍔の所を鐵臺の上に載せ、丙の頭に丁の金属を被せ、その上に輕便ホック打の穴の方を當てゝ上から大黒槌で靜かに叩きながら嵌め込み、丙と丁とを堅くつけます。

尚ホックを用布に包まうと思ふ時は、表用布を直徑四分の圓形に裁ち、その裏に盤石糊をベタにつけ、その用布の中央にホックの壺の乙の表側を載せ、地質の柔かな手巾または手拭でその上を包み被せ、乙の壺になつたうつろの根本の所を糸でしつかりと結んで置き、後暫くしてから包み被せてあつた手布または手拭を取り去りますと、工合よくホックの乙に用布がついて居りますから、これを前と同様の仕方で袋につけるのでございます。

心袋の貼り方

心袋出來上り圖



（第七圖）

袋物が出來上りましたならば、これを膨らませて格好をよくするために心袋を中に入れます。心袋の出來上りの形は袋と同樣の形でございまして、生判紙で作ります。その作り方は、袋の後の脊丈の寸法の二倍を心袋の丈とし、幅は袋の幅より三分詰めた寸法へ、貼り目の折り代を凡そ三四分づゝ加へた寸法に生判紙を裁ち、中に薄幹または綿を入れてこれを狀袋の樣にして丈を貼り、更に幅の方を第七圖の樣に折つて貼りつけます。

帶紙の巻き方

帶は袋物が出來上つた時に袋の幅の中央へ帶として巻く紙でありまして、これは生判紙を用ゐ、その幅は品物によつて異ひますが、大抵四分若しくは五分位の寸法でございます。その巻き方は紙の丈の一方を袋せの下に差し入れ、もう一方の端をそれより後に廻し、袋を一廻り巻いて後の中央頃に來た時に紙を切り、切り端に糊をつけて貼つて置くのでございます。

この他製作上特に注意すべきことは各々の個所で説明することに致しまして實習に取りかゝりませう。

皿刻名刺入

皿刻り名刺入は　名刺を横にして入れる幅の廣い袋で、前を皿形に刻つたものでございます。

材料

名刺入はすべて中に入れる名刺の大さによつて丈の寸法も、幅の寸法も、それぞれ自由に割り出す樣になつてゐますから、從つてこれを要する用布の寸法は一定して居りません。そしてその割り出し方は、表用布の方は、幅は名刺の



（第八圖）

丈より六分廣く、丈は名刺の幅の二倍に八分加へたもの、裏用布の方は、幅は表用布と同寸法に裁ち、丈の方を一分五厘短かく致します。しかし、私は說明の都合上、幅一寸五分、丈二寸七分の大さの名刺を入れる名刺入を製作するものと假定して置きます。そしてこれに要する材料は次きの通りでございます。

表用布　幅六つ割のものを三寸八分。

裏用布　幅六つ割のものを三寸六分五厘。

他に七番張子紙と生判紙を少々づゝ。

製作の順序

一　裁ち方

（一）先づ表型紙の方から裁つことに致します。すべて表型紙とは表用布に貼りつける型紙のことを申します。この名刺入の表型は丈三寸八分（名刺の幅の二倍に八分加へたもの）幅三寸三分（名刺の丈に六分加へたもの）の略々四角なものでございます。

その裁ち方は、豫て用意してある生判紙を裁ち板の上に縦に置き、最初にその兩横を幅の寸法通り正しく裁つて置くために右の端から一分程這入つた所へ眞直ぐに定木を當て、それを動かない樣に左の手でしつかりと抑へ、右の手で裁ち庖丁を胴握りに持つて定木の右緣に庖丁の刃を着け、向ふから手前の方へ引きながら裁ちます。（以下裁ち方はこれに同じ）

これで右横だけは歪んだ所のない樣に眞直ぐに裁ち了りましたから、次きに幅を計つて左横を正しく裁ち落し、定めの幅に致します。卽ち定木を目分量で凡そ要り樣だと思ふ幅だけ靜かに左の方へずらせ、改めて右の手で尺度を持ち今裁ちました右端から必要な幅の寸法三寸三分を計り其處へ定木を當てゝそれを左の手でしつかりと抑へ、定木の右緣に裁ち庖丁の刃をつけ、前と同じ仕方

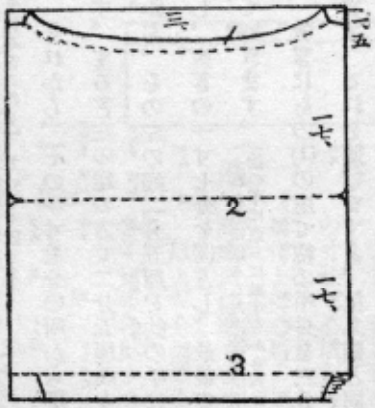
て眞直ぐに裁つのでございます。（第四圖三、製作上の心得中の型紙の裁ち方參照）

（二）　次ぎにその三寸三寸の幅を中表にして正しく二つに折り　輪の方を手前に、兩横の裁ち目の二枚重なつた方を向ふに、丈の兩端を左右にして裁ち板の上に置きます。そして丈の兩端はまだ裁ち揃へてありませんので不揃ひになつてゐますから、それを揃へるために、丈の右の端から　兩横の裁ち目の二枚重つた方で、眞直ぐに一分の深さの切り込みを入れます。斯う致しますと幅の兩横へ同時に切り込みがつきますから、それを擴げ、その切り込みから切り込みへ、切り込みが定木の右緣に行く樣に定木を當て、右の手で抑へながら、その間を裁ちます。

次ぎにこの右の端を裁つた紙を元の通りに幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、兩横の裁ち目の二枚重つた方で、今裁ち揃へた丈の端から三寸八分の所に切り込みを入れ、前と同じ仕方で不用な紙を裁ち捨てます。すべて何れの時でも、幅の兩横と丈の兩端を裁つ場合には、この方法を用ゐて裁ちます。

これで幅三寸三分、丈三寸八分といふ正しい形に生判紙が裁ち上りましたから、次ぎに縫ふ時の便利を計つて要所々々に切り込みを入れます。

（三）　卽ち、幅を正しく二つに折つて、前の樣に輪の方を手前に、兩横の裁ち目の二枚重つた方を向ふに、丈の兩端を左右にして裁ち板の上に置き、兩端の裁ち目の二枚重つた方で、丈の右の端から一分五厘這入つた所に二分の深さの切り込みを入れ、丈の右の端で二分五厘の深さになる樣に其處を鉤の手に裁ち落します。（これが反對に左の端で鉤の手になることもありますが、何れにしてもこれからはこの仕方を、單に『鉤の手に裁ちます』といふことに致します。且つ兩横の裁ち目の重つた方を致しますから、兩横へ



（第九圖）

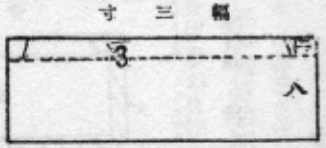
同時にっきます）

（四）次ぎにその一分五厘の鉤の手の所から一寸七分の所に五厘の深さに眞直ぐに切り込みを入れ、それを右の方に五厘斜に曲げて三角に裁ち落します。（これから斯うして三角に切り込みを入れることを、單に『切り込みを入れる』といつて置きます。）

（五）それから、その一寸七分の所から更にまた一寸七分の所に切り込みを入れます。すると左の端の方で二分五厘殘りますから、後の一寸七分の切り込みの處から、その左の端二分五厘を鉤の手に裁ちます。而して初めの一分五厘を(1)とし、次ぎの一寸七分を(2)とし、最後の一寸七分を(3)と、各々便宜上符號をつけて置きます。（これからは斯うした符號をつける場合には、略して(1)(2)(3)と書き入れることに致します。）

（六）次ぎにその(1)の處で幅の中央を三分の深さにして兩横へ凪形に格好よく刻りします。これを擴げますと、第九圖と同樣な表型が出來上ります。

（七）次ぎに裏用布に貼る裏型を裁ちます。裏型紙は幅三寸、丈一寸に生判紙を裁ち、例の如く幅を二つ折りにして丈の右の端から、二分(3)の所に切り込みを入れ、其處を鉤の手に裁ちます。而してこれを擴げますと、第十圖と同樣な裏型が出來るのでございます。



（第十圖）

（八）次ぎに七番張子紙を幅三寸、丈一寸六分五厘の寸法で心紙を一枚裁つて置きます。心紙の裁ち方は製作上の心得の項で既に委しく述べて置きましたから此處には略します。

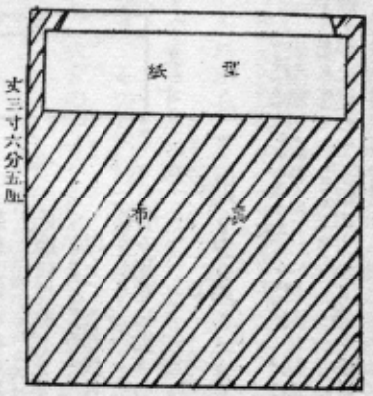
以上で全部裁ち終りましたから、表と裏との型紙を各々用布に貼りつけます。

二　貼り方

（一）表型紙の（紙の表の方に。裏型も同じ。）周圍に緣糊をつけ、表用布の布の裏の上に載せて兩横を平に貼つて型紙の方から鏝をかけ、丈の兩端は表に袋取つて貼りつけます。（卷頭三、製作上の心得中の袋取りの仕方參照）

（二）次ぎに裏型紙にも表型紙と同樣に糊をつけ、第十一圖の樣に周圍を平に貼ります。この時裏型紙は裏用布より幅が三分狹くしてありますから、その三分を二分して、兩横へ各々一分五厘づゝ用布を殘して置きます。

裏用布に裏型を貼り込みの圖



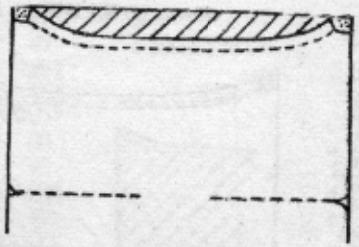
（第十一圖）

（三）裏表共に貼り終りましたならば、表用布を表型通りに、（但し鉤の手及び切り込みの所はそのまゝ用布を殘して置きます）裏用布は裏型の兩横へ一分五厘づゝ用布を殘して三寸三寸の幅に兩横を裁ち、各々裁ち目に、裁ち目がほつれない樣に緣糊を施して置きます。

三　縫ひ方

（一）表型の(1)(2)(3)の切り込みの所、卽ち第九圖の點線の所に定木を當てゝ鑢で筋を入れます。

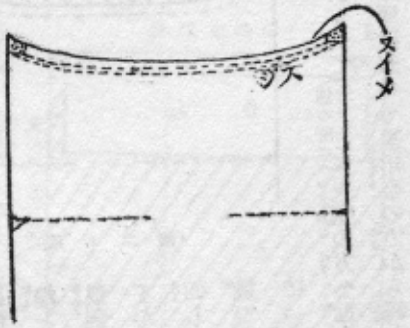
皿剝りを表と裏と貼り合せの圖



（第十二圖）

（二）次ぎに皿形に剝つてある表型の(1)の所に糊をつけ、裏用布の型紙を貼らない方の丈の端と重ねて中表に貼りますと、第十二圖の特に皿剝りの上の所で裏用布は眞直ぐになつてゐますから、これは表に合せて裁ち捨てます。（第十三圖）而して一分の縫ひ代（筋から五厘外側）て一針抜きに縫ひ、縫つた糸を切らない程度の深さて第十四圖の樣に一分置きに眞直ぐに切り込みを入れ、一分五厘の折り代て（筋の所になります）表型の方へ貼りつけ、第十五圖の樣に外表に返して表用布を五厘恍かせて裏用布の方から鑢をかけます。此處は後に袋の口になる所てございます。

裏を表の皿刺りに合せて裁ち捨
て筋より五厘端を鐶ひ合せの圖



（第十三圖）

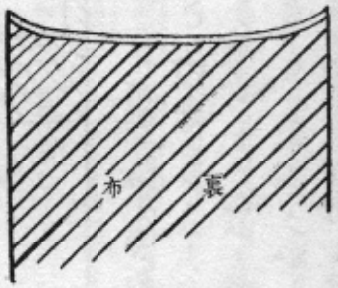
鐶ひ代に切り込みを入れたる圖（實物大）



（第十四圖）

（三）　次ぎに表用布の方を下に、裏用布の方を上にして、皿刺りの所を向ふにして第十五圖の樣に裁ち板の上に載せ、表型の(1)の筋から(2)の筋までの兩横の紙に糊をつけ、裏用布の方を少しつれ加減にして外表に貼ります。

鐶ひ代を筋より型紙の方に折り返し貼りつけて外表に返し表を三厘程かせて裏より見たる圖



（第十五圖）

（四）　次ぎに今貼り合せました裏用布の兩横に、各々糊をつけて中表に折り返して平に貼ります。而してその貼りつけた所は第十六圖の樣に、表用布が一枚と、裏用布が折り返つて二重になつてゐますから、要するに用布が三枚重つて居り且つ裏用布に貼つてある裏型の(3)の筋が、皿刺りの表型の(1)の筋の上に重なつて居ります。

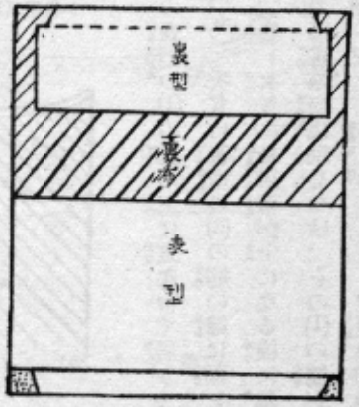
（五）　次ぎに裏型の(3)の筋の端に糊をつけて裏型の方へ貼りつけます。

（六）　次ぎに表用布が上になる樣に裁ち板の上に置き換へ、兩横の(1)の筋から(2)の筋の間に糊をつけ、その(1)の筋と(3)の筋とが重なる樣に(2)の筋から中表に折り返して平に貼りますと、裏の(3)の筋と、表の(1)(3)の筋とが正しく重つて

ねます。

（七）　以上で袋の大體の形に貼り上りましたから、その兩横を一分の縫ひ代で一針抜きに或はミシンて縫ひます。（本書では特に一分の縫ひ代のことを『並の縫ひ代』といひ、一針抜き或はミシンで縫ふのを唯『縫ひます』といふことに致します。）

（第十六圖）



而して裏用布の方から、縫ひ目のすぐ内側に定木を當てゝ眞直ぐに筋を入れ、その筋通りに縫ひ代を裏用布の方へ折つて叩いてよく折りくせをつけ、そして表に返します。

（八）　その表に返しました袋を、兩横がキチンと同じ寸法になる様に仕上げ篦て正しくし、そして前に裁つて置きました心紙を裏用布と表用布との間へ差し込みます。心紙の差し込み方は、先づ心紙の兩横に各々一分幅て糊をつけ、その糊を兩横の縫ひ目につけて、表用布と兩横の縫ひ目の間へ入れるのてございます。（以下同方法でございますから單に『心紙を差込みます』と略します）

（九）　次ぎに表用布の(3)の筋より端の二分五厘の用布てその心紙と兩横の縫ひ目とを包んて目打錐の尖端てはり、そして表用布を三厘弛かせて、裏用布と貼り合せ、裏用布の方から鏝をかけます。而してこの心紙を差し込みました時に、心紙が裏用布の丈よりも伸び出ますと、出來上りが見苦しくなりますから、伸び出ない様に、注意を要します。（以下同様でございます）

（一〇）　これてすつかり縫ひ上りましたから霧を吹いた位の程度に濕した仕上げ布に暫く包んて置き、袋にうつすらと濕りが移つた頃を見計らつて（凡そ十五分間位）仕上げ布の中から取り出し、目打錐て角々をくつきりと出したり、縫ひ目の凸凹を仕上げ鏝て直したりなど致しまして、十分格好を正しくしてから鏝をかけます。その時袋が汚れない様に生判紙を一枚敷いて、その上から鏝をかけます。この方法を仕上げといひ、そして仕上げ布に包んて袋を濕しますのは、そ

の濕りのために用布や心紙がしなやかになり、形が整ひ易くなるからでございます。

仕上げがすみますと、皿刳り名剌入は全く出來上つたことになりますから、帶紙を致して置きます。

四應用

この皿刳り名剌入の割り出し寸法を、名剌の代りに電車の切符で致しますと電車の切符入が出來ます。また皿刳りの所を半月形或は流水形に工夫すると、趣味豊かな面白いものになるのでございます。

楊枝入

楊枝入は高さ九分五厘の所から被せの樣に丈の端を折つた臥形の袋で、その右横に馬乘りをつけて楊枝の出し入れを自由にしたものでございます。

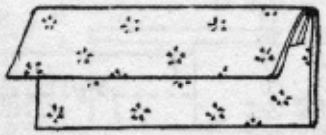
材料

表用布　幅七つ割のものを四寸。
裏用布　幅七つ割のものを三寸七分。
他に生判紙と七番張子紙とを少々づゝ。

製作の順序

一　裁ち方

楊子入出來上り圖



（第十七圖）

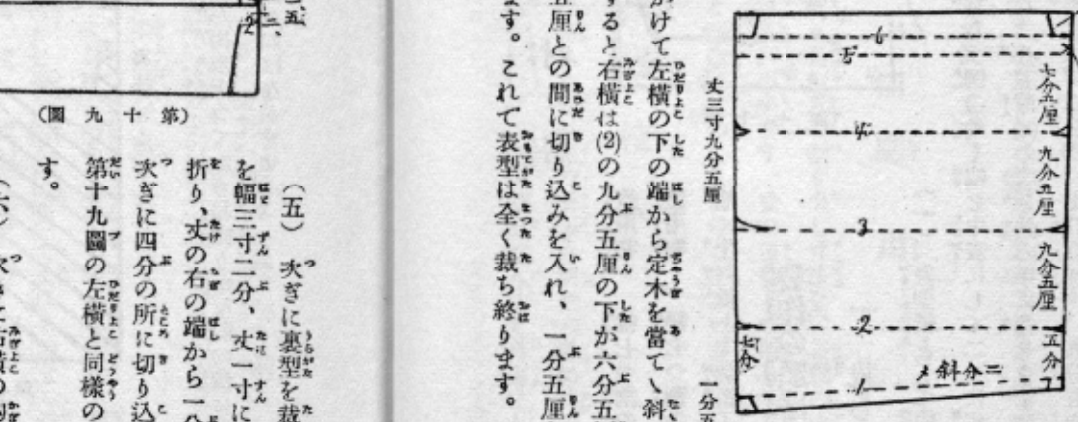
（一）　表型紙として幅三寸二分、丈三寸九分五厘に生判紙を裁ち、例の如く幅を中表にして二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から二分五厘(6)の所を鈎の手に裁ちます。

（二）　次ぎに、二分(5)、七分五厘(4)、九分五厘(3)、九分五厘(2)、七分(1)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鈎の手に裁ちます。而してこれを擴げま

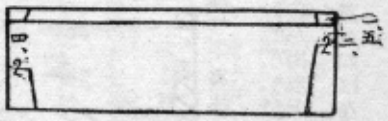
すと、その兩横が第十八圖の左横と同樣になつて居りますから、その右横を圖の樣に斜に裁ちます

（三）　卽ち第十八圖の樣に、紙の表を裁ち板につけて縦にして載せ、右横の下の端から一分五厘上つた所に標をつけ、その標を目がけて左横の下の端から定木を當てゝ斜に裁ち落すのでございます。

（四）　すると右横は(2)の九分五厘の下が六分五厘になりますから、それを五分と一分五厘との間に切り込みを入れ、一分五厘を左横と同じ樣に鉤の手に裁つて置きます。これて表型は全く裁ち終ります。



（第十八圖）



（第十九圖）

（五）　次きに裏型を裁ちます。表型と同樣の生判紙を幅三寸二分、丈一寸に裁ち、中表にして幅を二つに折り、丈の右の端から一分五厘(1)の所を鉤の手に裁ち、次きに四分の所に切り込みを入れ、而して擴げますと第十九圖の左横と同樣のものが兩横に裁たれて居ります。

（六）　次きに右横の鉤の手から圖の樣に二分の所に切り込みを入れ、其處と左横の四分の切り込みとを(2)と致して置きます。

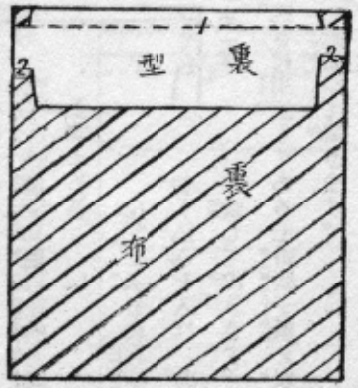
（七）　次きに用意してある七番張子紙を取つて幅二寸九分、丈一寸八分五厘の心紙を一枚裁つて置きます。

これて裁ち方は終りましたから、表型と裏型とを、各々用布に貼りつけますのでございます。

二　貼り方

（一）　表型の（紙の表）周圍に五厘の幅に糊をつけて表用布の上に載せ、兩横を先に裁つて鋏をかけ、丈の兩端は少し表に袋取つて貼ります。而して型紙を表用布の上に載せました時に、二分丈の短かい方が右の下に、長い方が左の下になつて居なければ袋が出來上つてから馬乘りが反對の側について非常に見苦しくなりますから注意せねばなりません。

裏布に裏型を貼り込みの圖



（第二十二圖）

（二）　次きに裏型へ表型と同樣にして糊をつけ、第二十圖の樣に裏用布の丈の一方の端に鉤の手の端を合せて四分の方を左の下に、二分の方を右の下にして周圍を平に貼つて鏝をかけます。

（三）　次きに表用布は表型の通りに周圍を裁ち、裏用布は(1)の鉤の手の端と幅の兩横とを裏型通りに裁つて丈はそのまゝ長く續けて置き、何れも周圍のほつれを防ぐ爲に、縁糊を施して置くのでございます。

三　縫ひ方

（一）　表型の(1)(2)(3)(4)(5)(6)と、裏型の(1)との切り込みに各々筋鏝で筋を入れます。

（二）　表型の二分斜になつてゐる所へ五厘の幅に用布の方へ糊をつけ、裏用布の型紙を貼つてない方と中表にして幅を揃へて貼り、表用布を手前にして並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ終りの(2)の筋を一分切り込んで置きます。この左横は後

に馬乘りになる所でございます。而して左横の端て裏用布が表用布より二分長くなつて居ますから、それを表型に合せて斜に裁ち落し、表型の(1)の筋から裏型の方へ折つて貼りつけ、左横も五厘の折り代で同じ方へ折り、外表に返して表用布の方から錐をかけます。

（第二十一圖）

（三）次ぎに今縫つた斜の端を向ふに、表用布を下に、裏用布を上にして、第二十一圖の樣に裁ち板の上に載せ（馬乘にするやうに縫つた所が左の上になつてゐます）今縫つた所から表型の(5)の筋までの兩横に五厘の幅で糊をつけて裏用布と外表にして貼ります。

（四）次ぎに裏用布の布表の兩横に糊をつけ、裏用布を中表に折り返して裏型の(2)の筋と表型の(1)の筋とが左右で各々重なる樣にして、平に貼ります。（この時、用布は三枚重なります。）

（五）次ぎに裏型の(1)の筋を裏型の方へ折つて貼りつけます。

（六）次ぎに裏用布を下に、表用布を上にして裁ち板の上に置き、表用布の布表の兩横に、五厘の幅で(3)の筋まで糊をつけ、その(3)の筋から用布を中表に折り返して(2)の筋と(4)の筋とを兩横ともに重ねて平に貼り、(4)の筋から(5)の筋へ移らうとする所で五厘縮せて（製作上の心得綸せの仕方參照）殘りの用布を平に貼ります。尙、(5)の筋からは裏用布と中表にして(6)の筋まで貼り合せます。

（七）以上で略貼り上りましたから兩横を並の縫ひ代で縫ひ、裏用布の方から縫ひ目のすぐ内側に筋をつけて、その筋から裏用布の方へ折り、大黒槌で叩いて折りくせをつけ、而して外表に返します。

（八）次ぎに前に裁つてある心紙の兩横に一分の幅で糊をつけ、糊の方が縫ひ目につく樣にして縫代よりも表用布の方へはいる樣にして差し込みます。

（九）　而して表用布の(6)の筋の端の縫ひ代て心紙と兩横の縫ひ目とを目打錐の尖端てくるんて貼り、心紙の厚さだけ表用布の方を袱かせて表用布の(1)の筋と貼り合せます。

（一〇）　これて全く袋が出來上りましたから丁寧に仕上げを致し、五厘だけ縮せました山(4)の筋の所。から二つに折つて帶紙を致して置くのてございます。

袱紗挟み

袱紗挟みは、丈の割に横幅の廣い長方形のもので、その一方の横は打ち紐で縢り、他の一方は笹形の爪て留める樣にしたお茶の袱紗を入れるものてございます。

材料

表用布　幅四つ割のものを六寸五分。

裏用布　幅四つ割のものを五寸九分。

他に笹爪一個。縢り絲(細い)一尺五寸。

生判紙と八番張子紙とを少々づゝ。

製作の順序

一　裁ち方

（一）　**表の型紙を裁ちます**　幅五寸一分、丈六寸二分に生判紙を裁ち、例の如く幅を中表に二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、三分(1)、二寸七分(2)、二分(3)、二寸七分(4)の順に切り込みを入れ、殘りの三分と、初めの三分(1)とを各々鈎の手に裁ちます。これを擴げますと第二十三圖と同樣な表型になります。

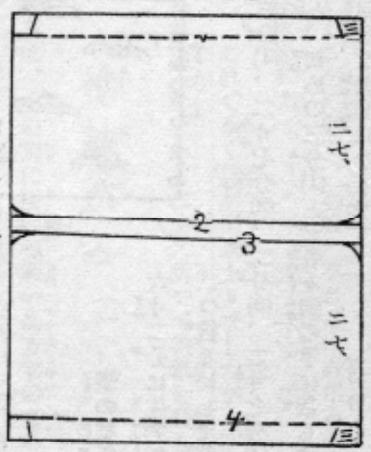


（第二十二圖）

袱紗挟み出來上り圖

（二）　次ぎに裏型紙を裁ちます。表型紙と同じ生判紙を幅五寸、丈五寸八分

に裁ち、中表にして幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から一分五厘(1)、二寸七分(2)一分(3)、二寸七分(4)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘と、初の一分五厘(1)とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと



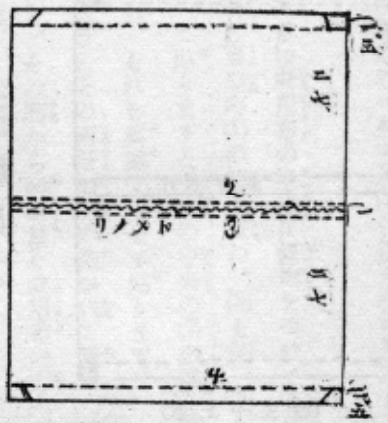
（第二十三圖）

第二十四圖と同樣な裏型になります。

（三）次ぎに八番張子紙で、幅四寸八分、丈五寸六分の心紙と、幅四寸七分、丈一分の心紙とを一枚づゝ裁つて置きます。

これで全部裁ち終りましたから、これを用布に貼るのでございます。

二　貼り方



（第二十四圖）

（一）表型の（紙の表の方に）周圍に糊をつけ、表用布の上に載せて兩横を平に貼つて鏝をかけ、丈の兩端は表に袋取つて貼ります。

（二）次ぎに裏型の周圍に糊をつけ、丈の中央に留糊を一本施し（第二十四圖參照）て裏用布の上に載せ、先づ兩横を平に貼つて鏝をかけ、留め糊の所にも平に鏝をかけ、丈の兩端は裏に袋取つて鏝をかけます。

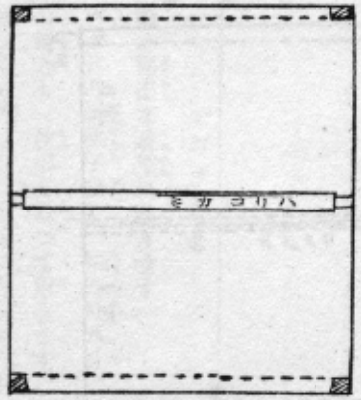
（三）次ぎに裏用布を裏型通りに、表用布を表型通りに各々その周圍を裁つてほつれを防ぐために縁糊を施して置くのでございます。

三　縫ひ方

（一）表型の(1)(2)(3)(4)、及び裏型の(1)(2)(3)(4)の切り込みに、筋鑽で筋を入れます。

（二）次ぎに幅四寸七分、丈一分の心紙にベタ糊をつけて、第二十五圖の樣に裏型の(2)の筋と、(3)の筋との間の幅の中央に貼りつけます。（心紙は裏型より三分幅が狹く裁つてありますので、これを幅の中央に貼りますと、兩横が一分五厘殘ります。）

裏布に裏型と表子挟とをはり込みの圖



（第二十五圖）

而して丈の兩端の一分五厘(1)の筋と(4)の筋とを裏型の方に折つて各々別々に貼ります。

（三）次ぎに表用布の兩横に縁糊をつけて裏用布の上に中表にして載せ、表型の(1)の筋と裏型の(1)の筋と重ね、(2)と(2)、(3)と(3)、(4)と(4)の筋も各々重ねて兩横を揃へて貼りますと、丈の中央の(2)の筋と(3)の筋との間で表用布が一分弛みますから、それを其處で縮せて貼ります。

（四）次ぎにその兩横を並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ目の直ぐ内側に定木を當てゝ筋を引き、その筋から縫ひ目を裏用布の方へ折つて大黒槌で叩いて折りくせをつけ、而して外表に返します。

（五）次ぎに幅四寸八分、丈五寸六分の心紙の丈の中央に一本横に筋を入れその筋から五厘づゝ隔てゝ兩方へ三本づゝ、都合七本の筋を入れます。而して兩横に一分の幅で糊をつけ、糊のついた方が兩横の縫ひ目につく樣にして、表

型と兩横の縫ひ代との間へ差し込みます。而して表用布の丈の兩端の三分て兩横の縫ひ目と共に包んて貼りつけます。

（六）次ぎに一方の横を、三分の隔たりの千鳥がけて縢ります。（千鳥がけの仕方はこの項の終りに記則してございます）

（七）次ぎに縢り絲の殘りを二寸五分ばかり裁ち切り、それを二重にして第二十六圖の様に笹爪の穴に通し、二重にした絲の輪の中に絲の二本の端をくゞらせて笹爪が外れない様に致して置きます。

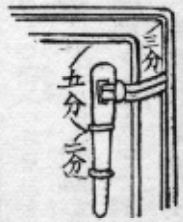
笹つ爪けにた打る紐圖を

（第二十六圖）

（八）次ぎに千鳥がけをしない方の横の、丈の端から三分這入つた所に、目打錐で小さい穴をあけ（表用布と裏用布との縫ひ目に。）その穴に笹爪についてゐる絲の端を通します。そして笹爪と用布との間が五分はなれる様にして殘りの紐には糊をつけて裏型に貼り、剝れない様に鍛をかけて乾かせて置きます。

（九）次ぎに笹爪と向ひ合つた側て横から一分這入り、丈の端から五分の第二十七圖の所と、其處から二分離れた所とに、笹爪をかける爲に、笹爪の這入るだけの幅の門抜き止めを、一つづゝ拵へて置きます。（後圖三、製作上の心得中の門抜き止めの仕方を參照。）

笹爪と門抜き止めの實物大の寸法



（第二十七圖）

（一〇）次に丈の兩端の表用布の方を、用布の厚みだけ袱かせて裏用布と貼り、丁寧に仕上をして形を整へますと、袱紗挟は全く出來上つたのてあります。

四　千鳥がけの仕方

千鳥がけは今後種々な所に用ゐますから、この袱紗挟みに就いて、委しく說明して置きたいと存じます。而して、二分の隔たりに致しましたり、三分の隔たりに致しましたり場合によつて色々てございますが、その縢り方は、何れも同樣な方法てございます。この袱紗挟みは三分の隔たりて縢ります。

（一）先づ用布の間に挟む縢り板の横に、鉛筆で一分五厘づゝの目盛りを致して置きます。

（二）次ぎに表用布の丈の中央の(2)と(3)との筋の中央の所で、横の端から五厘這入つた所に標をつけ、其所から第二十八圖の樣に三分づゝ隔てゝ丈の一方の端の(1)の筋の方へ標をつけます。すると最後に一分餘り殘ります。（若し二分の隔たりで縢る場合であつましたら、二分置きに標をつけます）

縢り方



（第二十八圖）

（三）次ぎに(2)と(3)との筋の中央から丈のもう一方の端の(4)の筋の方へ初め一度だけ一分五厘隔てゝ標をつけ、その標からは前と同樣に三分づゝの隔たりで標をつけますと、最後に二分五厘殘ることになります。

（四）次ぎに用意してある縢り絲（細い打紐）を縢り針に通して表用布と裏用布との間から針を入れ、表用布の(2)と(3)との筋の中央の端の所へ抜き出し、表用布を外側にして目盛りをした一分の厚さの縢り板を間へ挟んで二つに折り、前の針を一分五厘の標の所へ、表から裏へ抜き出して絲を引き、その針を三分の標の所に表より絲と(2)の筋との間から表に出して千鳥がけを一つ掛へます。

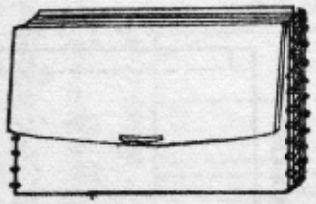
（五）次ぎにその針を向ひ側の、(2)の筋から初めての標へ、同じ方法で千鳥がけを一つ掛へ、次ぎにまた、前の一分五厘の所の次ぎの標へ針を抜いて千鳥がけを一つ掛へ、次ぎにはその向ひ側の前に掛へました千鳥がけの次ぎの標へ、といふ樣に、兩側の標から標へ交叉させて千鳥がけを致します。

（六）かうして兩側の標をたどつて丈の兩端まで縢り、(1)の筋の方の最終の標の所（端から一分餘り這入つた所）になりましたならば、絲を止めなければなりません。その止め方は、(1)の筋の方のその最後の標の所で千鳥がけを一つ致しまして、その針を直ちに(3)の筋の方の最後の千鳥がけから（丈の端から二分五厘這入つた所。）一分五厘離れた、即ち丈の端から一分這入つた所（(1)の筋の側の最終の千鳥がけと眞直ぐに向ひ合つた所）に、千鳥をする樣にして抜き出し、次ぎに(1)の側から來た最後の絲を下の方から上の方に跨らせてまた用

布の裏から表に抜き出し、少し引きますと小さな輪が出來ます。次ぎにその輪に表側から針をくゞらせて(1)の側の最後の千鳥がけの絲と同じ穴に、千鳥がけをする樣な仕方で針を通し、(3)の側でしたのと同樣な仕方で、千鳥がけの絲を跨らせて裏から型紙の方へ抜き出しますと、第二十八圖の樣に千鳥がけが止ります。而してその抜き出した絲は五分ばかり端を殘して切り捨て、その五分には鏝をつけて裏型の方へ貼りつけ、鏝をかけて置きます。これで千鳥がけは止まりますが、最後の止めの所で、同じ穴に幾度針を通しても他の絲にさし込まない樣に注意致さねば、過つて他の絲にさし込みますと、絲を引つ張つた時に絲が來なくて餘計な手數を要することが起つて面倒になります。猶、絲の端を結んで留めますと、其處だけ高くなつて出來上りが甚だ見苦しくなりますから、決して結んではなりません。

被せ附兩縢り紙入

被せ附兩縢り紙入とは、兩横を細い打紐で縢り、眞中に被せつきの隱しをつけた紙入でございます。



（第二十九圖）　被せ附兩縢り紙入出來上り圖

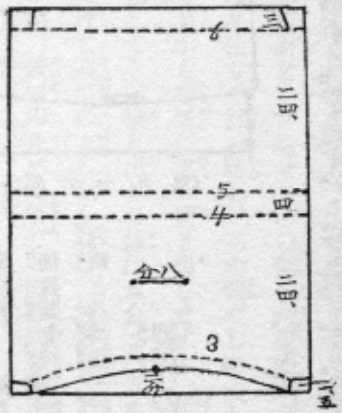
材料

表用布　幅五つ割のものを八寸五分。
裏用布　幅五つ割のものを一尺二寸。
他に縢り絲(綢い打紐)を二尺。六分の小驅を一つ。生判紙と八番張子紙とを少々づゝ。

製作の順序

一　裁ち方

(一)　先づ縢り表の型紙から裁ちます。用意してある生判紙を幅四寸四分、丈五寸六分五厘に裁ち、例の如く中表に幅を二つ

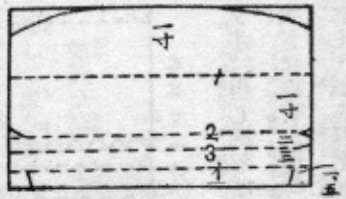


（第三十圖）

に折つて裁ち板の上に載せ右の端から、三分(6)二寸四分(5)、四分(4)、二寸四分(3)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘と初めの三分(6)とを鉤の手に裁ちます。而して(3)の端の中央で二分にして皿形に裁ち捨てます。

これを擴げますと、第三十圖と同樣な襠り表の型紙になります。

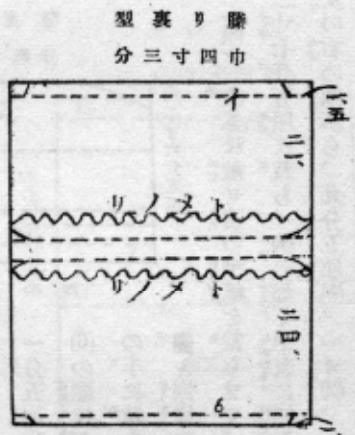
（二）次ぎに被せ表の型紙を裁ちます。幅四寸四分、丈二寸六分五厘に生判紙を裁ち、襠り表と同樣に幅を二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一寸(1)、一寸(2)、二分(3)、三分(イ)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第三十一圖と同樣な被せ表の型紙になります。但しまだ上の楕形は裁たないて置きます。



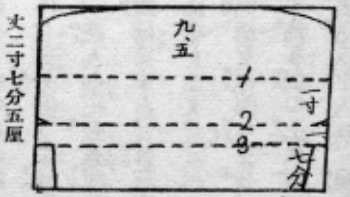
（第三十一圖）

（三）次ぎに襠り裏の型紙を裁ちます。表型と同じ生判紙を幅四寸三分、丈五寸一分に裁ちすべて表型と同樣の仕方で、幅を中表にして二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から一分五厘(イ)、二寸一分(4)、三分(5)、二寸四分(6)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第三十二圖と同樣な襠り裏の型紙になります。

（四）次ぎに被せ裏の型紙を裁ちます。表型と同じ生判紙を幅四寸三分、丈二寸七分五厘に裁ち、例の如く中表に幅を二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、九分五厘(1)、一寸(2)、一分(3)の順に切り込みを入れ、殘りの七分を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第三十三圖と同樣な被せ裏の型



（第三十二圖）



（第三十三圖）

紙になります。但し楕形は表型と合せてこれから裁ちます。

（五）次ぎに被せ表型（第三十一圖）と、被せ裏型（第三十二圖）とを各々正しく幅を重ねて二つ折りにして裁ち目を揃へて重ね、一分五厘の楕形に裁ちます。此處は後に被せになる所でございます。

（六）次ぎに心紙を裁ちます。八番張子紙を以て、幅四寸一分、丈一寸八分の心紙（い）と、幅四寸一分、丈五寸二分の心紙（ろ）と、幅四寸一分、丈三分の心紙（は）とを各々一枚づゝ裁つて置きます。

以上で全部裁ち上りましたから、これを用布に貼りつけるのでございます。

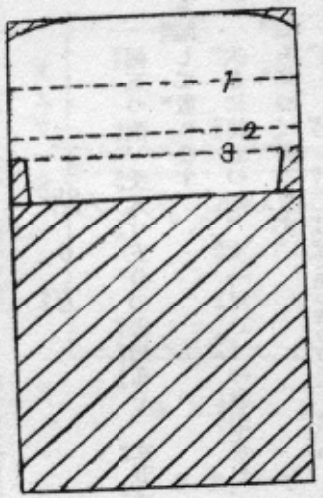
二　貼り方

（一）幅五つ割、丈八寸五分の表用布を、丈五寸八分と、二寸七分との二つに裁ち離して置きます。

（二）次ぎに幅五つ割、丈一尺二寸の裏用布を、丈五寸一分と、六寸九分の二つに裁ち切つて置きます。

（三）次ぎに脇り表の型紙（袱の表の方に。）（裏型も同じ。）緣糊をつけ、丈五寸八分の表用布の上に載せて先づ兩横を手に貼つて鏝をかけ、丈の兩端は少し許り表に袋取つて貼ります。

（四）次ぎに被せ表の型紙に縁糊をつけ、丈二寸七分の表用布の上に載せ、被せの楕形を除きました他の三方を平に貼つて鏝をかけ、楕形の所は十分表に袋取つて貼ります。



（第三十四圖）

裏用布に被せ裏型を貼り込みの圖

（五）次ぎに膨り裏の型紙に縁糊をつけ、且つ丈の中央に二本留糊を施し（第三十二圖參照）て丈五寸一分の裏用布の上に載せ、先づ兩横を平に貼つて鏝をかけ、丈の兩端は表に袋取つて貼ります。

（六）次ぎに被せ裏の型紙に縁糊をつけ、第五圖の樣に丈六寸九分の裏用布の上に載せて被せの楕形を除きました他の三方を平に貼つて鏝をかけ、最後に表に袋取つて貼りつけます。而して(3)の端に用布が四寸八分殘る樣にして餘りは切り捨てます。

（七）次ぎに膨り表及び被せ表と、膨り裏とは用布を型紙の通りに裁ち、被せ裏は楕形と幅とを型紙の通りに裁ち、各々裁ち目のほつれを防ぐために縁糊を施して置きます。

三　縫ひ方

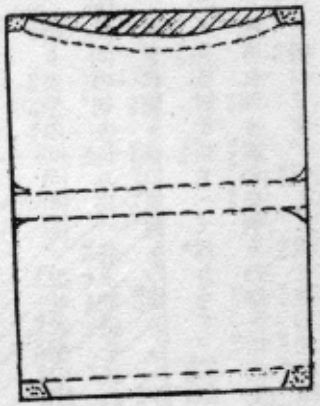
（一）膨り表型の(6)(5)(4)(3)、被せ表型の(1)(2)(3)(イ)、膨り裏型の(イ)(4)(5)(6)被せ裏型の(1)(2)(3)の切り込みに、各々筋鏝を入れて置きます。

（二）次ぎに膨り表の皿刳りの端から一寸一分這入つた所の幅の中央に、長さ八分の小駈かけを拵らへて置きます。（巻頭三、製作上の心得中の小駈かけのつけ方を參照）

（三）次ぎに膨り表の皿刳りの端と第三十五圖の樣に中表に重ねて貼り、並みの縫ひ代で縫ひます。而して被せ裏の用布の端を表型に倣つて皿形に裁ち、縫

ます。

(四)　次ぎにその皿刳りの所を向ふ側に、縢り表を下に、被せ裏を手前の上にして裁ち板の上に載せ、被せ裏を中表に向ふに折り返して(3)の筋を皿刳りの上に重ねます。するとその間の用布が三重になりますから(表用布が一枚と裏用布が二枚)兩横を三枚ともに縁糊で貼ります。この時皿刳りの方の幅を少し弛ませて、被せ裏の幅を少しつらせます。



表用布に被せ裏の端を中表に合せて貼り込む圖

(第三十五圖)

つた絲を切らない程度の深さて縫ひ代に切り込みを入れて一分五厘の筋から縢り表の方へ折り、糊をつけて貼つて置きます。次ぎにそれを外表に返して五厘表用布の方を枕かせて鍛をかけ

(五)　次ぎに被せ表の(イ)の端と、縢り裏の(イ)の端とを中表に重ねて縁糊で貼り、並の縫ひ代で縫つて(イ)の筋から裏用布の方へ折つて貼ります。而して縢り裏の(6)の筋を裏に折つて貼つて置きます。

(六)　次ぎに被せ表の櫛形の端に縁糊をつけ、被せ裏の櫛形と幅の中央に合せて中表にして貼ります。すると裏型は表型よりも一分幅を控へて裁つてありますから、兩横で五厘づゝ裏用布が引つ込み、表用布が延び出して居ります。

(七)　次ぎに被せ表と被せ裏との(1)の筋と(2)の筋とを、各々正しく重ねて兩横を貼りますと、櫛形の兩角で、表用布の丈が五厘弛む樣になります。而して櫛形の幅から延び出してゐる五厘と出會ひまして、丈の方でも、幅の方でも、各々五厘づゝ弛んで居りますから兩角でそれを縮せます。

(八)　次ぎに被せ表の(3)の筋と、被せ裏の(3)の筋とを重ねますと、(2)の筋との間で、表用布が一分弛みますから、その弛みを其處で縮せます。

(九)　次ぎに縢り表と縢り裏との、(4)、(5)、(6)の筋を、各々正しく重ねて中

表にして兩横を貼ります。この時、(4)の筋と(5)の筋との間で、表用布が一分弛みますから、その弛みを其處で縮せます。

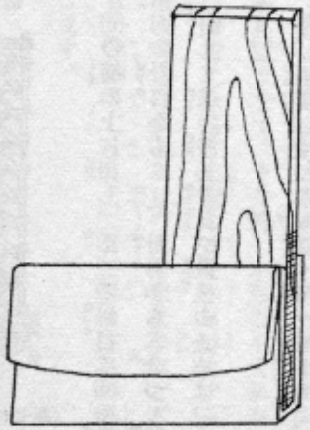
（一〇）これて各部とも、大體の形に貼り上りましたから、兩横と、被せの楕形との三方を、表用布の方から並の縫ひ代で縫ひます。而して裏用布の方から、縫ひ目の直ぐ内側に定木を當てゝ筋を引き、その筋から、縫ひ目を裏型の方へ折つて大黒槌で叩いてよく折りくせをつけ、外表に返して被せの格好及び兩横の幅を仕上げ篦（らつぴめうつぎり）及目打錐で正して置きます。

（一一）次ぎに前に裁つて置きました(い)の心紙の丈の一方の端を被せの楕形と合せて裁ち、兩横と被せとの三方に一分の幅で糊をつけ、糊のついた方が縫ひ目に當たる樣にして被せの表用布の方へ差し込みます。

（一二）次ぎに(ろ)の心紙の丈の兩端から各々二寸四分の所に筋を引きます。するとその筋と筋との間が三分五厘殘りますから、(は)の心紙にベタ糊をつけて、その三分五厘の中央に貼りつけます。

（一三）次ぎにその(ろ)の心紙の兩横に一分の幅に糊をつけ、縢り表と縢り裏との間にて入れます。この時(は)の心紙は表側になる樣にして差し込みます。而して、この(ろ)の心紙を差し込みました時に、袋の山の所で、被せに入れた(い)の心紙と二分離れてゐなければなりません。

縢り板を挟み込みの圖



（第十三十六圖）

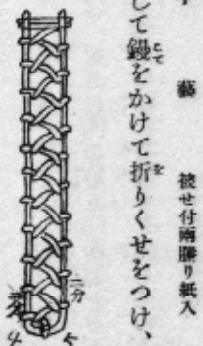
（一四）次ぎに縢り表の(6)の筋を折つて、(ろ)の心紙の端と兩横の縫ひ目とを包んで貼ります。

（一五）次ぎに丁寧に仕上げを致しまして、小皺や凸凹を直し、形を整へます。

（一六）次ぎに(4)の筋と(5)の筋とを裏用布の方へ折つて箱形を作り、その間に第三十六圖の樣に目盛りを記してある厚さ三分の縢り板を挟んで大黒槌で叩

き、而して鍼をかけて折りくせをつけ、兩横を二分の隔たりの千鳥がけて縢ります。その縢り方は、第三十七圖の樣に初め針を(4)の筋と(5)の筋との間に出し、次ぎに第二の針目は(5)の筋の上に出し、第三の針目は(5)の筋から一分上つた所に針を差します。第四の針目からは各針目から二分づゝ離して交叉させて千鳥がけを致します。而して絲の渡し方及び最後の止めは、すべて袱紗挟みと同樣の仕方でございます。

縢り上りの出來



第三十七圖

（一七）兩横をすつかり縢り終へましたらば縢り裏の(6)の筋と、縢り表の(6)の筋とを貼ります。

（一八）次ぎに被せの裏に小馳をうちますと、被せ附兩縢り紙入はすつかり出來上つた事になります。

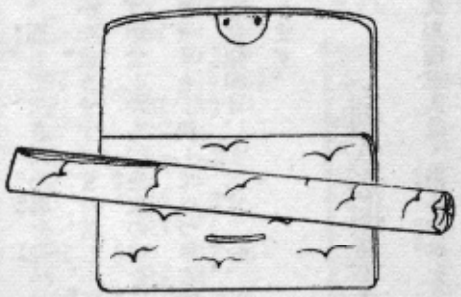
この小馳の打ち方は被せの端て表が裏側に五厘枕になつてゐますから、その裏よりも二厘五毛中側、卽ち被せの端から七厘五毛引かせて小馳を載せ、目打錐の尖端を小馳の小穴に通して用布に穴を明け、表用布の方からその穴に海鼠の足を通して小馳の表に出します。而してその儘鐵臺の上に載せ、小馳の兩横の用布だけを強く下の方に抑へながら、海鼠の足を小馳と平に喰ひ切つて了ひます。而して次ぎに小馳を抑へ、豆鐵鎚の大きい方で、その海鼠の足の切り端を叩いて置きます。また若し小馳の小穴が海鼠の足より大きいといふ樣な場合がございましたら、海鼠の足を切る時に、小し斜に切り、そして豆鐵鎚で叩いて置きますと、決してはづれる樣な事はございません。（巻頭三、製作上の心得中の小馳の打ち方を參照）

次ぎに幅四寸、丈二寸二分、厚さ三分の心袋を作つて中に入れ、帶紙を致して置きます。

利久形煙草入

利久形煙草入は　刻み煙草を入れる極めて簡單な被せつきの袋でございまし

利久形煙草入出来上り圖



（第三十八圖）

て、煙草の出し入れを容易にするために口の右の端に馬乗りをつけてございます。而して筒は烟管の長さに應じて作られた細長い袋でございます。

材料

表用布　幅三つ割のものを七寸五分或は幅五つ割のものを七寸五分と、別に幅二寸のものを七寸五分。

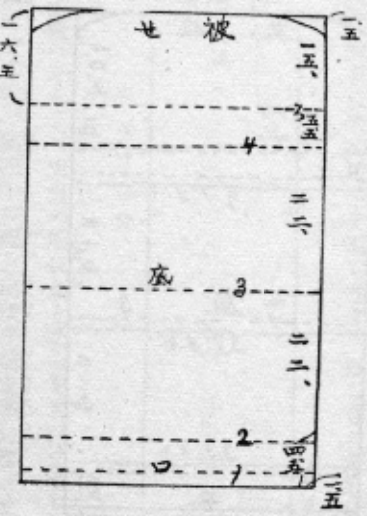
裏用布　表用布と同じ。

他に生判紙と六番張子紙とを少々づゝ。六分の小馳一個。

製作の順序

一、裁ち方

（一）煙草入の表型から裁ちます。幅四寸四分、丈七寸二分に生判紙を裁ち、中表にして幅を正しく二つに折つて裁ち板の上に載せます。



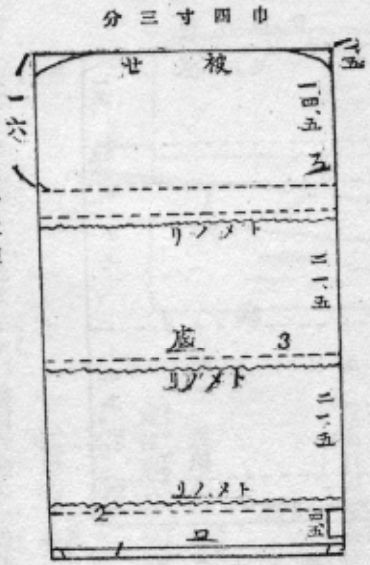
（第三十九圖）

次ぎに丈の右の端から、一分五厘、一寸五分(ろ)、五分五厘(4)、二寸二分(3)、二寸二分(2)、四分五厘(1)の順に切り込みを入れますと、一分五厘殘りますから、それを鈎の手に裁ちます。而して最初の

方の被せの一分五厘は裏型と重ねて後に楕形に裁ちますから今は角のまゝにて置きます。これを擴げますと、第三十九圖と同樣な表型になるのであります。

（二）次ぎに煙草入の裏型を裁ちます。幅四寸三分、丈六寸九分五厘に生判紙を裁ち、中表に幅を正しく二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘、一寸四分五厘(ろ)、四分五厘(4)、二寸一分五厘(3)、二寸一分五厘(2)、四分五厘(1)の順に切り込みを入れますと、一分五厘殘ります

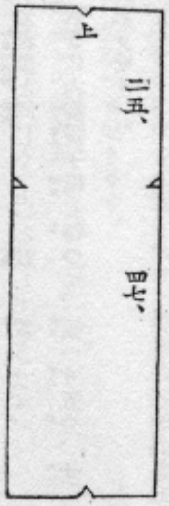
（第四十圖）



から、それを鉤の手に裁ちます。而して初めの一分五厘を表被せに合せて楕形に裁ちます。これを擴げますと、第四十圖と同樣な裏型となるのであります。

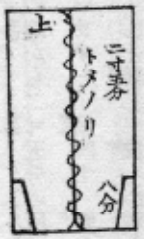
（三）次ぎに表の筒型を裁ちます。幅二寸、丈七寸二分に生判紙を裁ち、中表に幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の兩端の中央に五厘の切り込みを入れ、且つ丈の右の端から二寸五分の所に切り込みを入れますと、四寸七分殘ります。これを擴げますと、第四十一圖と同樣な筒表型になります。而して二寸五分の丈の端を（上）と致して置くのであります。

（第四十一圖）



（四）次ぎに筒裏型を裁ちます。幅一寸八分、丈三寸三分に生判紙を裁ち板

の上に載せ、幅の中央の丈の兩端に五厘の切り込みを入れ、且つ丈の右の端から例の如く、二寸五分の所に切り込みを入れますと八分殘りますから、これを鈎の手に裁ちましてこれを擴げますと、第四十二圖と同樣な型になります。而して二寸五分の丈の端を表型と同じく(上)と致して置きます。



（第四十二圖）

（五）次きに六番張子紙を持つて、幅一寸五分、丈一寸の心紙を一枚裁つて置くのであります。

二、貼り方

（一）表型の周圍に(紙の表の方)(に以下同じ)緣糊をつけ、表用布の幅の一方に片寄せて載せ、兩横を平に貼つて鏝をかけ、被せ〻楕形は表に袋取り、(2)と(1)との間は裏に袋取つて貼ります。

（二）次きに筒表型の周圍に糊をつけ、表用布の細長く殘つて居る所に載せて丈の兩端を平に貼つて鏝をかけ、兩横は少し表に袋取つて貼ります。

（三）次きに裏型の周圍に糊をつけ、(1)(2)(3)の切り込みから各々一分離れた第四十圖の波線の所に一本づゝ留糊を施し、裏用布の幅の一方の端に片寄せて載せ、兩横を平に糊つて鏝をかけ、被せの楕形は裏に袋取り(1)の筋より(2)の筋まで表に袋取つて貼ります。

而して殘りの裏用布を、幅一寸九分五厘、丈七寸二分だけ裁つて置きます。

（四）次きに筒裏型の兩横と(上)の端との三方に糊をつけ、幅の中央の第四十二圖の波線の所に縦に留糊を一本施し、前に裁ちました幅一寸九分五厘、丈七寸二分の裏用布に第四十三圖の樣に丈の一


（第四十三圖）

筒裏型を貼り込みの圖
（型紙の兩横の間中黒き所は切り捨てる）

方の端と型紙の(上)の端とを重ねて幅の中央に貼ります。すると兩横には、等しく七厘づゝ用布が殘り、八分の鉤の手の端の下には三寸九分殘つて居ります。

(五)　これですつかり貼り終りましたから煙草入と、筒表と、煙草入裏との三枚は各々型紙通りに周圍を裁ちます。次ぎに筒裏は型紙の兩横の七厘五毛を二寸五分の切り込みの所まで(第四十三圖中黒きところを)裁ち捨てます。而して各々用布の裁ち目のほつれを防ぐために緣糊を施して置くのであります。

三、縫ひ方

(一)　煙草入表の(1)より(4)までと、同裏の(1)より(4)までとの切り込みの所に筋を入れて置き、そして煙草入の袋の方から挾へることに致します。

(二)　先づ裏型の(1)の筋を裏に折つて貼りつけます。

(三)　次ぎに馬乘りを挾へるために、第三十九圖の表型の(1)の筋から(2)の筋までの圖の右横に緣糊をつけ第四十圖の裏型の圖の左横の(1)の筋から(2)の筋までの間と中表に重ねて貼り、並の縫ひ代で縫ひ置き、そして(2)の筋の所で其の横から一分五厘の深さの裁ち込みを入れます。次ぎに縫ひ目の直ぐ内側に裏型の方から筋を入れ、打つてよく折り癖をつけ、外表に返すのでございます。

(四)　次ぎに表型の(1)の筋を裏に折つて馬乘りの縫ひ込みを包んで貼りますと、表と裏との口は別々に貼つたことになります。

(五)　次ぎに馬乘りの横の一分五厘の裁ち込みから(3)の筋までと、もう一方の横の(1)の筋から(3)の筋までとの表型に緣糊をつけ、裏型と外表に重ねて平に貼りますと、(3)の筋の所で表用布の丈が五厘長くなつて居ります。

(六)　次ぎに表用布の(3)の筋を中表に折り返しますと(2)の筋と(4)の筋とが重りますから、その兩横を緣糊で貼ります。

(七)　次ぎに裏用布も表用布と同樣にして折り返してその兩横を貼ります。かうして裏表の用布を各々貼り合せますと、表と裏との(4)の筋が、表と裏との(2)の筋を挾んで重り合ひ、その底の所では表の(3)の筋が、裏の(3)の筋より五厘

大圖

長くなつて四枚重つて居ります。次ぎに表型と裏型との(3)の切り込みを重ねますと、(4)の筋と(3)の切り込みとの間で表用布が一分弛みますから、その弛みを(4)の筋から二分の間で縮せて貼ります。この縮せの所は出來上りの袋の山に當りまして、被せの折れる所になるのであります。

（八）次ぎに被せの端の橢型の所を、表用布と裏用布との幅の中央を合せて中表に貼り合せますと、兩横で表用布が五厘づゝ殘ります。

（九）次ぎに表型(2)の切り込みから被せの端までの兩横に糊をつけ、裏と貼り合せますと、被せの端の所で表用布の丈が五厘弛みますから、幅の五厘の弛みと一緒に縮せます。

（一〇）かうして表と裏との貼り合せが終りましたから、兩横と被せの橢形との三方を表型の方を見ながら並の縫ひ代で縫ひます。而して縫ひ目の直ぐ内側に裏型の方から筋を入れ、その筋から兩横の縫ひ代を裏型の方に折つて、次ぎに被せの橢形の方もまた折つて折り癖をつけ、底の間から外表に返しますと被せの方のみ外表になり、(1)の筋から(3)(4)の筋の間は未だ中表のまゝで居りますから、そのまゝにして仕上げ篭を被せの中に入れ、橢形の角や縫ひ目の凸凹を直して形を整へて置きます。

（一一）次ぎに表型の小馳かけの所に前に裁つてある心紙に、ベタ糊をつけて貼つて鍛をかけます。而して(1)の筋から(3)(4)の筋までを外表に(1)の筋の口から返しますと、煙草入の袋の形が出來上つたことになります、そこで仕上げ篭を口から裏表の間に差し入れて、底の角や兩横の形を整へます。

（一二）次ぎに口の裏表の間から手を入れて、小馳かけの標の所即ち底から、五分五厘上つた所の幅の中央に八分の幅の小馳かけを作るのでございます。

（巻頭三、製作上の心得中の小馳かけの作り方參照）

（一三）次ぎに表と裏との(1)の筋を、表を少し祝かせて貼つて鍛をかけます、被せの折り癖をつけ、且つ馬乘りの所に一分の幅の門抜き止めを致します。而して丁寧に仕上げを致しましてから、被せ裏の端の幅の中央に小馳を打ちます。

（巻頭三、製作上の心得中の小袋の打ち方参照）

かうして袋は全く出來上りましたから、心袋を入れて置くのであります。

（一四）次ぎには煙管差の筒を作ります。先づ煙管を出し入れする口から作ることに致し、表型の口明とした所の（上）から二寸五分の切り込みの所までの兩横に縁糊をつけ、中表に裏型と重ねて貼りますと表用布が幅て二分弛みます。これは出來上りの表の弛みになるのでございます。

（一五）次ぎにその兩横を並の縫ひ代て縫ひ、その内側に裏型の方から筋を入れ、その筋から裏型の方に折つて折り癖をつけて置きます。而して口明の切り込みの所に表と裏と共に、一分五厘の深さに裁ち込みを入れます。（第四十三圖參照）且つ裏用布の型紙を貼らない丈の端の幅の中央に、第四十三圖の樣に五分の裁ち込みを入れて置きます。

（一六）次ぎに表と裏との幅の中央を第四十四圖の樣に正しく中表に折り、その折りが兩横になる樣にして、表用布を右に、裏用布を左にしますと、口明の縫ひ目が幅の中央て正しく重りますから、表の（上）の端を一分餘りの縫ひ代で眞直ぐに細かに縫ひ、その針て續けて裏の（上）の端は左横て少し多く縫ひ込む樣に縫ひまして兩横端を三角に切り捨てます。（第四十四圖參照）



（第四十四圖）

口明を表と裏と合せて縫ひ、更に上を縫ひ合せ兩端を三角に切り捨てたる圖

上の縫目を刳りたる圖



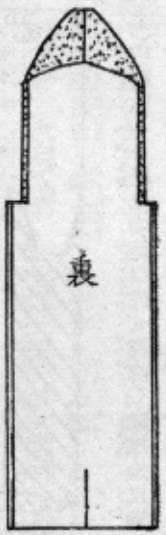
（第四十五圖）

（一七）次ぎに口明の縫ひ目を元の通りに兩横に致しますと、（上）が縫ひ合してありますので、自然と第四十五圖の樣な格好になります、（上）の縫ひ目を兩方

に割つてしつかりと鏝をかけます。

（一八）次ぎに裏の角(口)を表の角の(イ)に重ね、角から一分位の深さにして縫ひ込みに三角が出來る樣に眞直ぐに縫つて、裏型の方から縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れて置きます。而して外表に返して口明の所で表を五厘裁かせて鏝をかけ、次ぎに今縫つた所を一分だけ眞直ぐにして、兩方に角を立てゝ叩いて置きます。

上の角の縫ひ留めたる所を表より角だてゝ叩きたる圖



（第四十六圖）

（一九）次ぎに口明の下の一分五厘の裁ち込みの所から、表型の兩横に糊をつけ、裏用布と横を揃へて外表に貼りますと、表用布の幅が五厘程弛みます。併し丈の下の端には裏用布に五分裁ち込みがありますので、兩横を貼りますと裏用布の幅の狹いだけそこが開いて幅が平になります。

（二〇）次ぎに今貼りました所を、裏用布の布表を外に　表用布を中にして二つに折り、兩横を縁糊で貼つて縫ひます。而してその縫ひ目を左に、幅の中央の折れ目の輪を右に、口明の方を向ふに、底になる方を手前にして裁ち板の上に置き、縫ひ目の直ぐ内側に筋鏝を入れ、その筋から折つてしつかりと折り癖をつけるのでございます。

（二一）次ぎには底の端で縫ひ目から輪までの間を三等分して目標をつけ、その目標が外側になる樣にして第四十七圖の樣に巾着襞に折り疊みます。（全體の幅を六等分したもの一つの襞の幅になる譯でございます）そして巾着襞の中に向つて折れた折り目が中央で突き合ふ樣に一々正しましたら、端から一分通り入つた所の襞の中央に、第四十八圖の樣に一分の幅で一針縫つて其處を二度ばかり綴ぢて糸の端をしつかり結んで止めて置きます。



（第四十七圖）

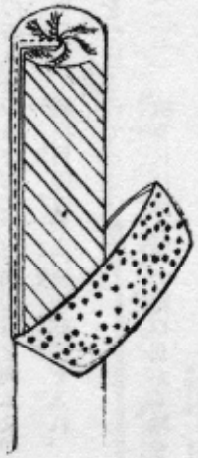
底端を縫ひ止めたる圖



（第四十八圖）

（二二）次ぎに筒の中に返し棒を入れ、底にしつかりと當て、巾着襞の折り目を縫ひ目にならつて第四十九圖の樣に一方に向けて折りますと、六つの襞が出來ます。その風車形になつた六つの襞をしつかりと打つて折り癖をつけてから、返し棒を抜き取り、更に返し竹を筒の中に入れ、底を上に向けて左の手で立てゝ持ち、右の手で底の中央を箸の如き細き竹で（返し棒の附屬品）上から押し、左の手で用布を上に押し上げる樣に致しますと、底が次第に内側に入り込んで外表に返ります。

底に返し棒を入れて襞を片返しに折りたる圖



（第四十九圖）

（二三）次ぎに筒の中に返し棒を入れ、底の形を風車形に正しく目打錐の先さて直して六角になし、縫ひ目や小皺を直して棒を抜き、口明の形を正しく門抜止めを致します。

かうして筒は出來上りましたから、煙草入の袋に筒を挾んで帶紙をして置くのでございます。

四、應用

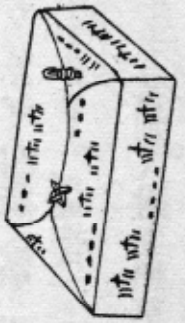
この煙草入の前に段口をつけて名刺入としたものもございます。また小袖形といつて、被せを楕形の代りに丸く丸味を取り、左の方に小さな隱しを作つて楊枝入とし、その隱しの用布を袖口布の樣に表に梳かせた優美な形のものもございます。その他、萬歲形、無雙、男袴形、女袴形等應用の出來るものがございますけれども、此處には一々その說明は省くことに致します。

名刺入附卷煙草入

名刺入附卷煙草入は、後に名刺入がつき、前は袖形のもので兩横から抱き合

つた、被せつきの長方形の箱形をしたものでございます。

出來上り圖



（第十五圖）

材料

表用布　幅三つ割のものを七寸。

裏用布　幅三つ割のものを七寸。

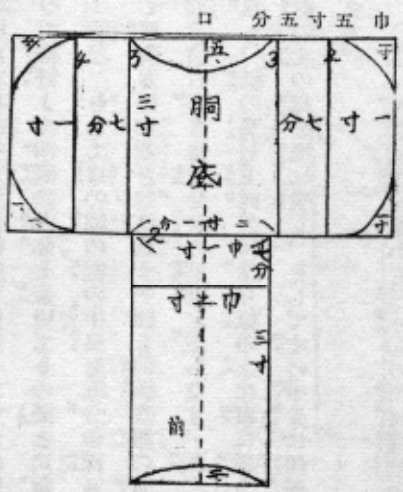
他に半紙の六枚合せの板目紙二枚と、細付打ち紐を一尺五寸。

製作の順序

一、裁ち方

（一）　先づ胴の表型を裁ちます。半紙と合せた板目紙を幅五寸五分、丈六寸七分の長方形に一枚裁ち、裁ち板の面に紙の表をつけて縦に截せ、そして向ふの丈の端を口とし、手前の丈の端を前と致して置きます。

（二）　次きに幅の中央に縦筋を一本鉛筆の如きもので引き、そして(前)の端から三寸七分(2)の所に筋鏝で横筋を一本入れ、その間を、中央から一寸づゝ殘して兩横を裁ち落し、(2)の筋の所に鉤の手を作ります。かう致しますと、(口)の端から三寸の間は後に袖になる所で幅が五寸五分あり、底から(前)の端までの三寸七分の間は幅が三寸になつて居ります。



（第五十一圖）

（三）　次きに(前)の端から三寸(1)の所に筋鏝で横筋を一本入れます。

（四）　次ぎに(前)の端の幅の中央を二分の深さにして、皿刳りに致します。

（五）　次きに幅五寸五分の方で、中央の縦の筋から兩横一寸五厘(3)の所に縦

に筋を入れ、その筋から更に七分(4)の所に縦に筋を入れます。すると中央の縦の筋から左右の横幅が各々一寸五厘(5)、七分(4)、一寸の三つの部分に分たれることになるのであります。

（六）次ぎに幅五寸五分の四隅の角を各々斜に五分這入つた所に標をつけ、更に角から丈の方にも幅の方にも一寸づゝの所に標をつけ、その三つの標によつて格好よく四隅に丸味を畫いてその通りに裁ち切ります。

（七）そして(ロ)の端の幅の中央を五分の深さにし、左右へ一寸五厘づゝの間で皿刳りにすると、第五十一圖と同様な胴の表型紙が出來上ります。

（八）次ぎに被せ表の型紙を裁ちます。幅二寸一分、丈四寸七分に板目紙を裁ち、紙の裏を上向きに裁ち板の上に縦に置き、向ふの丈の端を被せとし、手前の丈の端を底に致し、そして丈の中央に鉛筆などで縦に一本筋を引いて置きます。

（九）次ぎに底の端から三寸(5)の所に横筋を一本入れ、その筋の所に兩横から五厘の深さにして標をつけ、更に底の端の兩横に二厘の深さにして標をつけ、そしてその標から標に向つて定木を當てゝ兩横を裁ち落します。

かうして兩横を裁ち落しますと、(5)の筋の兩横に五厘の鉤の手が出來て其處は幅が二寸となり、底の筋の所は幅が二寸六厘となることになります。

（一〇）次ぎに(5)の筋から更に七分(6)の所に横筋を一本入れ、第五十二圖の樣に其處が巾二寸になる樣に兩横から五厘の深さにして標をつけ、その標に向つて(5)の筋の幅二寸一分の所から定木を當てゝ裁ち切ります。そして被せの端の兩横の角から斜に五分の所に標をつけ、(6)の筋の兩横からその標に向つて格好よく被せの丸味をつけ、その筋通りに裁ちますと、第五十二圖と同樣な被せの型紙が出來るのであります。



（第五十二圖）

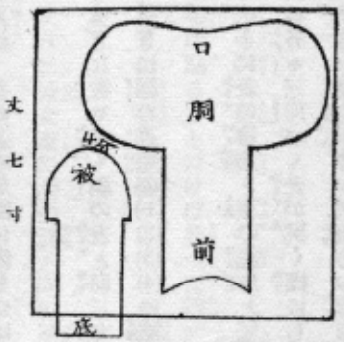
（一一）次ぎに胴の裏型を裁ちます。幅を表の胴型より二分狭くして五寸三分、丈は一分五厘短かくして六寸五分五厘に、また被せの裏型は表被せ型より幅を五厘狭くして二寸五厘、丈は一分短かくして四寸六分に、各々一枚づゝ板目紙で裁ち、それを表型より周圍が少しづゝ狭くなる樣に裁ちます。

とにかく表型で箱が出來て、裏型はその裏になるのでございますから表の箱型の中に入れて見て周圍が三厘位小さい箱になつてゐる樣に裁てば宜しいのでございます。かくして型紙は裁ち終りましたからこれを各々用布に貼りつけるのであります。

二、貼り方

（一）胴の表型の紙表に（裏型も同じ）糊むらのない樣にベタ糊をつけ、型紙の周圍に用布を二分づゝ殘して表用布の一方の端に片寄せて貼り、次ぎに表用布が上になる樣に型紙を裁ち板の面につけて置き換へ、用布を板目紙に落ちつかせるために用布の上から刷毛でよく打ちます。そしてまた元の通りに用布を下に板目紙を上にして、(1)(2)(3)(4)の筋をその順に板目紙の方に折つて箱形にしながら用布に無理がない樣に、且つぶく〳〵が出來ない樣に手で直しながら、表に袋取るかげんに致します。そして型紙の周圍に二分づゝ用布を殘して裁ち落し、自然に乾くまで

用布に型紙を張り込みの圖



（第五十三圖）

放つて置きます。

（二）次ぎに被せの表型を胴の表型と同樣の方法にして表用布に貼り、(5)の筋と、(6)の筋とを箱形になる樣に型紙の方に折り、周圍に用布を二分づゝ殘して裁ち落し、自然に乾くまでそのまゝにして置きます。この被せ表の型紙を表

用布に貼りつけます時に、用布の丈が少し足りませんけれど、底の端から一寸五分位の間は用布がなくても差し支へございませんから、被せの端の方の用布を十分に取つて貼ります。

（三）次ぎに胴の表型の周圍の縁通りに用布に筋を入れ、鉤の手の角には裁ち込みを入れ、布の裏の周圍に糊をつけて、その筋から折つて型紙に貼りつけます。

（四）次ぎに被せ表も胴の表と同じ方法て周圍を貼つて置きます。

（五）次ぎに胴の裏型の(1)(2)(3)(4)の筋や被せ裏型の(5)(6)の筋を紙の表の方に折ります。

（六）次ぎに表の箱形と裏の箱形とを重ねて裏型の方が枕き出ないかを試して、周圍に各々三厘づゝ表が枕く樣にして裏が廣かつたら裁つて置きます。

（七）次ぎに裏型紙にベタ糊をつけて裏用布に張り、その周圍に用布を二分づゝ殘して裁ち切り、そして表と同樣の方法て張りつけます。此の時表は型紙よりも用布の方が外側になりますから、表に少し袋取りましたが、裏は裏布が中側になりますから、中て弛まない樣に裏に袋取り十分注意して貼らねばなりません。

これて表の胴、裏の胴、表の被せ、裏の被せの都合四枚を貼りましたから、型紙を用布に貼ることだけは終つた譯てございます。

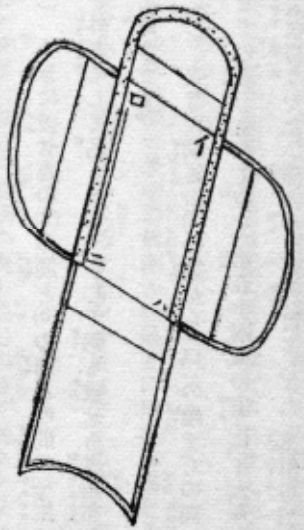
（八）次ぎに胴裏の型紙の方にベタ糊をつけ、胴表の箱形の中に入れて外表に貼ります。

（九）次ぎに被せ裏の(2)の筋と(5)の筋との間の型紙の方にベタ糊をつけ、被せ表を外表にして貼ります。そして胴も被せも表用布を外にして正しく箱形に折つて置きます。

（一〇）次ぎに胴裏の(2)の筋から(ロ)の端までの間に被せ表の(2)の筋から(5)の筋までの間を重ねて載せ、第五十四圖の樣に(イ)(ロ)(ハ)(ニ)の四隅を綴ぢ、糸が表に目立たない樣に小さな針目にして、裏用布から表用布に針を出し、表

用布から更に裏用布の方に針を返して結んで置きます。すると胴の箱の幅は(イ)(ロ)の所で二寸一分で、被せの方の幅は二寸になつて居りますので、後の皿刳りが一分弛むことになります。其處が名刺入になるのでございます。

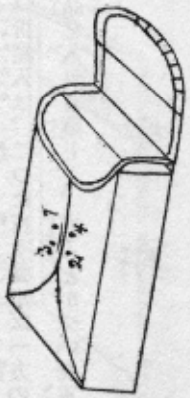
胴と被せと縫ひ合せの圖



（第四十五圖）

（一一）次ぎに前の折り方の順に各々の筋を折りますと、第五十五圖の樣な形になりますから、縢り穴の標の(1)(2)(3)(4)の所に袖の表裏と(前)の表裏との四枚に通して目打錐で穴を明けます。そして縢り糸を縢り針に通して袖の裏から表の(1)の縢り穴に針を出し、次ぎにその針を表の(2)の穴から(前)の裏に抜き、更に(前)の裏から表の(3)の穴に出して、表の(4)の穴から(前)の裏に抜きますと、縢糸が十文字に掛つたのでございます。

縢穴及び取手穴の圖



（第五十五圖）

次ぎにもう一度針を(1)の穴に出し、(2)から(前)の裏に抜き、(3)の穴に出します。そして(4)の穴を縢らうとする時、前の縢り絲の下を一つ潜らせて出來上り圖の樣に石疊に重ね、そして袖の裏に出し、縢り絲を締めて止め結びを致します。

この縢り方は同じ穴に二回づゝ針を通しますから、二回目の時に前の縢り絲に針を刺さない樣に致しませんと、最後に絲を締める事が出來なくて困る樣なことが起ります。

（一二）次ぎに縢り絲の殘りて釋迦結または他の隨意な仕方で玉を拵へ、その玉の殘り端を二本揃へて七分の長さに切り、被せ表の中央に目打錐で穴を明

けて表から通し、それを五分だけ裏に引いて糊をつけ、型紙に貼りつけて鏡をかけますと、玉と表用布との間が二分ばかりになります。これは被せの取手でございます。

（一三）そして最後に被せ裏の被せの型紙にベタ糊をつけて被せ表と貼り合せます。

（一四）以上で全部出來上りましたから、丁寧に仕上げを致しまして凸凹や小皺を取り、その形を正しく整へて置くのでございます。

二つ折鏡入

二つ折鏡入は、二つに折り疊んだ一方の内側には鏡入がつき、他の一方には化粧品を入れる隠しと、櫛入とがついた重寶なものでございます。

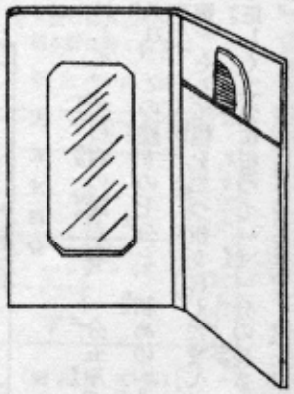
材料

表用布　幅五つ割のものを五寸五分。

裏用布　幅五つ割のものを一尺七寸三分。

他に丈三寸七分、幅二寸の鏡を一面。生判紙と八番張子紙とを少しづゝ。

出來上り圖



（第五十六圖）

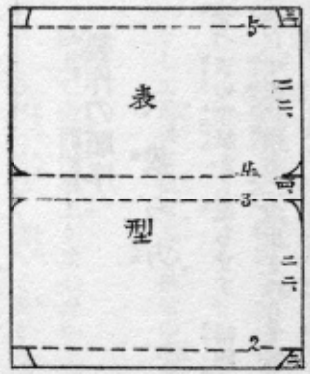
製作の順序

一、裁ち方

（一）先づ表の型紙から裁ちます。幅四寸四分、丈五寸四分に生判紙を裁ち、何時もの樣に中表に幅を二つ折りにして裁ち板の上へ載せ、丈の右の端から、三分(5)、二寸二分(4)、四分(3)、二寸二分(2)の順に切り込みを入れ、殘りの三分

と、始の三分(5)とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと第五十七圖と同樣な表型になります。

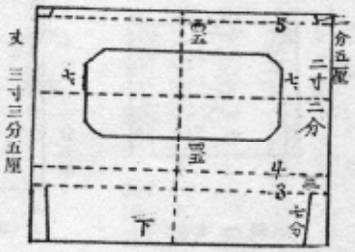
表型
巾四寸四分
丈五寸四分



（第五十七圖）

（二）次きに鏡裏の型紙を裁ちます。幅四寸三分、丈三寸三分五厘に生判紙を裁ち、表型と同じく中表に幅を二つ折りにして、丈の右の端から、一分五厘(5)、二寸二分(4)、三分(3)の順に切り込みを入れ、この殘りの七分と、初めの一分五厘(5)とを鈎の手に裁ちます。（第五十八圖）そして幅を二つ折りにしたまゝ、更に第五十九圖の樣に、二寸二分の丈を正しく二つに折つて一寸一分の長さとし、その一寸一分の輪の方から、丈を六分五厘、幅を（幅の二つ折りの輪から計つて）一寸四分五厘の所へ標をつけ、その標から標に向つて鈎の手に筋を引きます。そして、その鈎の手の角の所で、丈の方にも、横の方にも、各々二分の所に標をつけ、その標から標に向つて筋を引いて三角を描き、その筋の通りに裁ち捨てゝ了ひますと其處へ穴が出來、これを擴げますと、第五十八圖と同樣な裏型となります。

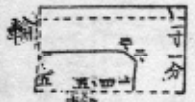
鏡裏型
中央の太き線は鏡穴を切り抜く時に折る筋
幅四寸三分
丈三寸三分五厘



（第五十八圖）

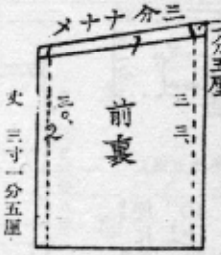
（二）次きに櫛入前裏の型紙を裁ちます。幅二寸五分、丈三寸四分五厘に生判紙を裁ち、中表に幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘(1)に切り込みを入れますと、後に三寸三分殘ります。これを擴げて、紙の裏を上に、紙の表を下にして裁ち板の面

第五十八圖の丈二寸二分の所を四つ折にして鏡穴を切り抜く圖



（第五十九圖）

につけて、(1)を向ふ側にして紙を縦に置き、左の向ふの端から三分の所に標をつけ、右の向ふの端から、その標に定木を當てゝ斜に裁ち落し、その兩端を鈎の手に裁つて置きます。そして三分短かくなつた左横を(2)と致して置きます。卽ちそれが第六十圖の樣な櫛入前裏型でございます。



（第六十圖）



（第六十一圖）

（四）次ぎに櫛入の型紙を裁ちます。幅二寸五分、丈二寸に生判紙を裁ち、中表に幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から一寸三分(1)の所に切り込みを入れますと、後に七分殘りますから、それを鈎の手に裁ちます　而してこれを擴げて紙の裏を上に、紙の表を裁ち板の面につけて七分の鈎の手を手前に、一寸三分を向ふ側にして縦に置き、手前の右の端から一寸の所に標をつけ、一分五厘の深さに切り込みを入れて、鈎の手に裁ち落します、左の端は七分の鈎の手に裁たれ、右の端は一寸の鈎の手になつてゐる譯でございまして、卽ち第六十一圖と同樣な櫛入型なのであります。そしてその左の横の方を(2)と致して置きます。

（五）次ぎに入番張子紙で、幅四寸一分、丈四寸八分の心紙を一枚裁つて置きます。

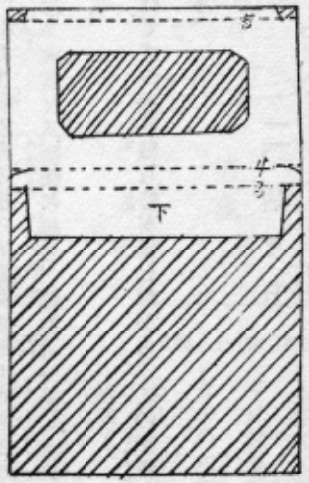
これですつかり裁ち終りましたから、この型紙を用布に貼りつけるのでございます。

二、貼り方

（一）先づ丈一尺七寸三分の裏用布を、丈七寸、三寸四分五厘、六寸八分五厘の三つに裁つて置きます。

（二）次ぎに表型の周圍（紙の裏の方に、）に糊をつけ、表用布の上に載せ、兩横を平に貼つて鏡をかけ、丈の兩端は極めて少し表に裁取つて貼ります。

裏布に鏡裏を貼り込みの圖



（第六十二圖）

（三）次ぎに鏡裏型の周圍に糊をつけ（中央の鏡形に裁つた所には糊をつけずに置きます）第六十二圖の樣に丈六寸八分五厘の裏用布の丈の一方の端と(5)の鈎の手の端とを合せて用布の上に載せ、型紙の周圍を平に貼つて鏡をかけます。そしてこの鏡裏型には鏡形の穴が明いて居りますので、其處へ裏用布が覗いて居りますから、その穴の周圍の型紙に糊がつかない樣に、覗いてゐる用布に薄糊を一面につけます。そして裁ち板の一方の隅に片寄せて糊のついてゐる方を貼りつけ、上からよく刷毛で叩いて置き、自然に乾くまで放つて置きます。この用布にベタ糊をつけることを引き糊と申します。

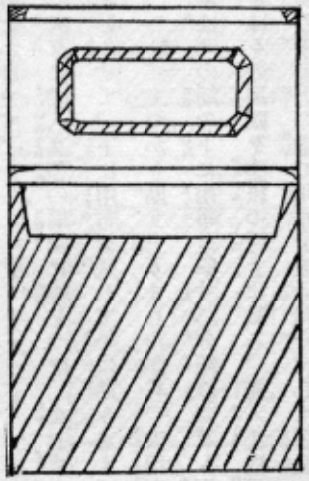
（四）次ぎに櫛入前裏型の周圍に糊をつけ、丈三寸四分五厘の裏用布に平に貼つて鏡をかけます。

（五）次ぎに櫛入裏型の周圍に糊をつけ、丈七寸の裏用布の丈の端と型紙の上の端とを合せて、下に用布を殘して平に貼ります。

（六）これですつかり貼り上りましたから、表用布は型紙の通りに周圍を裁ち、鏡裏は(3)の筋の下に用布を四寸二分續けたまゝ型紙通りの幅に裁ち捨て、櫛入前裏はその周圍を型紙の通りに裁ち、櫛入裏は幅を型紙通りに裁ち、丈は七分の鈎の手の方の端で用布を五寸四分にして標をつけ（用布の丈の端から三分還入つた所になります）一寸の鈎の手の方の端から、その標に向つて斜に三分裁ち落します。そして何れの用布も裁ち目のほつれを防ぐために、緣糊を施して置くのでございます。

三、縫ひ方

（一）　表型の(5)(4)(3)(2)、及び鏡裏型の(5)(4)(3)、櫛入型の(2)、櫛入前裏型の(1)(2)の切り込みに、各々筋を入れて置きます。

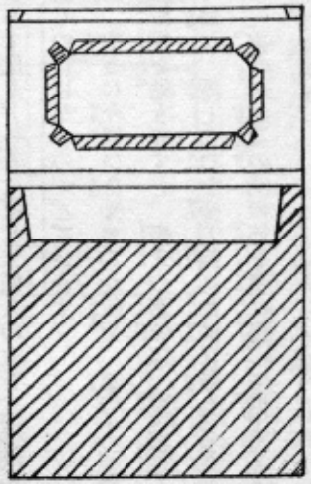


（第六十三圖）

鏡穴の用布を裁ち捨て殘り切に角の分に切り込みを入れたる圖

（二）　次きに裁板の端で自然に乾いた、鏡型の穴の周圍の用布を一分五厘殘して刻り抜きます。而して型紙の穴通りに用布に筋を入れ、その筋の側まで穴の四隅の角を第六十三圖の樣に裁ち込みを入れます。

（三）　次きにその裁ち殘した布裏に糊をつけ、前につけた筋即ち型紙通りに裏に折つて型紙の穴の緣を包んで、第六十四圖の樣に貼つて鏡をかけます。



（第六十四圖）

鏡穴の周圍の用布を型紙通りに裏に折り返して貼りつけの圖

（四）　次きに櫛入前裏の三分斜になつてゐる(1)の筋の端と、櫛入裏型に縫いてゐる用布の端とを中表に重ねて貼り、並の縫ひ代で縫ひます。そして(1)の筋から折つて前裏型に貼り、外表に返して前裏を五厘祝かせて鏡をかけます。此處は後に櫛入の口になります。

（五）　次きに櫛入裏の一方の端の七分と一寸との鉤の手の所(1)に、今縫ひ上げました(1)を第六十五圖の樣に重ねてその兩横を貼りますと、其處に櫛入が出來ます。そしてこの兩横を貼ります時に、櫛入の口の方は十分に、底の方は極

櫛入の出來上り圖



（第六十五圖）

めて少し弛める樣に致します。

（六）次ぎに鏡裏型に續く用布ばかりの端と、第六十五圖の櫛入の左の端とを中表に重ねて貼ります。そして並の縫ひ代で縫ひまして、縫ひ目から五厘内側に定木を當てゝ筋を引き、櫛型の方へ折つて貼り、外表に返して櫛入の方を五厘被かせて鏡をかけます。此處は後に隱しの口になるのでございます。

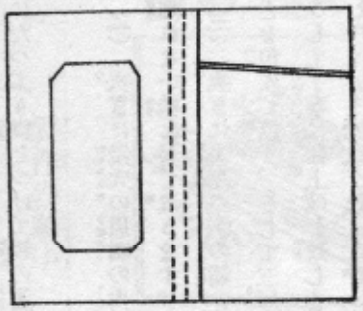
（七）次ぎに今縫ひ合せました所を、第六十六圖の樣に鏡裏の(3)の筋と重ねてその兩横を貼りますと、櫛入の裏側に、横の隱しが出來ます。この兩横を貼ります時に、隱しの口を少し弛め加減に致します。

（八）次ぎに鏡裏の(5)の筋を裏に折つて貼ります。また櫛入の(2)の筋も裏に折つて貼ります。

（九）以上で裏の形は全部貼り上りましたから、表用布の兩横に糊をつけ、

裏と中表に重ねて、表と裏との(2)、(3)、(4)、(5)の筋を正しく重ねて兩横を平に貼つて、鏡をかけます。この時(3)と、(4)との間で、表用布が一分弛みますから、それをその間で縮せます。そして兩横を並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ目の直ぐ内側へ、裏用布の方から筋を入れ、その筋から裏型の方へ折つて叩き、よく折りくせをつけてから、外表に返します。

裏の出來上りの圖



（第六十六圖）

（一〇）次ぎに兩横の折り目の凸凹を直して幅を正し、前に裁つて置きました心紙を差し込みます。その仕方は、心紙の丈の兩端から各々二寸二分の所に筋を入れ、（中央で四分殘ります）兩横に一分の幅で糊をつけて何時もの方法で、糊のついた方が兩横の縫ひ目につく樣にむかせて、表側の方に入れます。そして心紙の兩端が、表型の(2)と(5)の筋との間へ、過不足

なくキチンと落ち着く様に致します。

（一一）次ぎに用意してあります鏡を、鏡穴の所に、表と裏との間から入れ、糊筥にたつぷり糊をつけて鏡の裏にベタ糊をつけ、位置よく心紙に貼りつけます。

（一二）次ぎに鏡穴の周圍の内側に糊をつけて鏡の表に貼りつけ、鏡と用布とが離れない様にして置きます。

（一三）次ぎに表型の(2)の筋と、(5)の筋とを各々裏に折つて心紙と兩横の縫ひ目とを包んで貼り、そして三厘ばかせて裏用布に貼り合せます。かうして丁寧に仕上げを致しまして形を整へますと、二つ折鏡入は全く出來上りますから、帶紙を致して置くのでございます。

君が代二つ折り銀貨入

君が代二つ折り銀貨入は、前口をつけた二つ折り銀貨入の一種でございまして、春に白布を斜に入れて音譜をかき、その上下に菊と桐との繪をあしらつた風情のあるものでございます。

出來上りの圖



（第六十七圖）

材料

表用布　幅六つ割の赤の鹽瀨を一尺一寸四分。同じ幅の白の鹽瀨を二寸八分。

裏用布　幅六つ割の適宜の色のものを七寸九分。

他に西の内（紙）を少々。

製作の順序

一、裁ち方

（一）先づ幅三寸七分、丈七寸二分五厘に西の内を一枚裁ち、第六十八圖の樣

に紙の表を、裁ち板の面につけて縦に置き、右横に向ふの右の端から一寸一分の所に標をつけ、左横には向ふの左の端から二寸八分の所に標をつけ、標に向つて斜に定木を當てゝ裁ち庖丁で裁ち落します。この裁ち落した紙は金留の表型になるのでございます。

表型裁ち合せの圖



（第六十八圖）

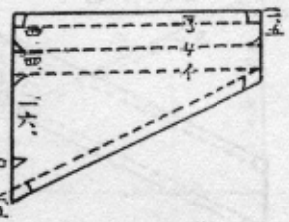
次ぎに殘りの裁ち目の端から、各々一寸一分の所に標をつけ、その標から標に向つて定木を當てゝ裁ち庖丁で裁ち落します。この紙は音譜表の型紙に致します。

かうして二枚の型紙を裁ち落しますと、後に右横で五寸五厘、左横で三寸三分五厘、丈のある紙が殘ることになりますから、その殘つた紙は段口の表型になるのでございます。

（二）次ぎに今裁ちました金留表の型紙になる紙の丈の一方の平な端を揃へて、中表にして正しく幅を二つに折り、丈の端の二枚揃つた方を右にして例の如く裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘(3)、四分(4)、四分(イ)の順に切り込みを入れ、これを擴げて第六十九圖の樣に斜の端を手前にし、且つ斜の丈の長い方を左横の手前になる樣にして縦に置き、左横の(イ)の切り込みから一寸六分(ロ)、一分(1)の順に更に切り込みを入れ、始の一分五厘(3)の端と右横の(イ)の切り込みと、左横の殘りの一分五厘とを鉤の手に裁ちますと、第六十九圖と同樣な金留表の型紙になります。

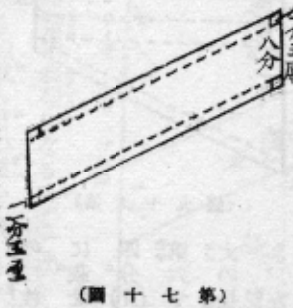
金留表

幅　三寸七分



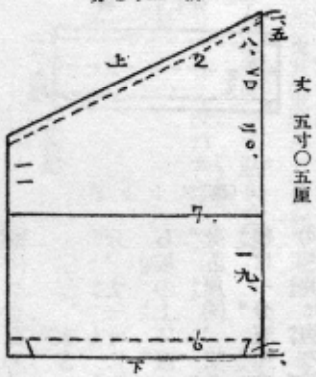
（第六十九圖）

（三）　次ぎに音譜表になる紙を、紙の表の方を裁ち、これを板の面につけて第七十圖の樣に斜に上つた方を右横に、下つた方を左横にして裁ち板の上に縦に置き、兩横とも斜の向ふの端から、一分五厘(1)、八分(2)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘と初の一分五厘(1)とを鉤の手に裁ちます。すると第七十圖と同樣な音譜表型の紙になります。

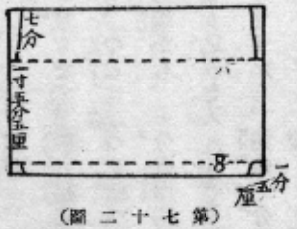


（第七十圖）

（四）　次ぎに段口表の型紙になる紙を、丈の一方の平な端を中表にして幅を正しく二つに折り、丈の端の二枚重つた方を右にして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、二分(6)、一寸九分(7)の順に切り込みを入れ、これを擴げて斜になつた丈の長い方を右横の向ふにして第七十圖の樣に裁ち板の上に縦に置き、左横に(7)の切り込みから一寸一分(2)の切り込みを入れますと一分五厘殘りますから、それを鉤の手に裁ちます。そして右横には(7)の切り込みから二寸ロ、八分(2)の順に二つ切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鉤の手に裁ちます。且つ始の二分(6)も鉤の手に裁つて置きます。



（第七十一圖）



（第七十二圖）

すると第七十一圖と同樣な段口表の型紙が出來ます。

（五）　次ぎに前口表の型紙を裁ちます。幅三寸七分、丈二寸四分に西の内を

裁ち、中表にして正しく幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘(8)、一寸五分五厘(ロ)の順に切り込みを入れ、殘りの七分と始の一分五厘とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと、第七十二圖と同樣な前口表の型紙になります。



（第七十三圖）

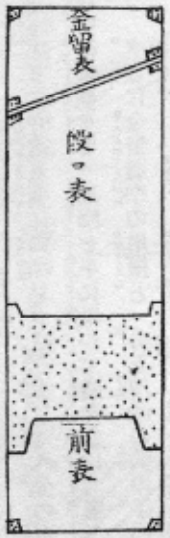
（六）次ぎに金留裏型を裁ちます。卽ち幅三寸七分、丈一寸に西の內を裁ち、中表に二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘(3)、三分五厘(4)、三分五厘(イ)に切り込みを入れますと、後に一分五厘殘る樣になりますから、始の一分五厘(3)と共に鈎の手に裁つて擴げますと、第七十三圖と同樣な金留表型になります。以上で全部裁ち終りましたから、次ぎに各々の型紙を用布に貼るのでございます。

二、貼り方

（一）先づ金留表型に緣糊をつけ（紙の表の方に、以下同じ）型紙の上の端と、丈一尺一寸四分の赤の表の端とを重ねて載せ、上を殘して三方を平に貼つて鍼をかけ、上の端は表に袋取つて貼ります。

（二）次ぎに段口表型に緣糊をつけ、上の端と金留表の下の端とを突き合せて同じ用布に載せ、周圍を平に貼ります。

（三）次ぎに前口裏型に緣糊をつけ、殘りの用布の丈の一方の端と、型紙の一分五厘の鈎の手の端とを揃へ、第七十四圖の樣に段口表型との間へ用布を殘して周圍を平



赤の用布に三枚の型紙を貼り合せの圖
（第七十四圖）

に貼りまする。

（四）　次ぎに音譜表型に縁糊をつけ、丈二寸八分の白の表用布の上に布目が曲らない樣に載せて、周圍を平に貼つて鏝をかけて置きまする。

（五）　次ぎに金留裏型の兩横と一分五厘(3)の鉤の手の端に縁糊をつけ、丈七寸九分の裏用布の、丈の一方の端と一分五厘(3)の鉤の手の端とを揃へて平に貼つて鏝をかけまする。

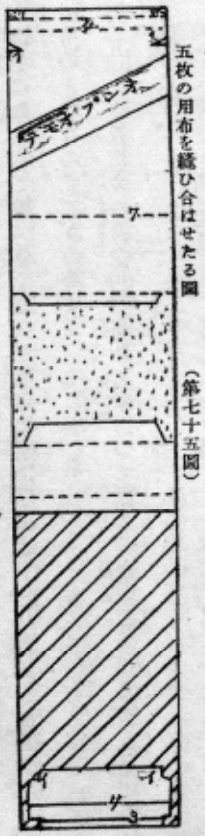
かうして全部貼り上りましたから、金留表と音譜表とを型紙通りに裁ち切り、段口表と前口表とは第七十四圖の樣に型紙と型紙との間へ用布を續けたまゝ兩横の幅を型紙に合せて裁ち、金留裏は幅三寸七分にして眞直に兩横を裁つて置き、周圍のほつれを防ぐために縁糊を施して置くのでございます。

三、縫ひ方

一）　先づ金留表の(3)(4)(1)、音譜表の(1)(2)、段口表の(2)(7)(6)、前口表の(8)、金留裏の(3)(4)の切り込みに各々筋鏝で筋を入れて置きまする。そして切り込みと切り込みとが斜の位置にありますのは、斜になつたまゝ定木を當てゝ筋を入れるのでございまする。

（二）　次ぎに金留表の(1)の筋の端に縁糊をつけ、音譜表の(1)の筋と(1)と(1)とを中表に重ねて貼りつけ、並の縫ひ代で縫つて置きまする。

（三）　次ぎに音譜表の(2)の筋の端に縁糊をつけ、段口表の(2)の筋と(2)と(2)とを中表に重ねて貼りつけ、並の縫ひ代で縫つて置きまする。そして(1)の筋も(2)の筋も音譜表の方に折つて糊で貼り、鏝をかけて置きまする。


五枚の用布を縫ひ合はせたる圖　（第七十五圖）

（四）　次ぎに前口表の(8)の筋の端に五厘の幅にて糊をつけ、裏用布の裏型の

貼つてない丈の一方の端と中表に重ねて貼り、並の縫ひ代で縫ひ、(8)の筋から前口表の方へ折つて糊で貼りつけます。

以上の如くして縫ひ合せました用布を縦に延べますと、第七十五圖の樣に長いものとなるのでございます。

（五）次ぎに金留表の(3)の筋を裏に折つて貼り、金留裏の(3)の筋も裏に折つて貼りまず。

（六）次ぎに金留表の(3)の筋から(4)の筋までの布表の兩横に縁糊をつけ、(4)の筋から折つて(イ)と(3)との筋を中表に重ねて兩横を平に貼りまず。

（七）次ぎに金留裏も金留表と同樣に(4)の筋から中表に折つて(イ)と(3)との筋を重ねて兩横を平に貼りまず。

（八）次ぎに(8)の筋の縫ひ代を前口表の方に折つて貼りつけ、外表に返して表用布を五厘弛かせて鏝をかけます。そして裏用布の型紙の方を裁ち板の上につけて、裏用布を向ふに、表用布を手前にして縦にして被せ、前口表の(8)の筋を金留裏の(3)の筋から五厘離れた所に重なる樣に裏用布を中表に折り返して兩横を縁糊で貼りつけます。すると裏用布で深口が出來て、その上に表用布が重つて居りますから、その兩横も深口の底まで貼り合せます（この時裏用布を五厘づゝ兩横でつらせて貼ります）。

（九）次ぎに段口表型の(6)の筋の端の二分（型紙の厚）に糊をつけ、外表にして貼りますと、型紙の(6)の筋の所が折り目になつて、型紙のない用布のみの所と、段口型紙の貼つてある所とが外表になつて二枚重ります。この折り目の(6)の筋を第七十六圖の樣に前口表の(6)の筋と重ねて兩横を貼ります（この時は前口表を少し弛ませます）と其處に前口が出來ます。そしてその間は表用布が三枚と裏用布が二枚重つて、都合五枚の用布が重つてゐることになります。

（一〇）次ぎに金留表の(4)の筋から段口表の(7)の筋までの兩横に縁糊をつけて(7)の筋から中表に折つて貼りまずと、前口と段口との上に金留表と音譜表と



（第七十六圖）
金留及ば前口を貼り上げの圖

が重なり、型紙の方が上になつて居ります。次ぎに金留表の(4)の筋と金留表の(4)の筋と金留裏の(4)の筋とを重ね、且つ前口表の先きの(8)の筋と、金留表の先きの(3)の筋とを正しく突き合せますと、裏金留の先きの(3)の筋と、表金留の先きの(3)の筋とが五厘の差になつて重ることゝなり、又前口表の(6)の筋と、段口表の(6)の筋とが重り、金留表や段口表の口が重ることになりますから、先づ表と裏との金留の兩横を貼り、次ぎに(7)の筋から(6)の筋までの間と、(8)の筋から(6)の筋までとの兩横を平に貼ります。すると(6)の筋の所で一番上に重つてゐる表用布が五厘弛みますから、その弛みを其處で縮せます。そして兩横を並の縫ひ代で縫ひ、裏用布の方から縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れ、その筋から裏の方へ折つて叩いてよく折り癖をつけ、金留の(4)の筋と(4)の筋との間から外表に返します。

（一一）次ぎに仕上げ篦や目打錐を中に入れて兩横の縫ひ目の凸凹をよく正し、金留表を外表に返して、その表用布の方を五厘弛せて口を貼り合せます。

かやうにして全部出來上りましたから、丁寧に仕上げをし、段口を中にして(6)の筋から二つに折つて帶紙を致して置くのでございます。

團扇形二つ折り銀貨入

團扇形二つ折り銀貨入は、團扇を倒さまにして前口と段口とをつけ、柄の端にホックを打つたもので、これを二つに折り疊みました形は、頗る意氣な、瀟洒なものでございます。

出來上りの圖



（第七十七圖）

材料

表用布　幅七つ割の白地のものを七寸五分。別に黒繻子に幅七つ割のものを二寸。

裏用布　幅七つ割の白地のものを七寸五分。他に二分幅の絹テップを一尺。小ホック一組。半紙

を五枚合はせの板目紙及び生半紙と五番張子紙を少々づゝ。

製作の順序

一、裁ち方

（一）附錄にある團扇形二つ折り銀貨入の（一）、（二）、（三）、（四）の型の上に生半紙を敷き、型の通りに寫し取ります。

（二）而して（一）の型紙は五番張子紙の面に平に貼りつけ、型通りに一枚張子紙で裁つて置きます。（二）（三）の型紙は別にもう一枚づゝそれに合せて裁つて置きます。而して（四）の型紙は板目紙に平に貼りつけて二枚裁つて置きます。

二、貼り方

（一）先づ（一）の型紙の半紙の方の周圍に糊をつけ、表用布の一方の端に片寄せて貼りつけて用布を貼通りに裁ちます。而して更に張子紙の方の周圍に糊をつけ、裏用布の一方の端に片寄せて貼つて置きます。

（二）次ぎに（二）（三）の型紙は共に周圍に糊をつけ（紙の裏の方に）一枚は表用布に、一枚は裏用布に貼つて置きます。

（三）次ぎに（四）の型紙は二枚共紙の表の方にベタ糊をつけ、糊むらのない樣に糊を拭き取り、型紙の周圍に用布を二分づゝ餘裕を捲へて黒繻子の布裏に貼つて置きます。

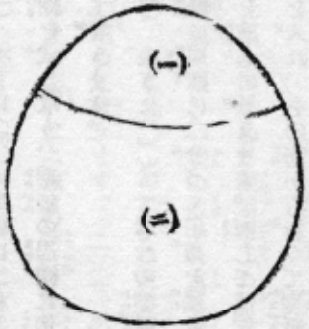
（四）次ぎに（一）（二）（三）の型紙を貼つた用布は各々周圍を型通に裁ち（四）の型紙は周圍に二分づゝ用布を殘して裁ち、各々裁ち目のほつれを防ぐために縁糊を施して置きます。而して（四）の型紙を貼りつけました用布には型紙通りに筋を入れ、その筋から折つて型紙に貼りつけます。これは後に團扇の柄になる所でございます。

三、縫ひ方

（一）（二）の型紙を貼り込みましか用布は、各々(イ)の端を中表に重ねて五厘の糊代で貼り、並の縫ひ代て縫つて切り込みを入れ、(イ)の筋から折つて外表に返して表用布の方を五厘祝かせて鍄をかけます。而して(三)の型紙を貼つた用布も同樣に致して置きます。

（二）次ぎに(一)(二)(三)共に三方を裏用布と、表用布とを外表に重ねて貼りつけます。この(二)の方は後に段口となり、(三)の方は前口となる用布でございます。

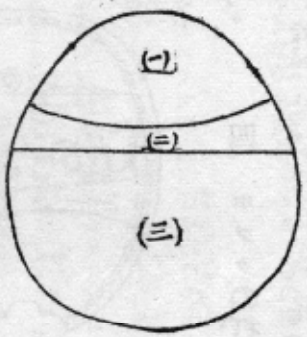
（三）次ぎに(一)の表用布の方を下に、裏用布の方を上に、團扇の柄のつく方を向ふ側にして裁ち板の上に載せ、(二)の表用布の方を上にして第七十八圖の樣に(一)と(二)との下の丸味を揃へ而して重ねまして周圍を貼り合はせます。すると段口がつくことになります。



（第七十八圖）

（四）次ぎに(三)の裏用布の方を上にして第七十九圖の樣に(二)の下の丸味を揃へて、その上に重ねまして周圍を貼りつけますと、前口が出來上ります。

（五）次ぎに二分幅の絹テップの幅の中央を團扇の周圍の緣に當てゝ二つに折つて包み　その兩端を團扇の柄をつける所で突き合ふ樣にして動かない樣にしつけをかけて置きます。而してテップの端に飾りミシンをかけて、前にかけたしつけを取り捨てます。すると恰團扇の緣紙をつけた樣に、緣が出ます。



（第七十九圖）

（六）次ぎに前に黑繻子て貼つて置きました柄の裏にペタ糊をつけ、柄の兩横の角と團扇の緣とを正しく重ねて、二枚の柄て團扇の胴を挟んて貼りつけます。かう致しますとテップの兩端は柄の下に這入つて隱れて了ひます。（第八十圖）



（第十八圖）　テップ及び柄をつけたる圖

（七）次ぎに例の通りにして丁寧に仕上げをしながら、（一）の型紙の筋から段口の上に柄の方を折り重ね、柄の端にホックを打ちますと全く出來上りますから、帶紙を致して置きます。

四、ホックの打ち方

先づ鉛臺を前口の中に入れ、袋を二つに折つて柄を前口の上に重ね、柄の端から一分這入つた所の幅の中央に、小鳩目拔を當てゝ打つて前口の用布に通して穴を明け、前口の中から鉛臺を取り出して更に柄の下に敷き、大の鳩目拔をその穴に當てゝもう一度打つて穴を大きくして置きます。

而して柄の裏からホックの壺の方をその穴から表に出しますと鐏の所でつかへますから、それを鉛臺の上に載せ、表の方から、頭子の山の樣に表に出てゐるその壺の上にホックの蓋を被せ、輕便ホック打ちの皿の方を當てゝ大黒槌で輕く叩きながら嵌めますと、壺の樣なものと蓋の樣なものとは離れない樣に着きます。

次ぎにホックの疣の方を前口の中から前口の穴に通して表に出し、前口の中に鉛臺を入れて疣の鍔をその上に載せ、穴の明いた帽子の樣なものを表の方から、その疣に被せて輕便ホック打ちの壺の方を當てゝ大黒槌で輕く叩きながら嵌めますと堅く着きます。（卷頭三、製作上の心得中のホックの打ち方參照）

九重形琴爪入

九重形琴爪入は長方形の可愛いゝ箱でございまして、その周圍の端を口の所で面白く折り疊み、それを房のついた打ち紐で止めました、何か物語の中にて

もありさうな、床しい優美な琴の爪入てございます。

出來上り圖



（第八十一圖）

材料

表用布、幅三つ割のものを二寸六分。別に同じ用布を幅一寸五分にして丈二寸七分。

裏用布、幅三つ割のものを二寸五分。別に同じ用布を幅一寸一分にして丈二寸三分。

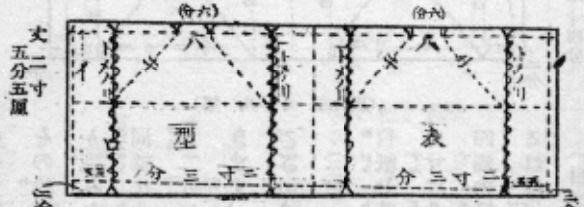
他に十枚合の半紙の板目紙及生刹紙、西の內を少々づゝ。直徑一分の白い打紐を一尺と共色の絹糸。鋏を一個。

製作の順序

一、裁ち方

（一）先づ表型から裁ちます。幅七寸二分、丈二寸五分五厘に生刹紙を裁ち

表型



（第八十二圖）

中表にして幅を正しく二つに折り、更に丈の方も二つに折りますと、四つ折りになつた譯でございます。而してその輪の方から五分五厘、二寸三分、五分五厘の順に切り込みを入れますと、後に二分殘りますから、それを二分四角の鉤の手に裁ちます。

次ぎに丈の方は伸して幅の方だけ二つ折りにし、二分の鉤の手の端から丈の方へ一寸五厘の所に切り込みを入れ、且つ二寸三分の中央から左右三分づゝの所にも切り込みを入れて置きます。これを擴げますと、第八十二圖と同樣な表型が出來ます。

（二）次ぎに口裏型を裁ちます。幅七寸

丈一寸四分に生判紙を裁ち、表型と同樣にして四つに折り、その輪の方から、五分五厘、二寸二分、五分五厘の順に切り込みを入れ殘の二分を鉤の手に裁ちます。そして表型と同樣に丈の方を伸して幅の方だけ二つ折りにしたまゝ、二寸二分の中央から左右三分づゝの所に切り込みを入れて置きます、これを擴げますと、第八十三圖と同樣になるのでございます。

（第八十三圖）

（三）次ぎに箱裏として、幅六寸九分、丈一寸一分に板目紙を裁ち、これを横にして幅の一方の横から、一寸一分二寸二分五厘、一寸一分、二寸二分五厘の順にして第八十四圖の樣に筋鉤を入れます。すると後に二分殘りますが、これは貼り代として餘分に取つてあるのでございます。

（四）次ぎに底型として、第八十五圖の樣に幅二寸二分

五厘、丈一寸一分に板目紙を二枚と、幅一寸五分、丈二寸六分五厘に生判紙を一枚裁ち、そして箱の胴に貼る爲めに西の内を幅一寸、丈七寸にして一枚裁つて置きます、また別に口裏の心紙として、幅一寸八分、丈八分の長方形に板目紙を二枚裁ちます。その幅の兩横から六分づゝ這入つた所に標をつけ、第八十六圖の樣に一方の端の角から、その標に向つて斜に裁ち落すのでございます。

（第八十四圖）

（第八十五圖）

（第八十六圖）

二、貼り方

（二）表型の周圍に糊をつけ、且つ第八十二圖の波線の所に留糊を施し（四本）幅三つ割、丈二寸六分の表

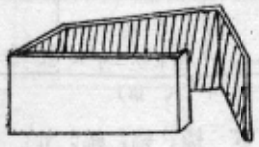
用布の上に載せて平に貼つて鏝をかけます。

（二）　次ぎに幅三つ割、丈二寸五分の裏用布を、丈一寸四分と一寸一分との二つに裁つて置きます。そして口裏型の周圍に糊をつけ、第八十三圖の如く留糊を四本施して丈一寸四分の裏用布の上に載せ、平に貼つて鏝をかけます。

（三）　次ぎに箱裏の板目紙の筋を入れた方の面にベタ糊をつけ、糊むらがない樣に糊をふき取つて、丈一寸一分の裏用布の上に載せ、用布が上になる樣に置き替へて、型紙の筋を用布の方に折りながら、弛んだり、折り目の角に用布が不足したりしない樣に、よく仕上げ篦で扱いて、第八十七圖の樣に箱型に致します。これに鏝をかけますと糊が白く用布に浮いて見苦しくなりますから、鏝をかけないで自然に乾かせます。

それから用布を型通りに切り、型紙の(1)と(1)との筋を重ねて箱に貼り上げます。

第八十四圖ノ型紙に裏用布を貼り箱型にしたる圖



（第八十七圖）

（四）　次ぎに底型の板目紙二枚にベタ糊をつけ、一枚は表用布に、一枚は裏用布に平に貼りつけます。そして裏用布は型紙通りに、表用布は型紙の周圍に二分づゝ用布を殘して裁ち、各々縁糊を施して置きます。

三、縫ひ方

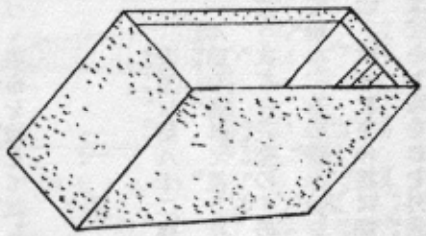
（一）　表型に第八十二圖の樣に、縦に六本、横に三本、口裏型には縦に六本、横に一本筋を入れて置きます。

（二）　次ぎに表型のイの筋とイの筋とを中表に合せて二分の縫ひ代にして返し針で縫ひ、その縫ひ目を兩方に割つて鏝をかけて置きます。

（三）　次ぎに下の端に糊をつけ、二分の筋から裏に折つて貼りつけて鏝をかけます。そしてそれを外表に返しまして、各々のロの筋を外に折り、打つてしつかりと折り目をつけますと、表用布が箱型になつた譯でございます（第八十八圖）

（四）次ぎに裏の兩横の（イ）と（イ）との筋を中表に合せて、二分の縫代で返針に縫ひ、割つて鏝をかけます。そして上の端に糊をつけ、裏に折つて貼りつけます。次ぎに中表のまゝ各々の（ロ）の筋を外に折り目をつけますと、裏も箱型になつたのでございます。

表を箱型に折りたる圖



（第八十八圖）

（五）次ぎに前に裁つてございます、幅一寸五分、丈二寸六分五厘の生判紙を裁ち板の上に置き、その上に裏底の型紙の方をベタ糊で貼ります。この時半紙が周圍に二分出る樣になります。その二分の半紙に糊をつけて、その上に箱型を載せますと、底型の裏用布が箱の底口になつて居まして、二分幅の半紙が外側にありますから、木型（一寸一分角長さ五寸）を入れて角に押し當て箱が動かぬ樣に左手で抑へて居ながら、仕上げ筈の先きでその判紙を箱の周圍に貼りつけますと、裏底と箱とは貼りつけられて、底のある箱になつたのでございます。そして角々で生判紙が三角形に殘つて居ますから、この三角を切り捨てるのでございます。

（六）次ぎに表底の型紙の面にベタ糊をつけ、今貼り上げました裏底を正しくその上に載せ、裏底の生判紙を貼つたと同樣の仕方で、型紙の周圍の二分の表用布を箱型に貼りつけ、四隅の角々に三角形に殘つて居る用布を前の樣にして裁ち切つて了ひます。すると箱形に表用布を貼つた所だけ少し高くなつて居る譯でございますから、前に裁つて置きました幅一寸、丈七寸の西の内にベタ糊をつけ、幅の一方の横を箱の上の端と揃へ、もう一方の横は底から來た表用布と突き合ふ樣にして箱形の周圍に貼りつけます。かうしますと、表用布を貼つた所が際立つて高くならず、且つ箱が丈夫に出來上るのでございます。

（七）これで箱の大體の形は出來上りましたから、（イ）の筋の縫ひ目を箱の一

方の嶺の中央に行く樣にして、表用布で出來て居る箱形のものをその上から被せます。この時表の箱形は裏の箱形と正確に寸法が合つて居りますので容易に被さりませんから、表の箱形の下の緣を目打錐の尖端で徐々に引き下げながら、一方の手で裏の箱形を上へ引つ張つて、表の下の緣が裏の箱の底と平になる樣にするのでございます。

（八）次きに裏の箱と表の箱との間に糊筥に糊をつけて差し込み、裏の箱の周圍に糊むらのない樣にベタ糊をつけて表の箱と貼り合せ、表用布の上から刷毛で叩いて置きます。

（九）次きに口裏の心紙にベタ糊をつけ、心紙のハと表型のハとを合せて、（ニ）の筋の間に貼ります。（第八十二圖の表型參照）そして表の上の端に二分の幅に糊をつけ、上の端の筋から折つて心紙を包んで裏の方に貼ります。

（一〇）次きに口裏型にベタ糊をつけ、（イ）の筋の縫ひ目が表の（イ）の筋の縫ひ目と反對の横の中央になる樣にして表の箱の中に入れ、表の上が口裏の上より

も五厘祝く樣にして貼りつけます。すると口裏の裁ち目の端が裏の箱の中途に貼られる樣になつて居ります。そして後に口の所の糊が剝がれても裏表の用布が離れない樣に小さな針目で紩けて置き、次きに第八十二圖の表型の(2)の筋を外に（ロ）の筋を中に折りますと第八十九圖の樣になるのでございます。

箱の上を折りたる圖



（第八十九圖）

（一一）これで全く箱形が出來上りましたから、正面に仕樣と思ふ箱の縫の中央で、底から五分上つた所に目打錐で穴を明け、その穴に鋲を差し込んで鋲の尖端を箱の中で兩方に開き、拔けない樣に致して置きます。



（第九十圖）

打びちに紐をたばねる結圖

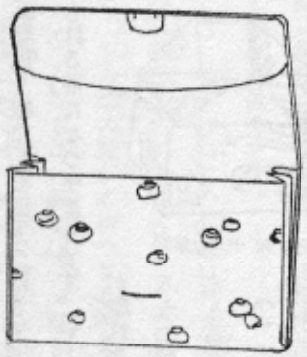
（一二）次きに用意してある打ち紐の兩端に共色の絹糸で房をつけ、打ち紐の丈を正しく二つに折つて輪の方から五分の所を共色の糸で堅く結び、その兩端で

第九十圖の樣に鯰結びを作ります。（水引の結び方の中の鯰結びを參照。）

そして箱形の上に今結んだ打ち紐を載せ、房が格好よく兩横に垂れる樣にし、且つ五分の丈に結んである輪の方を正面にして、針目を裏に出さない樣に注意して共糸で綴ぢつけますと、九重形琴爪入は全く出來上つたことになるのでございます。

扇襠附紙入

（婦人持）



扇襠附紙入は、扇形の襠のついた前口（第九圖）が一つと、外に深口の一つついた被せを一寸九寸に仕立てました二つ折り銀貨入でございます。

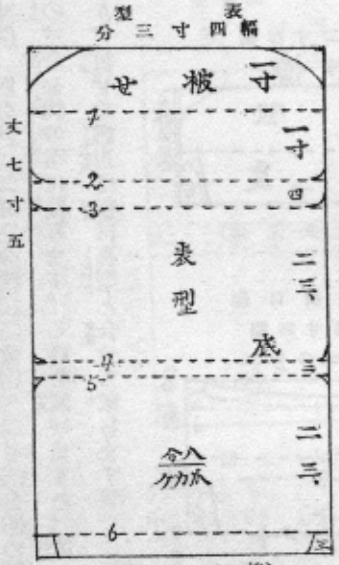
材料

表用布、　幅五つ割のものを七寸六分。
裏用布、　幅五つ割のものを一尺九寸二分。
他に生判紙、經木、六番張子紙と八番張子紙とを少々づゝ、六分の小驛一個。

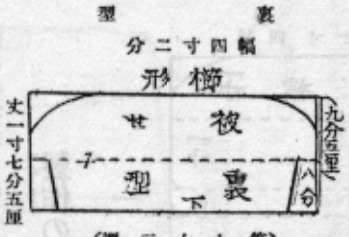
製作の順序

一　裁ち方

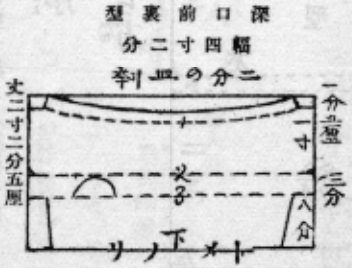
（一）　先づ表の型紙から裁ちます。生判紙を幅九寸三分、丈七寸五分に裁ち（第十圖）裁ち例の如く中表にして二幅を正しく二つに折つて（圖）裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一寸(1)、一



寸(2)、四分(3)、二寸三分(4)、二分(5)、二寸三分(6)の順に切り込みを入れ、殘りの三分を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第九十二圖と同樣な表型になり、被せの櫛形は後に裏型と合せて裁ちます。



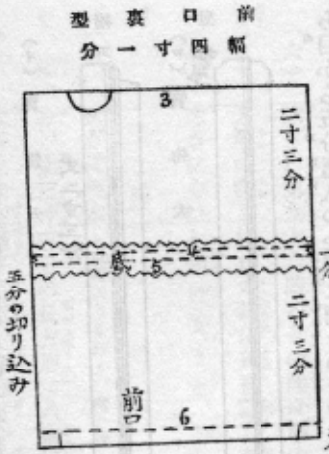
（第九十三圖）



（第九十四圖）

（二）次ぎに被せ裏の型紙を裁ちます。幅四寸二分、丈一寸七分五厘に生判紙を裁ち、中表に幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、九分五厘(1)の所に切り込みを入れますと、後に八分殘りますから、それを鉤の手に裁ち、そして表型の被せの端と、表型の被せの端とを合せて重ね、二分の櫛形に裁ち、更に兩横に三分の丸味をつけます。これを擴げますと第九十三圖と同樣な被せ裏型が出來ます。

（三）次ぎに深口前裏の型紙を裁ちます。



（第九十五圖）

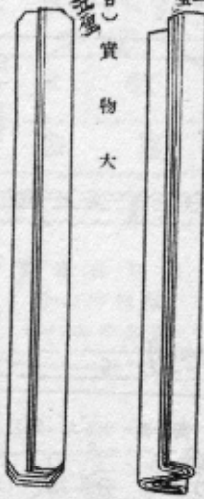
幅四寸二分、丈二寸二分五厘に生判紙を裁ち、中表に幅を二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、一分五厘(1)、一寸(2)、三分(3)の順で切り込みを入れ、殘りの八分に、初の一分五厘(1)とを鉤の手に裁ち、そして一分五厘(1)の中央を二分の深さにして皿形に刻つて置きます。これを擴げますと、第九十四圖と同樣な深口前裏型になるのでございます。

（四）次ぎに前口裏の型紙を裁ちます。幅四寸一分、丈四寸九分に生判紙を

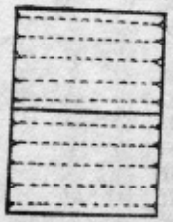
裁ち、中表に幅を二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の石の端から、(3)二寸三分(4)、一分(5)、二寸三分(6)の順に切り込みを入れ、殘りの二分を鈎の手に裁ちます。そして(4)と(5)との中央の一分を更に丈の方に二つ折りにして、横の裁ち目から五分這入つた所に標をつけ、その標に向つて、斜に裁ち落します。これを擴げますと、第九十五圖と同樣な前口裏型になります。

（イ）實物大
丈二寸三分

（ロ）實物大



（ハ）



第九十六圖

（五）次ぎに扇摘の型紙を裁ちます。幅三寸、丈二寸三分に生判紙を裁ち、中表にして幅を正しく四つに折り、（初め二つに折り、それを更に二つに折つて四つ折りに裁ります。紙の輪になつて居る方から三分の幅に筋を引き、その筋から更に三分の幅に筋を引きます。すると第九十六圖のイの樣に三分幅が二つと、一分五厘幅が一つとになつて重つて居ります。そしてその一分五厘は摘の縫ひ代になる所でございます。

（六）次ぎに第九十六圖のロの樣にその丈の端の兩角で、縱の方にも、横の方にも、五厘の深さにして斜に角を裁ち落します。

（七）次ぎにそれを擴げますと、第九十六圖のハの樣な摘型が出來上ります。

（八）次ぎに經木（鉋屑よりも厚く、薄い板よりも猶一層薄い、厚さ二分位の板に削つたもの）を、幅二分、丈三寸三分の長方形に八本裁つて置きます。

（九）次ぎに六番張子紙で、幅四寸、丈一寸八分の被せの心紙を裁つて置きます。

（一〇）次ぎに八番張子紙で、幅四寸、丈二寸三分の長方形の心紙二枚と、

幅四寸、丈一分の心紙を一枚裁つて置きます。

以上で裁ち方はすつかり終りましたから、次ぎにこれを用布に貼るのでございます。

二、貼り方

（一）　先づ丈一尺九寸二分の裏用布を、丈八寸一分五厘、六寸三分五厘、四寸七分の三つに裁つて置きます。

（二）　次ぎに表型の周圍の紙の表の方に糊をつけ、表用布の上に載せて、兩横を平に貼つて鏝をかけます。而して前口の所は少し、被せは五厘位表に袋取つて貼ります。

（三）　次ぎに被せ裏型の周圍に糊をつけ、丈八寸一分五厘の裏用布の端に被せの櫛型を揃へて重ね、その櫛型を除いた他の三方を貼つて鏝をかけ、櫛型は裏に袋取つて貼ります。すると(1)の切り込みから下に七寸二分用布が殘つて居ります。

（四）　次ぎに前口裏型の上の端から五厘の幅に紙の表に糊をつけ、深口前裏型の八分(3)の鉤の手の上に載せ、型紙の圓が合ふ樣に重ねて貼ります。

（五）　次ぎに今貼り合せました二つの裏型の紙の表の周圍に糊をつけ、そして深口前裏の下の端と、前口裏型の波線の所へ留糊を施し、（第九十四圖、第九十五圖參照）丈六寸三分五厘の裏用布の上に載せ、兩横を平に貼り、丈の兩端は裏に少々袋取つて貼りますと、深口前裏型の(3)の筋から丈八分の鉤の手になつてゐる所は用布と型紙との間に隱れてしまひます。

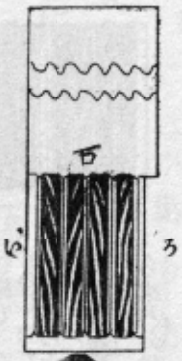


（第九十七圖）
縮型に經木をみたを貼る圖

（六）　次ぎに前に裁つて置きました八本の經木の裏にベタ糊をつけて、第九十七圖の樣に折り目の筋の間に貼りつけます。

（七）　次ぎに襠の用布を丈四寸七分、幅三寸二分に裁ち切り、裁板の上に半

紙を一枚敷いて、その上に布裏を上にして横に置き、丈の右の端から二寸五分の所まで引き糊を施し、更に下に敷いてある半紙の端を持つて、これを縦に置き換へ、第九十一圖の底の所の様に、引き糊をした方の丈の端を、檜型より二分出して、經木を上に見ながら、用布の幅の中央に貼り、その上をよく刷毛で叩いて、そして裁板の一方の隅に用布を上にして貼り、自然に乾く迄放つて置きます。



（第九十八圖）

（八）次ぎに引糊の乾いた頃を見計ひまして、裁板から剝ぎ取り、幅の中央を縦に二つに裁ち切りますと、八本の經木が四本づゝに分れることになります、そしてその裁ち目の横を（い）と致し他の一方の横を（ろ）と致して置きます。

（九）次ぎに二つに裁ちましたその檜の、檜型紙は幅が一寸五分、用布は一寸六分でございますので、（ろ）の横て型紙の外に用布が一分食み出して居る譯でございますから、これを型紙の縁に添ふて第九十八圖の様に、二寸五分の間だけ裁ち落します。

（一〇）次ぎに型紙の丈の兩端に筋を入れ、用布の丈の兩端と、型紙の兩横とに五厘の幅に糊をつけ、且つ型紙の口の端から續いて居る二寸二分の用布に横に二本（中央から五分隔つ）留糊をして置きます。

（一一）それから先づ底の端の二分の用布を裏に折り、一方の二寸二分の用布も裏に折り、その先きを突き合せ、重なる所を裁ち捨てます、そして（い）の横を平に貼ります。次ぎに幅の中央の筋を外表にして二つに折り、次ぎの筋を中表に、兩端の縫ひ代になるべき筋をまた外表に折ります、そして（ろ）の横を貼り、その横の殘り布を型通りに裁ち、そして折り癖をつけて置き、一方の檜もこれと同じ仕方で貼るのでございます。

（一二）これで貼り方は終りましたから、表用布は型紙通りに裁ち、被せ裏は（1）より下に七寸二分殘して、幅や被せは型通りに裁ちます。次ぎに前口裏と

深口前裏とは縫いたゞ型通りに裁ちます。そして各々に縁糊をして置きます。

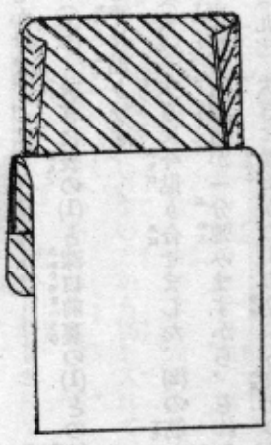
三、縫ひ方

（一）　各型紙の(1)(2)(3)(4)(5)(6)の切り込みに筋を入れます。

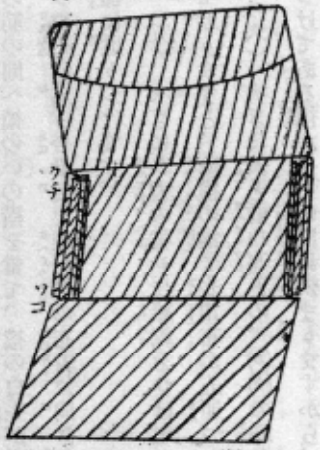
（二）　次ぎに深口前裏の皿刳りの端に糊をつけ、被せ裏型の用布の端と中表にして貼り、並の縫ひ代で縫ひ、皿刳り通りに用布を裁ち、その縫ひ代に裁ち込みを入れ、(1)から型紙の方に折つて貼りつけ、外表に返し、型紙のある方を五厘祕かせて鏝をかけます。この皿刳りは後に深口の口になります。

（三）　次ぎにその皿刳りを、被せ裏の(1)の筋の上に中表にして折り重ねますと、七寸二分の用布が二重に折れます。これが深口になるのでございます。それて深口前裏とて三重になりますから、皿刳りの口を少し弛めて(2)の筋までの兩横を三枚重ねて貼り、それより下は深口になる用布のみの二枚の兩横を貼り、且つその二枚の用布の(2)の兩横で二分の裁ち込みを入れ、そして深口の底の兩横から各々三分這入つた所に標をつけ　二分の裁ち込みからその標に向つて斜に折つて兩横を貼り、鏝をかけ、その折つた山を第九十九圖の樣に、一分五厘の隔りて卷き縫ひを致しますと、深口が出來上ります。そして深口の底に糊をつけて前に裏型に貼つて置きます。すると裏型の筋が(1)(2)(3)(4)(5)(6)の順に正しく並ぶのでございます。

（四）　次ぎに前に折つてございます檜を、前口裏の(3)と(4)と



（第九十九圖）



（第百圖）

の筋の間へ襠のいの横を當て、襠の口先が(3)の筋と、底が(4)の筋と重なり、且つ襠布の貼り合せ目を前口裏の布表に向き合せて、五厘の糊代て第九十九圖の樣に貼りつけます。

（五）次ぎに表型の被せに線糊をつけて、被せ裏と中表に、幅の中央を合せて貼りますと、兩横の端て表用布が五厘づゝ殘ります。

（六）次ぎに表と前口裏との、(3)(4)の筋を中表に重ねますと、前に裏に貼りつけてある襠が、その間に挾まりますから、それを挾んだまゝ兩横を貼つて鏡をかけます。

（七）次ぎに表の(1)と深口前裏の(1)との筋を重ね(2)と(2)との筋も重ねて兩横を平に貼ります。

（八）次ぎに今貼り合せました、(2)の筋と、前に襠と一所に貼つた(3)の筋との兩横て表用布が一分弛みますから、それをその間で縮せて貼ります。

（九）次ぎに皿刳りの(1)の筋から被せの角までの兩横を平に貼りますと、被せの角て表の丈が五厘弛みますから、その弛みを被せの幅の五厘の弛みと一所にして、被せの丸味の隅の五分の間で縮せます。

（一〇）次ぎに今貼り合せました(4)から(4)迄の周圍を並の縫ひ代て縫ひ、縫ひ目のすぐ内側に裏型の方から筋を入れて、裏に折り、よく折つて折り癖をつけ、且つ被せの丸味の所には丸味型を當て、縫ひ代だけを少し濕して扱ひよくし、目打錐てよく丸味を作り、鏝をかけて格好を定め、外表に返して、仕上げ篦で被せや襠などの形を正して置きます。

（一一）次ぎに前口裏の(6)の筋を布裏に折つて貼ります。

（一二）次ぎに左右の襠を正しくもう一度折り、前口裏の(5)(6)の筋の間の兩横の端に糊をつけ、扇形に折つてある襠のろの横をいの時と同じ樣に、(6)の筋が襠の口に、(5)の筋が襠の底に、そして襠の裏を前口裏につけて、口の所で前口裏の方が襠より三厘下る樣にして貼ります。そして襠のたゝんてある厚味は前口裏の底の五分斜に裁ち込んてある所で落ちつかせます。

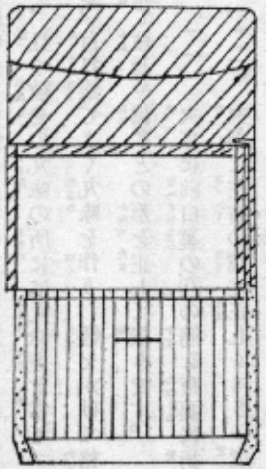
（一三）次ぎに幅四寸、丈一分の心紙にベタ糊をつけ、表型の(4)と(5)との中央に兩横で表型が一分五厘づゝ殘る樣にして貼ります。

（一四）次ぎに被せの心紙を被せに重ねて鋏型に裁ち、兩横と被せの楕型とに一分の幅で糊をつけ、縫ひ代に糊がつく樣にして表側の方へ差し込みます。

（一五）次ぎに幅四寸、丈二寸三分の心紙一枚に兩横へ糊をつけ、袋の後の表側に差し込み、襠の丈の間で落ちつかせます。

（第百一圖）

前表に張子板を貼り合せたる圖



（一六）次ぎに一枚殘つて居ます心紙の兩横に糊をつけ、糊の方を表の(5)(6)の筋の間の幅の中央に載せて鏝をかけ、第百一圖の樣に表型紙の兩横を、心紙通りに折つて貼りつけます。此所は袋の前表になるのでございます。

（一七）次ぎに表型の(6)の筋から一寸六分這入つた幅の中央に、幅八分の小馳かけを捺へます。（卷頭三、製作上の心得中の小馳かけの作り方參照）

（一八）次ぎにその表を前口裏の上に折り重ねますと、下の方では表の(5)と襠の底と、前口裏の(5)とが重なりまして、上の方では表の(6)と襠の上の口とが重なり、裏の(6)はそれより三厘下つて居ます。この表の兩横に裏から糊をつけて襠の上に貼りつけます。

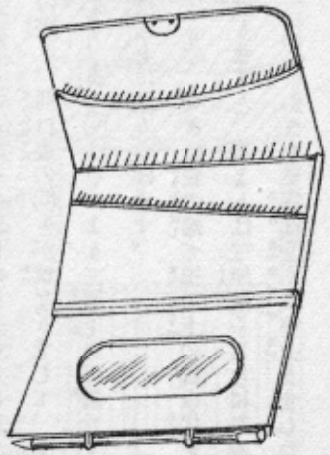
（一九）次ぎに表の端で襠の上の縫ひ代を包んで襠と同じ丈(6)の筋から折つて貼りますと、裏よりは三厘祕くことになるのでございます。

（二〇）かうして袋は全く出來上りましたからいつもの樣に仕上げを致します。

（二一）次ぎに被せの裏へ何時もの方法で小馳を打つて置き、幅四寸、丈二寸三分、厚さ三分の心袋を入れて帶紙を致して置くのでございます。

鉛筆差附紙入

鉛筆差附紙入は、其の三つに折り疊みました所の外見は前に說明致しました。襠附利久形紙入の樣でございまして、それを開いて平に置きますと、中央に名刺入のついた折り襠つきのお札入がありまして、その上には小馳を打つて被せつきの深口が一つございます。そして名刺入の底についてその下に鏡入が



（第二百圖）

ございまして、鏡入と名刺入との間にゴムテップを横に渡してノートを挾む樣にし、其の鏡入の端に鉛筆差のついた實用的な紙入でございます

さてこの紙入を作る材料や、また製作の順序を申しますれば次の如くでございます。

材料

表用布　幅五つ割のものを七寸七分。

裏用布　幅五つ割のものを二尺七寸八分五厘。

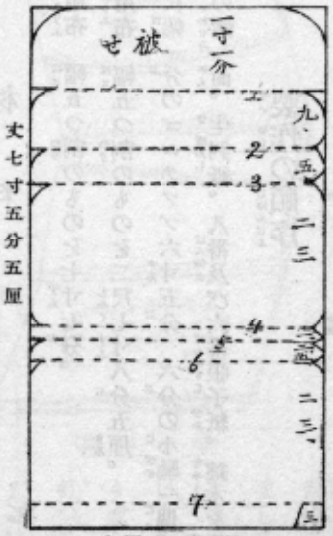
他に幅一分のゴムテップ六寸五分。六分の小馳一個。長さ三寸五分、幅一寸八分の鏡一面。生判紙。八番及び六番張子紙。經木を少々づゝ。

製作の順序

一、裁ち方

（一）　先づ表の型紙から裁ちます。これは生判紙を幅四寸三分、丈七寸五分五厘に裁ち、例の如く丈の右の端から、一寸一分(1)、九分(2)、五分(3)、二寸三

分(4)、一分(5)、二分五厘(6)、二寸三分(7)の順に切り込みを入れ、殘りの三分を鉤の手に裁ちます。そして始めの一寸一分(1)の端の兩横の角は三分の丸味をつけて置きます。これを擴げますと、第百三圖と同樣な表型になります。

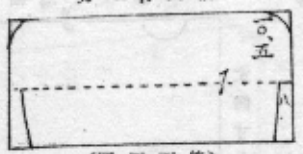


（第百三圖）

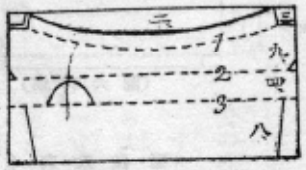
（二）次ぎに被せ裏型を裁ちます。

これは幅四寸二分丈一寸八分五厘に生判紙を裁ち、例の如く丈の右の端から、一寸五厘(1)の所に切り込みを入れ、殘りし八分(下)を鉤の手に裁ち、始めの一寸五厘(1)は表型に重ねて三分の丸味をつけます。これを擴げますと、第百四圖と同樣になります。

（三）次ぎに深口前裏型を裁ちます。これは幅四寸二分、丈二寸二分五厘に生判紙を裁ち、例の如く三分(8)、九分(9)(下)の順に切り込みを入れ、殘りの六分と始



（第百四圖）



（第百五圖）

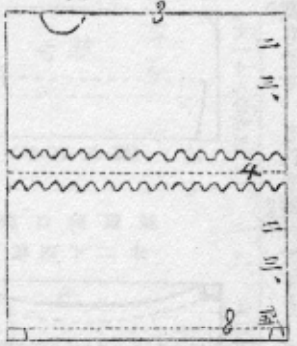
生判紙を裁ち、例の如く丈の右の端から、一分五厘(1)、九分(2)、四分(3)の順に切り込みを入れ、殘りの八分と始めの一分五厘(1)とを鉤の手に裁ち、且つその一分五厘は二分の皿刳りに致します。これを擴げますと、第百五圖と同樣になります。

（四）次ぎに前口裏型を裁ちます。これは幅四寸一分、丈四寸七分五厘に生判紙を裁ち、例の如く(3)二寸三分(4)、二寸三分(8)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第百六圖と同樣な前口裏型になります。

（五）次ぎに名刺入裏型を裁ちます。これは幅四寸三分、丈一寸八分に生判紙を裁ち、例の如く三分(8)、九分(9)(下)の順に切り込みを入れ、殘りの六分と始

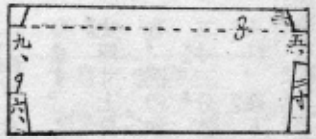
めの三分(8)とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと、第百七圖の型紙の左横と同樣なものが兩横に裁たれて居りますから、三分(8)の鈎の手の方を向ふに紙の表を裁ち板の面につけ、紙の裏を上にして裁ち板の上に縦に置き、手前の右の端から一寸の所に切り込みを

前口裏型
幅四寸一分
丈四寸七分五厘



（第百六圖）

名刺入裏型
幅四寸三分
丈一寸八分

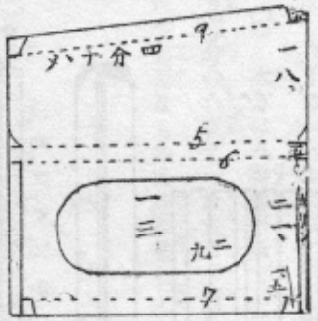


（第百七圖）

入れ、第百七圖の樣に鈎の手に裁ちます。

（六）次ぎに鏡裏型を裁ちます。幅を四寸三分、丈四寸三分五厘に生判紙を裁ち、例の如く幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から一分五厘(9)、一寸八分(8)、一分五厘(6)、二寸一分(7)の順に切り込みを入れ、且つ(6)の切り込みから以下の幅が一分狹くなる樣に、兩横の重つた所で五厘の幅を裁ち落しそして始めの一分五厘(9)と殘りの一分五厘とを鈎の手に裁ちます。

鏡裏型
幅四寸三分
丈四寸三分五厘

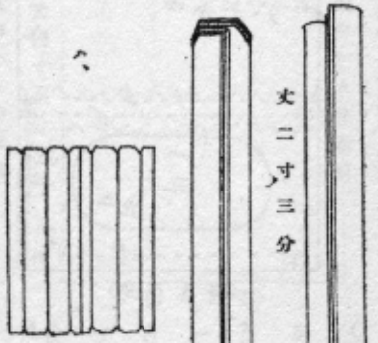


（第百八圖）

次ぎに幅を二つ折りにしたまゝ二寸一分の間を正しく縦に一つに折りますと、一寸五厘になりますから、その輪の方から丈七分五厘、幅の二つ折りの輪から隔一寸四分五厘の所に標をつけ、（二つ折鏡入第五十九圖參照）その標を目標にして小判形に筋を引き、その筋通りに裁ち捨てますと穴が出來ます。これを擴げますと、第百八圖の右横と同樣に兩横が裁たれて居りますから、左横の向ふの端に四分の標をつけ、右端から定木を當てゝ斜に裁ち落し　一分五厘の鈎の手を裁つて置

きますと、第百八圖と同樣な鏡裏型になります。卽ちこの型紙は、左の丈は三寸九分五厘、右の丈は四寸三分五厘になるのでございます。

（七）次ぎに裕の型紙を裁ちます。



（第百九圖）

これは幅一寸八分、丈二寸三分に生地紙を裁ち、幅を中表にして正しく二つに折り、更に二つに折つて四重に致しますと、幅が四分五厘のものになります。次ぎに二枚重つて輪になつた方から幅三分にして筋を入れ、その筋から更に二つに折りますと第百九圖のイの樣に幅三分、丈二寸三分の細長いものになります。次ぎに第百九圖のロの樣に丈の兩端の角を五厘の三角に裁ち落し、これを擴げますと、第百九圖のハの樣な裕型になるのでございます。

（八）次ぎに幅二分、丈二寸三分にして經木を四本裁つて置きます。

（九）次ぎに六番張子紙で、幅四寸、丈一寸八分の被せの心紙を裁ちます。

（一〇）次ぎに八番張子紙で、幅四寸、丈四寸九分の心紙を一枚と、幅四寸丈二寸三分の心紙を一枚裁つて置きます。

これで必要なものは全部裁ち上りましたから、型紙を用布に貼ります。

二、貼り方

（一）丈二尺七寸八分五厘の裏用布を、丈八寸二分五厘、四寸四分五厘、四寸二分、六寸三分五厘、及び幅二寸、丈四寸七分の五つに裁ち切つて置きます。

（二）次ぎに表型の周圍に（紙の表の方に、裏型も同じ。）縁糊をつけ、表用布の上に載せ、兩横は平に貼つて鏡をかけ、被せの丸味は五厘位表に袋取り、もう一

方の丈の端も少し表に袋取つて貼りつけます。

（三）次ぎに被せ裏型の周圍に糠をつけ、丈八寸二分五厘の裏用布の丈の一方の端と、被せの丸味の方の端とを合せて重ね、丸味の端を除きました他の三方は平に貼つて錐をかけ、被せの丸味は裏に袋取つて貼ります。すると八分（下）の切り込みの下に用布が六寸四分殘つてゐることになります。

（四）次ぎに前口裏型の(3)の紙の表の端に糊をつけ、深口前裏型の(3)の筋に重ねて幅の中央を合せて貼りつけます。

（五）この接ぎ合せました型紙の周圍に糊をつけ、且つ深口前裏型の鉤の手の端の紙表と、前口裏型の(4)の筋の前後一分づゝの所に一本づゝ留糊を施し、（第百五圖と第百六圖とを參照。）丈六寸二分五厘の裏用布の上に載せて兩横を平に貼つて錐をかけ、丈の兩端は裏に袋取つて貼ります。この時深口前裏型の鉤の手は用布と前口裏型との間に隱れて了ひます。

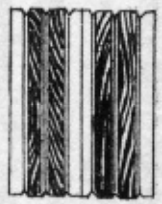
（六）次ぎに名刺入裏型の周圍に糊をつけ、丈四寸四分五厘の裏用布の丈の一方の端と三分の鉤の手の端とを重ねて周圍を平に貼り、六分の鉤の手の端に用布を二寸六分五厘殘して置くのでございます。

（七）次ぎに鏡裏型を貼ります。型紙の周圍に糊をつけ、丈四寸二分の裏用布の上に載せて周圍を平に貼つて錐をかけます。そしてこの鏡裏型には、鏡穴が明いて居りますので、其處へ用布が覗いて居りますから、その穴の周圍の型紙に糊がつかない樣にして、覗いて居る用布に引き糊を致します。（二つ折鏡入鏡裏の貼り方參照。）そして裁ち板の一方に片寄せて糊のついて居る方を貼りつけ、上からよく刷毛で叩いて置いて自然に乾くまで放つて置きます。

（八）次ぎに四本の經木にベタ糊をつけ、襠型紙の折り目の筋の間に貼りつけます。而して丈四寸七分、幅二寸の裏用布を半紙を敷いて横に置き、丈の右の端から二寸五分の所まで引き糊を施し、下に敷いてある半紙の端を持つてこれを縦に置き換へ、引き糊を施した丈の端を襠型の底より二分外に出して、經木を見ながら型紙のみの面を用布の幅の中央に貼り、その上を刷毛で叩いて、そ

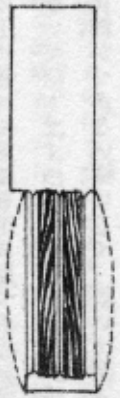
れを裁ち板の一方の隅に片寄せて用布を上にして貼りつけ、自然に乾くまで放つて置きます。そして今貼つた用布の表は後に襠の表となるのでございます。

（九）次ぎに引き糊の乾いた頃を見計つて裁ち板の面から剝ぎ取り、幅の中央の折り目の筋から、縦に二つに裁ち切ります。而して其の裁ち目の横を（イ）と致し、もう一方の横を（ロ）と致して置きます。



（第百十図）

尚、幅の中央から二つに裁ち放しますと、型紙に貼りつけてある四本の経木が、各二本づゝに分たれることになるのでございます。



（第百十一図）

（一〇）次ぎに二つに裁ち放しましたその襠は、型紙の幅は九分て、用布の幅は一寸ありますので、（ロ）の横て用布が一分殘つて居る譯でございます。この一分の用布に、引き糊を塗にして（ロ）の横て裁ち込みを入れ、二寸五分の引き糊を施してあります間だけの（ロ）の横を裁ち落すのでございます。

（一一）次に型紙の丈通りに用布に筋を入れ、用布の丈の兩端と、型紙の兩横とに糊をつけ、且つ型紙の口の端から續いて居る二寸二分の用布の中央から五分づゝ隔つた前後の所に留糊を二本施します。（第百図参照）

（一二）次ぎに型紙の底の縁通りにつけた筋から底の二分の用布を裏に折つて貼つて鍛をかけ、次ぎに二寸二分の用布の方を、型紙の口の縁通りにつけた筋から裏に折り、手早く（イ）の横を平に貼ります。そして（ロ）の横を裁ち板の面につける樣にして幅の中央の折り目の筋を裁ち板の小端に當てゝ中表に二つに折り、それを左の手て抑へ、（ロ）の横を鍛をかけながら貼りつけます。そして（イ）の横の裁ち目から外に出た用布は型紙通りに裁ち捨て、（イ）の横と（ロ）の横との縫ひ代は外表に折つてよく折り癖をつけて置くのでございます。

（一三）以上で全部貼り終りましたから、次ぎに表用布及び鍛裏、深口前裏前口裏は各々周圍を型紙の通りに裁ち捨てます。そして殘せ裏は型紙の下の端

から用布を六寸四分殘したまゝ被せの丸味と幅とを型紙通りに裁ち、名刺入裏は型紙の下の端に二寸六分五厘用布を殘したまゝ、幅とを型紙通りに落ち捨てます。そして裁ち目のほつれを防ぐために、各々の用布に絲糊を施して置くのでございます。

三、縫ひ方

（一）　先づ表型の(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)、被せ裏型の(1)、深口前裏型の(1)(2)(3)、前口裏型の(4)(8)名刺入裏型の(8)(9)、鏡裏型の(9)(5)(6)(7)の切り込みに、各々筋を入れて置きます。

（二）　次ぎに鏡裏の鏡形の穴の周圍より用布を一分五厘づゝ廣く殘して、鏡形に刳り拔きます。そして型紙の穴通りに用布に筋を入れ、その筋を切らない程の深さで、その穴の周圍に一分隔りの裁ち込みを入れるのでございます。

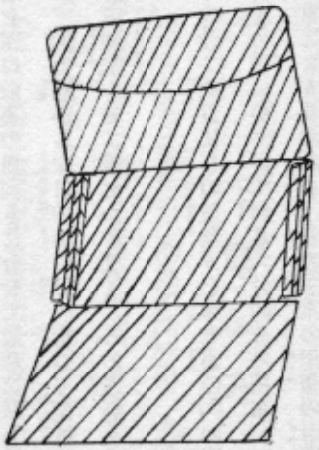
（三）　次ぎにその穴の周圍の用布の布裏に糊をつけ、前につけた筋から裏に折つて型紙の穴の緣を包んで貼つて鏝をかけるのでございます。

（四）　次ぎに深口前裏の(1)の皿刳りの端に糊をつけ、被せ裏の(下)の端につゞく六寸四分の用布の端と中表に貼りつけ、並の縫ひ代で縫ひ、被せ裏の用布の端を深口前裏の皿刳りに合せて皿形に裁ちます。そして縫ひ代に裁ち込みを入れ、(1)の筋から深口前裏の方へ折つて型紙に貼りつけ、外表に返して深口前裏を五厘袱かせて鏝をかけます。この皿刳りは後に深口の口になるのでございます。

（五）　次ぎにその皿刳りを被せ裏の(1)の筋の上に中表に折り重ねますと、被せ裏の(下)につゞいて居る六寸四分の用布が二重に折れて、深口前裏の用布とて三重になりますから、その三重の用布の兩横を貼りますと、被せ裏の二重に折れた所で深口が出來ます。この時皿刳りの口を少し弛めて深口前裏の(2)の筋までの兩横を五厘の糊代で三枚重ねて貼り、(2)の筋からは深口の底になる被せ裏の用布のみ二枚重ねて兩横を貼り、且つその二枚の用布に(2)の筋の所で兩横に

二分の裁ち込みを入れ、そして深口の底にて兩横から各々三分這入つた所に標をつけ、二分の裁ち込みからその標に向つて斜に筋を入れ、その筋から折つて兩横ともに貼り、鏝をかけてその折り山を一分五厘の隔りに巻き縫ひを致して置きます。そしてその底に糊をつけて前口裏型に貼つて鏝をかけて置きます。（第九十九圖參照。）すると各々の裏型の筋が、(1)(2)(3)(4)の四つだけ正しく並ぶのでございます。

檜を貼り附けたる圖



（第百十二圖）

（六）次ぎに深口の前側の布表になつて居る前口裏の(3)の筋と(4)の筋との間へ、兩横ともに檜のいの横を當て、檜の口が(3)の筋と重り、檜用布の貼り合せ目に近い底が(4)の筋と重り、且つそれを貼りつけますのでございます。

（七）次ぎに表型の(4)の筋から上の周圍に糊をつけ、被せの表と裏との幅の中央を中表に正しく重ねて貼つて鏝をかけます。すると表用布は裏用布より幅が一分廣く裁つてありますので、被せの兩横で五厘づゝ殘りますのでございます。

（八）次ぎに表型と前口裏型との(3)の筋と(4)の筋とを中表に正しく重ねて兩横を貼りますと、自ら前口裏に貼りつけてある檜がその間に挟まりますから、それを挟んだまゝ貼つて鏝をかけます。これて檜の一方の横は袋の胴に貼られたことになるのでございます。

（九）次ぎに表型の(1)の筋と、表型の(2)の筋と深口前裏の(2)の筋とを重ねて（この時用布は自然に中表になつて居ります。）兩横を平に貼るのでございます。

（一〇）次ぎに今貼り合せました(2)の筋と、前に檜と一所に貼つた(3)の筋との間の兩横を貼りますと、表用布が一分強みますから、それをその間で縮せる

のでございます。

（一一）次ぎに皿刻りの(1)の筋から被せの角までの兩横を貼りますと、被せの横で表用布の丈が五厘弛みますから、その弛みを被せの弛みの五厘と一所に被せの兩横の丸味の所で弛ませますのでございます。

（一二）次ぎに今貼り合せました各部を、深口の皿刻りの兩横及び襠のつけ根の(3)の筋の兩横で一二囘巻き縫ひをしながら並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ目の直ぐ内側に裏型の方から筋鏝で筋を入れて裏型の方へ折り返し、大黒槌でよく打つて折り癖をつけ、且つ被せの丸味の角には丸味型を當て、指先きに水をつけて縫ひ代を少し濕らせ、目打錐や手でよく丸味の形を取り、鏝をかけて恰好を定め、外表に返して仕上げ筺で被せ及び襠などの形を正して置くのでございます。

（一三）次きに鏡裏の四分の斜になつてゐる(9)の筋の端に糊をつけ、名刺入裏型の下につゞく用布の端を中表に貼つて並の縫ひ代で縫ひます。そして名刺入裏を鏡裏型の斜に合せて裁ち、(9)の筋から折つて鏡裏型に貼りつけ、外表に返して鏡裏を五厘被かせて漫をかけます　此處は後に名刺入の口になる處でございます。

（一四）次きに今縫ひ合せました鏡裏の(9)の筋を名刺入裏の(9)の筋に第百十三圖の樣に外表に重ねて、鏡裏の(5)の筋までの兩横を貼りますと名刺入が出來上ります。この時鏡裏の(9)の筋、卽ち名刺入の口を少し弛めて貼ります。そして名刺入の口は第百十三圖の樣に右横が左横より四分下つて居らねばならないのでございます。

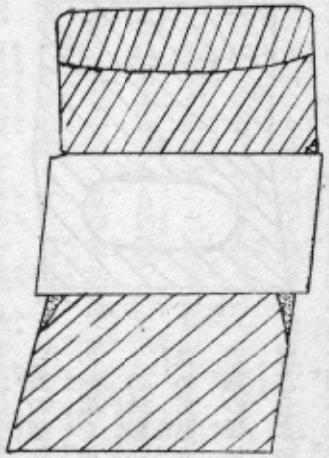
名刺入を作りたる圖

（第百十三圖）

（一五）次きに前口裏の(8)の筋を折つて貼ります。そして襠の底と重つて居ります前口裏の(4)の筋を、兩横から五分の深さに裁ち込みを入れます。

（一六）次きに前口裏の(8)の筋から(4)の筋までの兩横に糊をつけ、第百十四

圖の樣に襠の口を(8)の筋に、底を(4)の筋に合せ、(3)の横の裏（用布を貼り合した方。）を重ねて貼ります。この時襠の口より前口裏の(8)の筋を三厘引かせて置くのでございます。

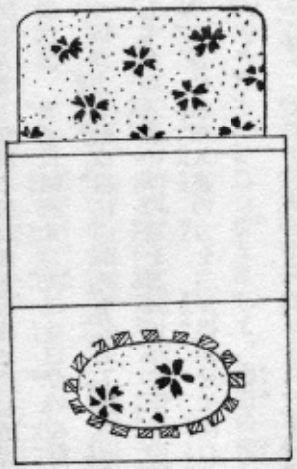

（第百十四圖）

（一七）次きに襠の表に絲糊をつけ、名刺入裏の(8)の筋と、名刺入の底に當つてゐる鏡裏の(5)の筋との間の兩横と中表に貼り合せます。そして並の縫ひ代て縫つて置きますのでございます。

（一八）次きにゴムテップを四寸五分だけ斷ち切り、表用布の(4)の筋と(5)の筋との間の一分の所の幅に渡して、兩横に縫ひつけて置くのでございます。

（一九）次きに鏡裏の(7)の筋を折つて貼ります。

（二〇）次きに表用布の(6)の筋から(7)の筋の間の兩横に糊をつけて、鏡裏の(6)の筋から(7)の筋の間の兩横を第百十五圖の樣に中表に重ねて貼りつけ、並の縫ひ代て縫ひます。そして鏡裏の(7)の筋から名刺入裏の(8)の筋までの兩横の縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れ、その筋から折つて大黒槌て打つてよく折り癖をつけ、外表に返して、仕上げ篦及び目打錐て兩横の縫ひ目を正して置きます。


（第百十五圖）

（二一）次きに幅四寸、丈一寸八分の被せの心紙の丈の一方の端を被せの丸味に重ねて裁ち、兩横と被せの丸味の方とに一分の幅にて糊をつけ、其の糊をつけた方を縫ひ目に向けて表用布と縫ひ目との間に差し込むのでございます。

（二二）次ぎに幅四寸丈四寸九分の心紙の兩端から各々二寸三分の所に筋を入れ、（中央に三分殘ります。）そして兩横に一分の幅にて糊をつけ、その糊のついた方を兩横の縫ひ目に向かせて、表型の(5)の筋から(7)の筋までの間に落ちつく樣に、表用布と兩横の縫ひ代との間に差し込むのでございます。

（二三）次ぎに幅四寸、丈二寸三分の心紙の兩横に糊をつけて、例の如く糊のついた方を縫ひ目に向かせて名刺入裏と兩横の縫ひ目との間に差し込みます。そして名刺入裏の(8)の筋を裏に折って兩横の縁の縫ひ込みと心紙とを包んで貼り、次ぎに名刺入裏の方を三厘祕かせて深口前裏の(8)の筋と貼り合はすのでございます。

（二四）次ぎに表型の(7)の筋から一寸五分這入つた幅の中央に幅八分の小馳かけを掛へます。（參頭三、製作上の心得中の小馳かけの作り方參照。）

（二五）次ぎに用意してある鏡を表用布と鏡裏との間から入れ、糊筥にたつふりと糊をつけて鏡の裏にベタ糊をつけ、そして位置よく鏡形の穴の奥の心紙に貼りつけます。

（二六）そして用布に鏡形の穴の周圍の内側から糊をつけて鏡の表に貼りつけ、鏡と用布とが離れない樣に致して置くのでございます。

（二七）次ぎに表用布の(7)の筋の所の兩横から一寸二分の場所に、丈一寸づゝのゴムテップを二つ折りにして、用布の端とゴムテップの端とを揃へて縫ひつけます。

（二八）次ぎに表型の(7)の筋を裏に折つて兩横の縫ひ込みと心紙の端とを包んで貼り、表用布の方を五厘祕かせて鏡裏の(7)の筋と貼り合すのでございます。

（二九）これで大體出來上りましたから、仕上げ筥及び目打錐などで縫ひ目の凸凹などを直し、丁寧に仕上げをして小鋏などを取つて形を整へます。そして被せ裏の被せの端の幅の中央に、例の如く六分の小馳を打ちますと、鉛筆差附紙入は全く出來上つたことになるのでございます。

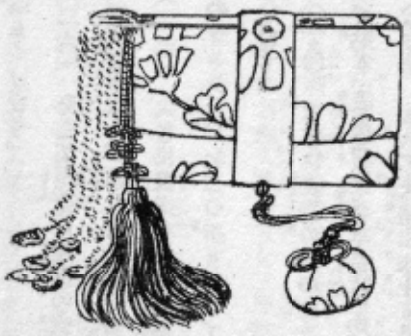
（三〇）最後に幅三寸四分、丈二寸二分、厚さ二分の心紙を前口の中に入れ

帶紙を致して置くのでございます。

折り襠附大人持ち箱迫

箱迫にはその種類が非常に澤山ありまして、この折り襠附大人持ち箱迫もその中の一種でございます。その内部の構造は鉛筆差附紙入の深口とゴムテップを除いた樣なもので、袋を三つ折りにして横から見ますと、恰も鉛筆差附紙入の後に兩勝り紙入をつけた樣な形をして居ります。而してその正面からの形は、袋の上に簪を差した美しい房附の簪差しを挟んで、幅の中央に七分幅の帶をしめ、その帶の端に匂ひ袋の紐を結びつけました

出來上り圖



（第百十六圖）

優美な、高尚なものでございます。

これはもと、婦人が身だしなみや護身用に持つたものでありますが、近頃は儀式の時の裝飾品の一種として用ゐられて居ります。表用布は好みによつて種種なものを用ゐますが、裏用布には白と赤との二色の中の一つを選び、兩横を勝る打ち紐も、赤と、白との二色の中の何れかを用ひます。

材料

表用布　幅三つ割のものを九寸。

裏用布　幅五つ割のものを三尺。

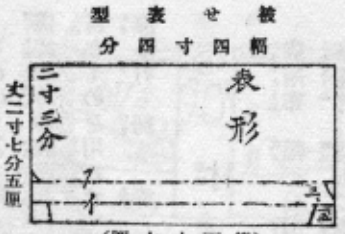
他に生判紙、西の内、八番張子紙　薄い板目紙及び經木を少々づゝ。幅一寸八分、丈三寸五分の鏡を一面。簪を一本。房を一つ。赤の玉を二個。勝り絲五尺五寸。

妻大圖

製作の手順

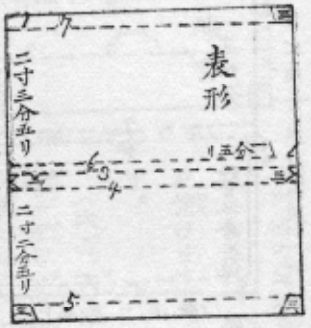
一、裁ち方

（一）先づ被せ表の型紙を裁ちます。幅四寸四分、丈二寸七分五厘に西の内を裁ち、中表に幅を正しく二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、二寸三分(1)、三分(イ)の順に裁ち込みを入れ、残りの一分五厘を釣の手に裁ちます。これを擴げますと、第百十七圖と同樣な被せ表の型紙が出來ます。被せの衝形は後に裏型と合せて裁ちます



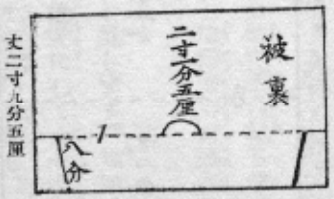
（第百十七圖）

（二）次ぎに勝り表の型紙を裁ちます。幅四寸四分丈五寸六分五厘に西の内を裁ち、中表にして正しく幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、三分(7)、二寸三分五厘(6)、一分五厘(3)、三分(4)、二寸二分五厘(5)の順に切り込みを入れ、殘りの三分と始めの三分(7)とを鈎の手に裁ちます。これを擴げますと、第百十八圖と同樣な勝り表の型紙になります。



（第百十八圖）

（三）次ぎに被せ裏の型紙を裁ちます。幅四寸三分、丈二寸九分五厘に西の内を裁ち、中表に幅を正しく二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から二寸一分五厘(1)の所に切り込みを入れ、殘りの八分を鈎の手に裁ち、これを擴げますと、第百十九圖と同樣な被せ裏型になります。而して二寸一分五厘の端

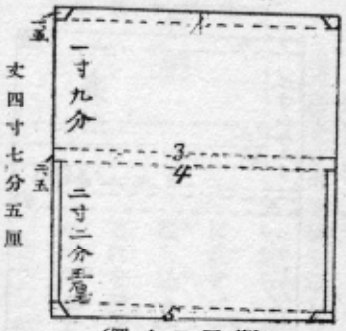


（第百十九圖）

を被せ表の型紙と重ねて楕形に裁ちます。

（四）次ぎに脇り裏の型紙を裁ちます。幅四寸四分、丈四寸七分五厘に西の内を裁ち、中表にして幅を正しく二つ折りにして裁ち板の上に載せ、丈の右の

脇り裏型　幅四寸四分

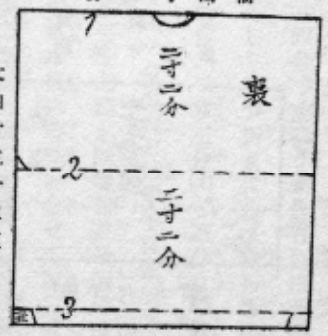


（第百二十圖）

丈四寸七分五厘

端から、一分五厘イ、一寸九分(3)、二分五厘(4)、二寸二分五厘(5)の順に切り込みを入れますと、後に二分殘りますから、二分五厘からその二分の端までの兩横を五厘の幅にて裁ち落し、面して始めの一分五厘（イと終りの二分とを鉤の手

前口裏型　幅四寸二分



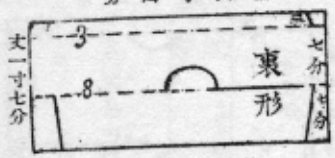
（第百二十一圖）

丈四寸五分五厘

に裁ちます。これを擴げますと第百二十圖と同樣な脇り裏の型紙になります。

（五）次ぎに前口裏の型紙を裁ちます。幅四寸二分、丈四寸五分五厘に用意してある生判紙を裁ち、中表にして正しく幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、(1)二寸二分(2)、二寸二分(3)の順に切り込みを入れ、殘りの一分五厘を鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第百二十一圖と同樣な前口裏型になります。

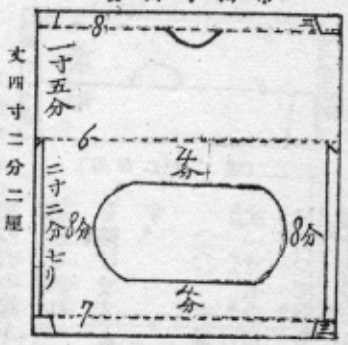
段口裏型　幅四寸四分



（第百二十二圖）

（六）次ぎに段口裏の型紙を裁ちます。幅四寸四分、丈一寸七分に西の内を裁ち、中表にして正しく幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、三分(3)、七分(5)の順に切り込みを入れ、殘りの七分と初めの三分とを鉤の手に裁ちます。これを擴げますと、第百二十二圖と同樣な段口裏型になります。

（七）次ぎに鏡裏の型紙を裁ちます。幅四寸四分、丈四寸二分二厘に西の内を裁ち、中表にして正しく幅を二つに折つて裁ち板の上に載せ、丈の右の端から、三分(8)、一寸五分(6)、二寸二分七厘(7)の順に切り込みを入れますと、後に一分五厘殘りますから、二寸二分七厘からその一分五厘の端までの兩横を五厘の幅にて裁ち落し、而して初めの三分(8)と終りの一分五厘とを鈎の手に裁ちます。



（第百二十三圖）

次ぎに幅を二つ折りに致しました儘て丈二寸二分五厘の所を正しく二つに折つて一寸一分三厘五毛の丈となし、二つ折りにした輪の方から丈七分三厘五毛、幅一寸三分の所に標をつけ、その標から標に向つて鈎の手に筋を引き、更にその鈎の手の角から、丈の方にも幅の方にも六分の所と、鈎の手の角から、丈の方にも幅の方にも六分の所と、鈎の手の角から斜に三分の所とに標をつけ、その標から標に向つて筋を引いて丸昧をつけ、その筋通りに裁ち切ります。これを擴げますと、幅の中央に楕圓形の穴の明いた、第百二十三圖と同樣な鏡裏型が出來ます。

（八）次ぎに折り襠の型紙を裁ちます。幅一寸八分、丈二寸二分に生判紙を裁ちます。鉛筆差附の襠の型紙と幅は同寸法で丈が一分短うございます。

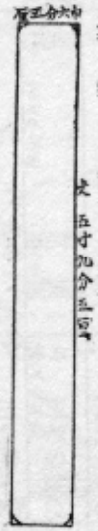
帶表型　（第百二十四圖）


すべての裁ち方は、前に述べました鉛筆差附紙入と同樣でございますから說明を略します。（鉛筆差附襠の裁ち方及び第百二十三圖參照。）

（九）附屬品の方は先づ帶表の型紙から裁ちます。幅七分、丈六寸一分五厘に板目紙を裁ち、紙の表を裁ち板の面につけて平に置き、第百二十四圖の樣に丈の兩端から各々二分の所に筋鑽で筋を入れ、その筋から凡そ五厘の隔りて中

央の分に向つて三本づゝ筋を入れて始めの筋とて四本に致して置きます。次きに丈の中央から二分づゝ離れた所に筋を入れ、その筋から前の様に凡そ五厘の隔りて今度は兩端の方に向つて三本づゝ筋を入れて四本に致して置きます。而して丈の兩端の角を一分の丸味にして落します。

（一〇）次きに帶裏の型紙として、幅六分五厘、丈五寸九分五厘に板目紙を裁ち、丈の兩端の角を表型に合せて裁ち落し、表型と同樣の寸法て筋を入れて置きます。



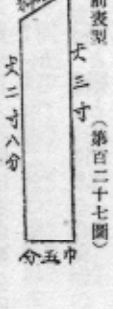
（一一）次きに簪差後表の型紙として幅五分、丈三寸八分に板目紙を一枚裁つて置きます。

（一二）次きに簪差裏の型紙として、幅四分五厘、丈三寸五分に板目紙を裁ち、紙の表を裁ち板の面につけて縱に正しく載せ、右樞に、右の向ふの端から八分の所に切り込みを入れ、左横に、左の向ふの端から一寸の所に切り込みを入れ、第百二十八圖の樣に、その切り込みから丈の手前の端まで兩横を三厘づゝ裁ち落します。

（一四）次きに巾着表の型紙として、幅二寸、丈一寸五分に西の内を二枚裁ち、第百二十九圖の樣に割り出し寸法によつて裁ちます。

巾着割り出し寸法





一　横とは）との間は幅の十分の一（二分）

一　中央とい）との間は、（はと中央との間の三分の一（三分）

一　（いとろ）との間も同樣（三分）

一　（ろとは）との間も同樣（三分）

一　底とに）との間は丈の四分の一（三分七厘五毛）

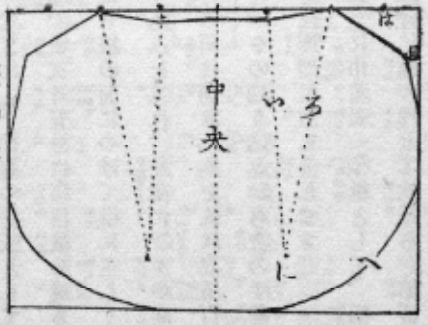
一　（ほと横との間は一分

一　中央とに）との間は巾の六分の一（三分三厘餘）

一　（へと角との間は丈の二倍強（三分餘）

（一五）　次ぎに巾着裏の型紙として、幅二寸、丈五分にして生判紙を二枚裁つて置きます。

以上で全部裁ち終りましたから、各々の型紙をそれ〳〵用布に貼ります。



（實物大）

（第百二十九圖）

二、貼り方

（一）　幅三つ割り丈九寸の表用布に附錄の圖の樣に表型を貼ります。その貼り方は被せ表と勝り表とは縁糊で貼り、櫛形の所は表に袋取つて置きます。帶型と巾差し型とはぺた糊にして周圍に用布を二分殘して貼ります。巾着型は(3)の筋に止め糊をして縁糊で貼ります。

注意　被せ表を貼る時模樣のなるべく宜敷い所で又模樣が逆さまにならない樣に、また巾着二枚の型紙のうち一枚は模樣の宜敷い所に貼りまして、それを表側に致します。

（二）　次ぎに幅五つ割り、丈二尺九寸八分の裏用布を、丈六寸七分と、四寸七分五厘と、七寸八分二厘と、幅二寸、丈四寸五分のもの一枚と、幅二寸、丈一寸五分のもの二枚との六枚に裁ち、殘りの用布はその儘に致して置きます。

（三）　次ぎに被せ裏型の(1)の切り込みに鉛筆で筋を入れ、前口裏型の(1)の端

の紙表の方に縁糊をつけて、幅の中央を揃へて被せ裏型の(1)の筋に重ねて貼りつけます。而して貼り合せた型紙の周圍に糊をつけ、且つ被せ裏型の八分の鈎の手の端の紙表と、前口裏型の(2)の切り込から各々一分づゝ隔つた所とに（第百二十一圖參照。）一本づゝ留糊を施して、丈六寸七分の裏用布の上に載せて兩横を平に貼つて鏝をかけ、丈の兩端は少し裏に袋取つて貼ります。

（四）次ぎに膝り裏型の周圍に糊をつけ、丈四寸七分五厘の裏用布の上に載せて兩横を平に貼つて鏝をかけ、一分五厘の鈎の手の端は平に、二分の鈎の手の端は裏に袋取つて貼ります。

（五）次ぎに段口裏型の周圍に糊をつけ、丈七寸八分二厘の裏用布の丈の一方の端に三分の鈎の手の端を揃へて、周圍を平に貼つて鏝をかけます。

（六）次ぎに段口裏型を貼りつけました七寸八分二厘の裏用布の他の一方の端に、鏡裏型の一分五厘の鈎の手の端を揃へて載せ、周圍を平に貼つて鏝をかけます。すると段口裏型と鏡裏型との間に用布が一寸九分殘ることになります。

而してこの鏡裏型には幅の中央に楕圓形の穴が明いて居りますから、この穴を鉛筆差付の鏡穴と同樣の仕方で貼ります。（鉛筆差付鏡裏型貼り方參照。）

（七）次ぎに襟型紙も鉛筆差付のと同樣に貼るのでございますから此所には略します。（鉛筆差付襟の貼り方及び圖第百二十四圖第百二十五圖を參照）

（八）次ぎに巾着裏型二枚の兩横と丈の一方の端との三方に糊をつけ、幅二寸、丈一寸五分の裏用布二枚の上に、糊をつけない方に用布を殘して、二枚共平に貼ります。

（九）次ぎに帶裏型にベタ糊をつけ、殘りの裏用布の一方の横に片寄せて、型紙の周圍に二分づゝ用布に餘裕をつけて貼ります。

これで全部貼り終りましたから、それ〳〵用布を裁ち切らねばなりません。

（一〇）即ち、被せ表及び膝り表、前口裏、被せ裏、膝り裏の用布は型紙通りに周圍を裁ち切り　段口裏及び鏡裏は幅の兩横と、段口裏型の三分の鈎の手の端及び鏡裏の一分五厘の鈎の手の端とを型紙通りに裁ち捨て、裁ち目のほつ

れを防ぐために各々縁糊を施して置きます。

而して附屬品の方は巾着表を二枚とも型紙通りに裁ち、帶表及び簪後表、簪前表は型紙の周圍に用布を二分づゝ殘して裁ち落します。

次ぎに巾着裏型は二枚ともに其儘にして置き、帶裏及び簪裏は型紙の周圍に二分づゝ用布を殘して裁ち落します。而して各々裁ち目のほつれを防ぐ爲めに縁糊を施して置きます。

三、縫ひ方

（一）　先づ被せ表型の(1)イ、膝り表型の(7)(6)(3)(4)(5)、被せ裏型の(1)、前口裏型の(2)(3)、膝り裏型のイ(3)(4)(5)、段口裏型の(3)(8)、鏡裏型の(8)(6)(7)の切り込みに切り込みから切り込みに向つて定木を當て、各々筋鏨で筋を入れます。

（二）　次ぎに被せ表のイの端に五厘の幅にて糊をつけ、膝り裏のイの端と中表に重ねて貼り合せ、並の縫ひ代て縫ひ、イの筋から膝り裏型の方に折つて貼りつけます。而して外表に返し、布裏の方から鏝をかけます。

（三）　次ぎに被せ裏の(1)の筋から前口裏の(2)の筋までの間へ、兩横ともに襠のいの横の裏方を當て、襠の口が(1)の筋と重り、襠用布の貼り目に近い底が(2)の筋と重り、且つ襠用布の貼り合せ目を前口裏に向き合はせて五厘の糊代で貼りつけます。

（四）　次ぎに被せ表の(1)の筋から被せの周圍に糊をつけ、被せの楕形の幅の中央を正しく重ねて中表に貼ります。すると表用布は裏用布よりも幅が一分廣く裁つてありますので、被せの兩横で、幅が五厘づゝ殘ります。而して被せ表の(1)の筋と被せ裏の(1)の筋とを正しく重ねて兩横を貼りますと、表用布の丈が一分五厘長くなつて居りますから、その内五厘は楕形の兩横の角で幅の五厘と共に、殘りの一分は襠の口、即ち(1)の筋から上に四分の間で縮せて置きます。

（五）　次ぎに被せ表の(1)の筋から膝り裏の(2)の筋までの兩横に糊をつけ、襠

のいの横を挟んで被せ裏の(1)の筋から前口裏の(2)ハ筋までの間と正しく貼り合はせます。

（十六）　今貼り合せました縢り裏の(2)の筋から被せの周圍を並の縫ひ代で縫ひ前口裏の型紙の方から縫ひ目の直ぐ内側に定木を當てヽ筋を入れ、その筋から先づ兩横を裏型の方に折つて而して打ち、よく折り癖をつけ、次ぎに被せの櫛形を折つて鑢をかけ、外表に返して仕上げ篦で被せの端及び兩横の折り目を正しく致して置きます。これで襠の一方の横は袋についた譯でございます。

（七）　次ぎに鏡裏型の三分の鉤の手、卽ち(8)の筋の端に糊をつけ、(8)の筋から用布を外表に折つて段口裏の(8)の筋と重ねますと、用布が三枚重りますから、(8)の筋から二分の間は兩横を三枚重ねて貼り、二分から下は上の一枚を退いて下の二枚の用布の兩横を貼りますと、鏡裏の(8)の筋から段口裏の(8)の筋までの二寸九分の用布が二つに折れて、一寸四分五厘の深さの段口が出來ます。

（八）　次ぎに(8)の筋、卽ち段口の口から二分下つた所へ、今貼り合せました二枚の用布の兩横に二分の深さの裁ち込みを入れ、段口の底の所に兩横から三分の深さにして標をつけ、その標から二分の裁ち込みに定木を當て、筋を入れてその筋通りに折つて例の通りに卷き縫ひを致して置きます。

（九）　次ぎに縢り裏の(5)の筋を裏に折つて貼ります。

（一〇）　次ぎに縢り表の(5)の筋から(3)の筋までの間の兩横に糊をつけ、縢り裏の(5)の筋から(3)の筋までの兩横と中表に重ねて貼り合せます。すると(4)の筋から(3)の筋までの間で表用布が五厘弛みますから、その弛みをその間で縮せます。而して並の縫ひ代で縫つて置きます。

（一一）　次ぎに鏡裏の(7)の筋を裏に折つて貼ります。

（一二）　次ぎに縢り表の(6)の筋から(7)の筋までの間の兩横に糊をつけ、鏡裏の(6)の筋から(7)の筋までの間と中表に重ねて兩横を平に貼り、並の縫ひ代で縫つて置きます。

（一三）　次ぎに前口裏の(3)の筋を裏に折つて貼り、而して襠の底と突き合つ

てゐる(2)の筋に、兩横から五分の深さの裁ち込みを入れます。

（一四）次ぎに前口裏の(3)の筋から(2)の筋までの間の兩横に糊をつけ、兩横ともに襠のろの横の裏と重ね、且つ前口裏のろの筋を襠の口より三厘引つ込ませて平に貼つて鍛をかけます。すると襠の底は前口裏の(2)の筋と重つて居ります。

（一五）次ぎに段口裏の(3)の筋から鏡裏の(6)の筋までの間の兩横に糊をつけ襠のろの横の表と重ね、襠の底が鏡裏の(6)の筋と重り、段口裏の(3)の筋を口と重ねて平に貼り、並の縫ひ代で縫つて置きます。而してその各々の縫ひ代、即ち勝り裏の(5)の筋から(3)の筋まで及び鏡裏の(7)の筋から(6)の筋まで、前口裏の(3)の筋から(2)の筋までの間に、勝り裏、鏡裏、前口裏の方から縫ひ目の直ぐ内側に定木を當てゝ筋を入れ、その筋から折つて叩き、よく折り癖をつけてから外表に返し、仕上げ篦及び目打錐の尖端で折り目を正して置きます。

（一六）次ぎに被せの心紙の丈の一方の端を被せの楕形に合せて裁ち、もう一方の端は端から一分の所に筋鍛で筋を入れ、その筋から五厘の隔りて三本筋を入れて都合四本と致して置きます。而して兩横と被せの楕形との三方に一分の幅に糊をつけ、糊のついた方が縫ひ目につく樣にして勝り表の(5)の筋と勝り裏の(5)の筋との間から被せ表の方に差し込み、目打錐や仕上げ篦にて形を整へて置きます。

（一七）次ぎに被せの根本の心紙の兩横に一分の幅にて糊をつけ、糊のついた方が兩横の縫ひ目につく樣にして、被せ表の(1)の筋から、勝り裏の(3)の筋までの間の表用布の方に差し込んで形を正して置きます。

（一八）次ぎに段口の心紙の兩横に一分の幅にて糊をつけ、糊のついた方が兩横の縫ひ目につく樣にして、段口裏の(3)の筋から鏡裏の(6)の筋までの間に差し込み、差し込みながら形を整へて置きます。

（一九）次ぎに勝り表の心紙の丈の一方の端から二寸二分五厘の所に筋鍛にて筋を入れ、その筋から四分の所にも筋を入れ、その筋から更に五厘の隔りて

三本筋を入れて都合五本の筋とし、而して兩横に一分の幅に糊をつけ、糊のついた方が兩横の縫ひ目につく樣にして二寸二分五厘の方を縢り表の(5)の筋から(4)の筋までの間に殘りの丈が縢り表の(4)の筋から(7)の筋までの間に落ちつく樣にして、差し込みます。而して形を整へて置きます。

（二〇）次ぎに段口裏の(3)の筋を裏に折つて心紙と兩横の縫ひ込みとを包んで貼り、三厘ふかせて更に前口裏の(3)の筋と貼り合せます。

（二一）次ぎに鏡裏の楕圓形の穴の奥に、鏡裏の(7)の筋と縢り表の(7)の筋との間から鏡を入れ、糊筥にたつぷり糊をつけて鏡の裏にベタ糊をつけ、位置よく鏡形の穴の奥の心紙に貼りつけます。

而して用布の楕圓形の穴の周圍の内側に糊をつけて鏡の表に貼りつけ、鏡と用布とが離れない樣に致して置きます。

（二二）次ぎに縢り表の(7)の筋と(5)の筋とを各々裏に折つて、心紙と兩横の縫ひ込みとを包んで貼り、(7)の筋の方のみ五厘ふかせて更に裏用布と貼り合せます。

（二三）次ぎに縢り表の(3)の筋と(4)の筋とを裏用布の方に折つて箱形を拵へ一分づゝの目盛を施した厚さ三分五厘の縢り板を挟んで折つてよく折り癖をつけて置きます。而して縢り絲五尺五寸を一尺九寸と三尺六寸とに切つて置き、三尺六寸の方を縢り針に通して被せ附兩縢り紙入と同樣の方法で、二分の隔りにして兩横に千鳥がけを致します。

（二四）次ぎに縢り表の(5)の筋を五厘ふかせて縢り裏の(5)の筋と貼り合せます。而して丁寧に仕上げを致しまして凸凹や小皺を取つて形を正しく整へて置きます。

（二五）次ぎに半紙を、幅四寸一分、丈六寸六分にして二十枚だけ裁ち、それを二枚づゝ重ねて丈を三つに折つて二寸二分のものと致し、口の方で輪が重なる樣にして縢つた箱の中に入れます。而して前口の中には、幅四寸一分、丈二寸一分の心袋を作つて入れますと、袋の方はすつかり出來上つたことになります。

ます。

（二六）次ぎに附屬品を拵へます。巾着表の口の端に糊をつけ、裏用布の型紙を貼つてある所と中表に貼り、並の縫ひ代で縫ひます。而して裏用布を表型通りに裁ち切り、縫ひ目の直ぐ内側に裏型の方から筋を入れ、縫ひ代に裁ち込みを入れて表型の方へ折つてよく折り癖をつけて外表に二枚とも返します。

（二七）次ぎに口を除いた他の三方の表型に五厘の幅にて糊をつけ、裏用布と外表にして底の方を袋取つて貼ります。而して裏用布を表型に合せて裁ち捨てます。

（二八）次ぎに表用布の方を中表にして二枚重ねて口を除いた他の三方を縁糊て貼り、並の縫ひ代で縫つて縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れ、縫ひ代に裁ち込みを入れて縫ひ目を兩方に割つて鏝をかけます。而してよく折り癖をつけましてから外表に返し、丁寧に仕上げを致しまして、格好がよくなる樣に木綿を入れて置きます。

（二九）次ぎに兩横のいの筋を外に折り、ろの筋を中に折つて巾着襞を取り（第百二十九圖の巾着の型紙の圖を參照。）而して第百三十圖の樣に幅の中央から兩横に向つて二分づゝの所で、且つ口の方からも二分に當たる所に表用布と同じ色の糸を通して、しつかりと結んで置きます。



（第百三十圖）

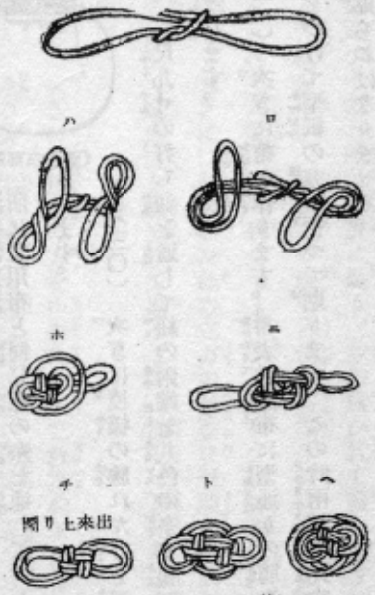
（三〇）次ぎに模様の勝れた方を選んで巾着の表側と致し、一尺九寸の打ち紐を通して紐の兩端を共色の糸で縢りつけて巾着の紐結びを致します。

（三一）次ぎに帶を作ります。帶表の用布に型通りの筋を入れ、用布の周圍に糊をつけて型紙の方へ折つて貼ります。この時兩端の丸味を角立たぬ樣に形よく貼らねばなりません。

（三二）次ぎに帶裏の用布に型通りの筋を入れ、用布の周圍に糊をつけてその筋から折つて表と同樣の仕方で型紙に貼りつけます。而して帶裏の裏の方に

ベタ糊をつけて外表にして帶表と貼り合せます。その貼り方は、初め丈の一方の端から二分の所に入れてある筋と筋とを貼りながら鋏をかけて筋から折り、次きに中央の六分の所を鋏をかけながら箱形に折つて裏表を過不足なく貼るのでございます。

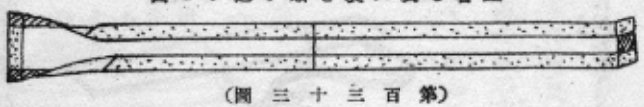
紐の結び方



（第百三十一圖）

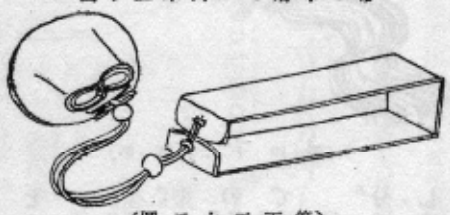
（三三）次きに丈の兩端から各々一分づゝ這入りました所の幅の中央に、鳩目抜きの小の方で穴を明け、その穴の周圍にボタンの穴縢りを致して置きます。而して巾着の紐の輪に用意してありました赤の玉を二箇通し、其輪を更に第百三十二圖の樣にして帶の兩端の二つの穴に通し、次きに輪の中に巾着を外れない樣に致しましてから赤い二つの玉を、一つは巾着の紐の弛まぬ樣巾着の紐止めに、一つは帶の紐が弛まぬ樣帶の紐止めに帶の所に置きます。

（三四）次きに簪差しを作ります簪差し表の用布に型通りの筋を入れ、まづ簪差し前表の二分斜うになつてゐる丈の方をその筋から折つて用布に糊をつけて貼りつけ、次きに簪差し裏の用布に型通りの筋を入れ、左右の鉤の手から下の用布を型通りに切り捨てます。而して幅の廣い所の丈の端を筋から折つて貼り、第百二十九圖の樣に簪前表の斜の端に裏型の鉤の手を重ねて型紙の



（第百三十三圖）

帶と巾着との出来上り圖



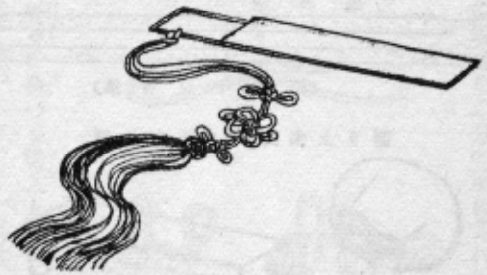
（第百三十二圖）

外に出てゐる二分の裏用布と表用布とを接ぎ合せて長いものと致しましてから簪差し前表及び後表、裏の用布の兩横に糊をつけて筋から折つて型紙に貼りつけます。

（三五）次ぎに簪差し前表及び簪差し裏の型紙の方の面にベタ糊をつけ、後表型と前表型との貼り目から二つに折つて貼りつけ、後表の丈の端の縫ひ代で簪差し裏の貼り代を包んで貼つて置きます

（三六）次ぎに丁寧に仕上げをして裏型の八分の丈の横の中央の所に、横から一分の深さにして目打錐で小さな穴を明け、第百三十四圖の樣に房の紐の輪の方を通して、更にその輪の中に房をくゝらせてしつかり締めて置きます。

簪差しに房をつけたる圖



（第百三十四圖）

（三七）以上で全く箱迫が出來上りましたから、被せを向ふに向かせて左の手に持ち、簪差しの裏を上に向けて房が右になる樣に被せの山の中央に載せ、箱の輪の方を袋の山に跨らせて袋を挟ませたまゝ紐を締めて玉で止めて置きます。而して簪差しに簪を差して置きます。

二寸五分押し口附蟇口

二寸五分押し口附蟇口は　押し口になつた直徑二寸五分の口金のついた蟇口でございまして、その形は好みによつて種々に作ります。

材料

表用布　幅六つ割のものを五寸。
裏用布　幅六つ割のものを五寸。
他に二寸五分押し口の口金一個。幅八分の生判紙て捻

出來上り圖



（第百三十五圖）

つた紙捻を二本。生判紙及び六番張子紙を少々づゝ。

製作の順序

一、裁ち方

（一）附錄二寸五分押し口附蟇口の型紙通りに生判紙にて四枚裁ち、表型と裏型とに二枚づゝ分けて置きます。

（第百三十六圖）

心紙に切り込みを入れたる圖

（二）他に六番張子紙で幅二分、丈六寸の心紙を一枚裁ち、丈の兩端を第百三十六圖の樣に三角に裁ち、而して兩横に交叉させて二分の隔りて一分の深さに裁ち込みを入れて置きます。

二、貼り方

（一）表型二枚とも紙の表の周圍に糊をつけ、表用布の上に載せて兩横は平に貼つて鏝をかけ、丈の兩端の丸味は表に袋取つて貼りつけます。

（二）次ぎに裏型二枚を表型と同樣の方法にして裏用布の上に載せ、兩横は平に貼つて鏝をかけ、丈の兩端は裏に袋取つて貼りつけます。而して何れも用布の周圍を型紙通りに裁つて縁糊を施して置きます。

（第百三十七圖）

裏の貼縁り込み上みりたる心圖紙

三、縫ひ方

（一）表用布の口を際いた他の三方に糊をつけ、もう一枚の表用布と中表に重ねて貼り合せます。次ぎに裏用布も同樣の仕方で中表に貼つて置きます。

（二）次ぎに口金の幅の寸法によつて縫ひ代を定めて表用布の口を除いた三方を縫ひ、裏用布の方は表の縫ひ代より三厘深くして縫ひ、何れも縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れ、縫ひ代に二分の隔りて裁ち込みを入れて、兩方に開いて貼つて置きます。すると表用布と裏用布とで別々に袋が出來上ります。

（三）次ぎに表用布て出來た袋の中に蟇口の仕上げ板を入れ、縫ひ目に當てゝ大黒槌で叩いて折り癖をつけ、外表に返して置きます。

（四）次ぎに裏用布て出來た袋も表と同樣の仕方でよく折り癖をつけて、縫ひ代を割つて貼りつけ、前に裁つて置きました心紙（第百三十七圖）にベタ糊をつけて、第百三十七圖の樣に口の端から二分程下つた所から縫ひ目の上に貼り、更にその心紙にベタ糊をつけて外表に返してある表の袋の中に入れて心紙を表の袋の縫ひ目に重ね、蟇口の仕上げ板を裏の袋の中に入れて叩きながらよく貼りつけて形を整へます。

口金に用布及び紙捻を押込んだ圖



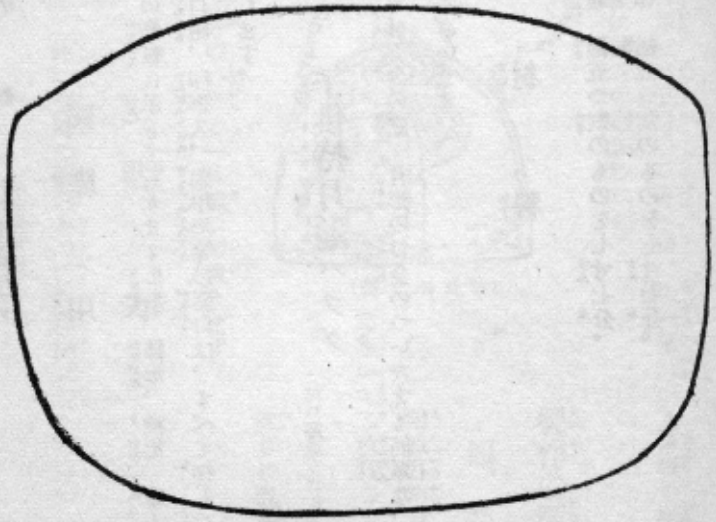
（第百三十八圖）

（五）次ぎに表の袋と裏の袋との口を三分の糊代て外表に貼りつけます。而して磐石糊を水に浸してよく溶き、口金の溝の中に糊むらのない樣に引き、口金の兩横の鋏を袋の兩横の縫ひ目に當てゝ袋の口の端を裏用布の方から第百三十八圖の樣にして、口金の溝の中に口金入て折り返して押し込み、而して用意してあつた紙捻に糊を引き、同じく裏用布の方から口金の中に口金入て入れ、用布が動かぬ樣に致して置きます。

以上て全部出來上りましたから、綿屑を袋の中に入れて形を整へて置きます。

附　がまぐち

（第百三十九圖）



四、應用

附錄の型紙に示してあります様形、柿形、桃形、富士形、月形二寸五分、三寸押し口附、印形入、鉞甲形等の蓋口は、すべて押し口附蓋口と同樣の仕方で製作致します。

子供持月形バッグ

直徑三寸五分の三ケ月形の口金のついた尤も簡單な、子供持の下の四角な手提袋でございます。

材料

表用布　幅五つ割のものを七寸七分。
裏用布　幅五つ割のものを七寸七分。

他に月形三寸五分の口金一個。生判紙及び五番張子紙少々づゝ。幅一寸二分の生判紙を捻つた紙捻を二本。

製作の順序

四、裁ち方

（一）附錄月形バッグの型の上に生判紙を敷いて二枚裁つて置きます。（一枚は表型となり、一枚は裏型となります。）

（二）次ぎに五番張子紙を以て、幅五分丈三寸三分の心紙を一枚裁つて置きます。

田來上り圖



（第百四十圖）

二、貼り方

（一）二枚の型紙の紙の表の方の周圍に糊をつけ、一枚は表用布に、一枚は

裏用布に、各々平に貼つて鍍をかけます。而して周圍を型紙通りに裁つて縁糊を施して置きます。

三、縫ひ方

（一）表用布を中表にして正しく丈を二つに折り、兩横のイの所まで並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ目を兩方に割つて鍍をかけます。而して底の折り目を、兩横の縫ひ目と第百四十一圖の様に中表に重ねますと、兩横の角に三角が出來ますから、その角から五分の深さにして眞直ぐに縫ひ、縫ひ目の直ぐ内側に底の方から筋を入れ、その筋から底の方へ折つて貼りつけ、外表に返しますと袋の形になつて居りますから、丁寧に形を整へて置きます。



（第百四十一圖）

（二）次ぎに裏用布も表用布と同様の仕方にしてイの所まで兩横を一分三厘の縫ひ代で縫ひ、筋鍍を入れ、縫ひ目を割つて鍍をかけます。而して底の兩横の角と表と同様に縫ひ、上の方に折つて貼つて置きます。

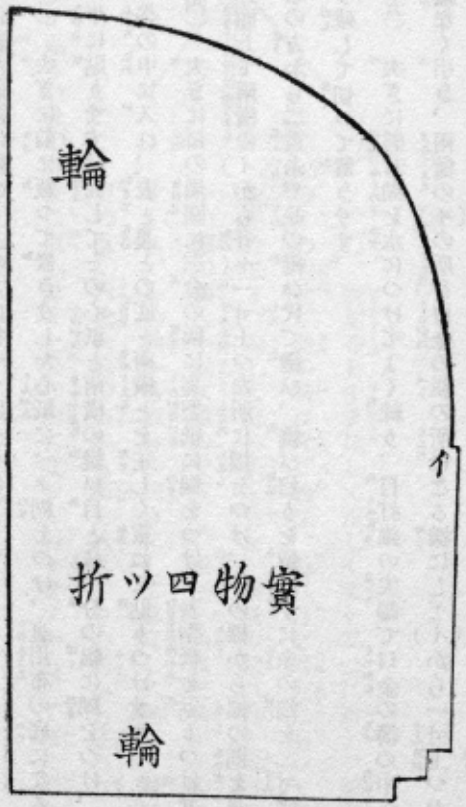
（三）次ぎに前に裁つて置きました心紙にペタ糊をつけ、裏用布の底になる所に平に貼ります。而してその心紙と兩横の縫ひ目とに一分の幅に糊をつけ、表の袋の中に入れ、表と裏との底と兩横とを正しく重ねて貼りつけます。

（四）次ぎに口の周圍に三分の幅に裏型紙に糊をつけ、表型紙を貼りつけます。而して兩横のイから各々一寸上つた所に標をつけ、その標から標の間を裏用布の方から二重糸で並の縫ひ代で縫ひ、縫ひ終りを留めずに糸の端を二寸ばかり殘して切つて置きます。

（五）次ぎに磐若糊を水につけてよく練り、目打錐の尖端で口金の溝の中へ萬遍なく引き、兩横のイの所を口金の鋲の所になる様にしてイから一寸上つた所までの間を裏用布の方から口金入で押し込み、（蟇口の口金の入れ方圖參照）而して殘りの用布の丈を、口金の長さだけに糸を引き締めて縮めてから入れます。

（六）次ぎに用意してある紙捻に糊を引き、糊むらのない様に拭き取つて糊の乾かない内に手早く口金の中に入れ、殘りの端を切つて了ひます。而して口の周圍を縫つた糸も殘りを切つて置きます。

子供持月形バッグ（第四百十二圖）



以上で子供持月形バッグは全く出來上りましたから、心紙として半紙を一枚丸めて袋の中に入れ形を整へます。

新オペラバッグ

新オペラバッグは長方形の袋でございまして、口から一寸五分這入つた所の表用布と裏用布との間に金の棒を通し、その棒の兩横を打ち紐で締める様にした輕便な手提袋でございます。而して口の周圍に三分幅に襞をとつた所などはなか〳〵捨て難い趣があります。

材料

表用布　幅三つ割のものを一尺二寸。
裏用布　幅三つ割のものを一尺二寸。
他に自由オペラの口金一組、打ち紐三尺。生判紙及び六番張子紙を少々づゝ。

製作の順序

一、裁ち方

出來上り圖



（第百四十三圖）

（一）附錄新オペラバッグの（イ）の型通りに、生剪紙にて表型を一枚と、（ロ）の裏型を二枚裁つて置きます。

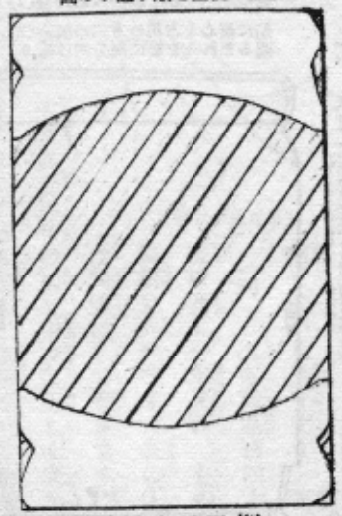
（二）次ぎに六番張子紙で（ハ）の型通りの心紙を二枚裁ちます。これは表の口に貼る心紙て、それより三厘狹めましたものを二枚裏の口に貼る心紙を裁ちます。

二、貼り方

（一）先づ裏用布を表型より丈を一分短かくして表型通りに一枚裁つて置きます。

（二）次ぎに表型の紙表の周圍に糊をつけ、表用布の上に載せて平に貼つて鏝をかけます

裏布に裏型を貼り込み圖

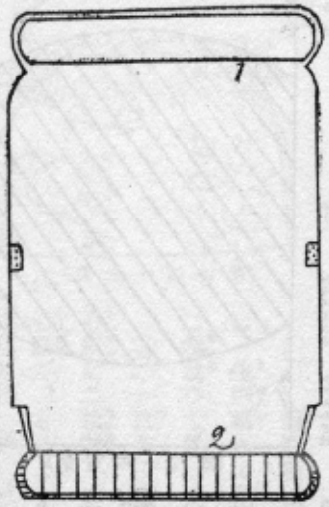


（第百四十四圖）

（三）次ぎに裏型の皿刳りを除きました他の三方に二枚とも緣糊をつけ、前に表型に合せて一分短かく裁つて置きました裏用布の丈の兩端に、第百四十四圖の樣に皿刳りを內側に向き合せて平に貼りつけます。而して表用布を型紙通りに裁ち捨て、裏用布と共に緣糊を施して置きます。

三、縫ひ方

（一）表の心紙の兩横と丸味の端との三方に二枚とも繰糊をつけ、表の丈の兩端に、第百四十五圖の(1)の樣に三方に等しく用布を殘つて貼りつけます。而して(2)の方にも亦裏の心紙も同樣の方法にして裏型に貼りつけて置きます。



(1)表用布に心紙を貼り込み圖のみ込り貼に紙心を布用の三方の紙心(2)
圖るたれ入を筋に隔分四け附り

（第百四十五圖）

（二）次ぎに表裏共に、型紙のイとロとの所に切り込みを入れ、而して表裏共に心紙の三方に、型通りに筋鑛を入れ、その筋を、その深さにしてロの切り込みまで續けて入れて置きます。

（三）次ぎに表裏共にその筋までの深さにして三方に糊をつけ、筋から裏に折つて貼ります。この時、角の所の丸味を殘してロからロ迄の兩横と丈の端とを先きに貼り、丸味の所は最後に目打錐の尖端で用布を縮せながら貼りますと第百四十五圖(2)の樣になります。

底の角を三角に折りたる圖



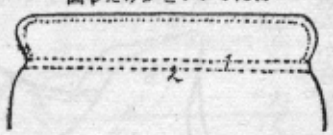
（第百四十六圖）

（四）次ぎに第百四十五圖(2)の樣に心紙の丈の中央に縱に筋を一本入れ、その筋より四分づゝ隔てゝ幅の全體に筋を入れます。表の(1)の方も同樣に筋を入れ、裏も又同樣にして置きます。

（五）次ぎに表用布の丈を中表に正しく底から二つに折り、兩横のロの裁ち込みから輪になつてゐる底まで繰糊で平に貼り合せます。而して裏用布も表用布と同樣の仕方で兩横を貼ります。次ぎに裏用布のロの裁ち込みを表用布のロの裁ち込みに重ねて、兩横を貼り合せますと、表二枚と裏二枚とで四枚重なつて居ます。

（六）次ぎにその貼り合せた所を一分の縫ひ代で縫ひ、裏用布の方から縫ひ目の直ぐ内側に筋を入れ、その筋から裏の方へ折つて叩いてよく折り癖をつけて置きます。而して表用布と裏用布との底になる所の折り目を兩方から第百四十六圖の樣に横の縫ひ目を中に挟んで重ねて角に三角を拵へ、角から五分の深さにしてその三角を縫ひ、表用布の方へ折つてよく叩いて折り癖をつけて表用布の方が外になる樣に外表に返します。

口にミシンをかけたる圖



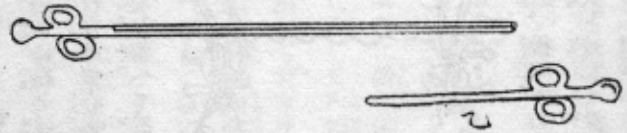
（第百四十七圖）

（七）次ぎに裏型の兩横のイとイとの切り込みの間の口の周圍に五厘の幅に糊をつけ、表型と外表に重ねて貼り合せます。この時表が二厘位づゝ袱く樣になります。而して第百四十七圖の樣に、イからイに横に筋を一本(1)入れ、その筋から三分はなれた卽ちロの切り込みに寄つた所にも筋を一本(2)入れます。而して一方のイの切り込みから今一方のイの切り込み迄表から口の周圍に一分の深さにして飾りミシンをかけ、その糸を續けて(1)の筋にかけ、そのミシンの糸(1)(2)の間で少し弛ませて(2)の筋にもかけます。

（八）次ぎに前に口の心紙に四分の隔りて筋を入れました其の筋を中表と外表とに交叉させながら折つて襞の形に致し、叩いてよく折り癖をつけて置きます。これて袋の形は略々出來上りましたから、次ぎに自由オペラの口金を第百四十八圖の樣に甲乙の二つに抜き分け、甲の方を(1)(2)のミシンの間の三分の場所に、一方の横から表用布と裏用布との間に通し、もう一方の横から乙の方を入れて、乙の棒を甲の穴の中に差し込みます。この時若し甲の穴が大きくて乙の棒が抜け出しさうでございましたらば、乙の棒の末端に紙を卷いて差し込みます。かうして二本の棒を袋の前後の口に通します。而して棒の

口金分解の圖

甲

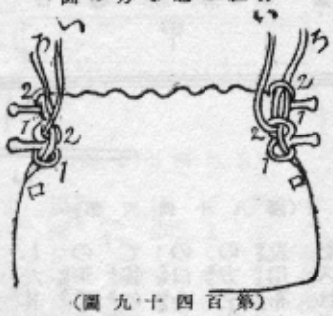


乙

（第百四十八圖）

兩横の穴に紐を通しますと、新オペラバッグは全く出來上りますから、半紙を四五枚丸めて心袋の代りに袋の中に入れ、底の兩横から袋全體にふくめる樣にして形を整へて置きます。

四、紐の通し方



（第四百四十九圖）

（一）自由オペラの口金には一本の棒の兩横に穴が二つ宛ついて居るので、袋の口の前側と後側とにこの棒が通してあるから、穴が都合四つある譯でございます。で私は説明する時の便宜上第百四十九圖の樣に、右横の前側の(1)の穴(2)の穴、後側の(1)の穴、(2)の穴、左横の前側の(1)の穴、(2)の穴、後側の(1)の穴(2)の穴と致して置きます。

（二）用意してある打ち紐の丈の中央に目標をつけ、一方の端を左横のロの裁ち込みの縫ひ目の間に差し込んで、抜け出ない樣にしつかりと止めて置き、もう一方の端を口金の左横の後の(1)の穴に内側から通して外側に抜き出し、次ぎに後の(2)の穴に外側から内側に通し、直ちに前の(2)の穴に内側から通して外側に抜き出します。（圖中のイ。）

（三）次ぎにその紐の端を右横の前の(2)の穴に外側から通して内側に抜き出し、次ぎに後の(2)の穴に内側から通して外側に抜き出し、更に後の(1)の穴に外側から通して内側に抜き出します。そして紐の丈の中央を右のロの所に當てゝ假に綴ぢて置きます。すると紐の丈の半分が殘つて居ますから、この先端を右の前の(1)の穴に内側から通して外側に出し、前の(2)の穴に外側から通して内側に出し、而して後の(2)の穴に内側から通して外側に抜き出して置きます。（圖中ろ）これで右横はすつかり通し終りましたから、次ぎに左横の後の(2)の穴に外側から通して内側に抜き、前の(2)の穴に内側から通して外側に抜き、而して前の(1)の穴に外側から通して内側に抜き出し、その紐の端を左横のロの裁ち込みの中

に押し込んで抜け出ない樣に止めて置きます。

（四）次ぎに左横の口の裁ち込みから口金の棒の下まで後と前と別々に目立たぬ樣に打ち紐を袋の緣に絎けつけて置きます、而して右横も打紐の丈の中央の目標を口の裁ち込みに當て、口の裁ち込みから口金の棒の下まで左横と同樣に絎けつけて置きます。

以上ですつかり紐は通し終つたのでございます。

二、摘細工

僅かな用布を一本のピンセットの尖端でひねつて、巧みに種々なものを工夫し製作するものは摘細工でございませう。一つ〳〵摘んだものが美しい花になつたり、跳ね上りさうな金魚になつたり、實に趣味深いものでございます。而して之れは複雜な仕方を綿密にする良習を養ふものでございます。

一、器具と材料

摘み細工に要する器具と材料とを列擧致しますと、凡そ左の通りでございます。

器具

一、尺度　曲尺五厘目つきのなるべく薄いものを用ゐます。

二、鋏　日本鋏と西洋鋏とを各々一丁づゝ用ゐます。而してその大さは、西洋鋏は大きいものを、日本鋏は凡そ三寸位の小さいものを使利と致します。

三、古雜誌　紙の厚目な古雜誌を一冊用意致して置きます。元來摘みにする用布は、製作順に裁ち、それを一々區別して紙に包むのが本式でございますがそれは包んだり開いたり、餘計な手數が係りますから、紙に包む代りに裁つた順に古雜誌の間に挾んで置きます。

四、ピンセット　ピンセットは鐵製の幅の廣い、しつかりとしたもので、その尖端の内側が細く平で、尖端のよく喰ひ合ふ腰の強いものを用ゐます。造花用のピンセットは腰が弱くては不適當でございます。

五、水瓶　大きい硝子製のもので、水飴の空き瓶で差支ありません。これは糊の溶し水を入れて置きます。又糊筥の不用の時は何時もこの瓶の中に差込んで置くのでございます。

六、筆　使ひ古しの筆でよろしうございますから、よく洗つて汚れを去り、清らかなものを一本用意して置きます。これはこの筆の穗先きに水を含ませて糊の上にポト〳〵と落し、筥で練りながら薄めますと無暗に薄くなることがなくて都合がよろしうございます。

七、糊板　幅三寸五分、丈七寸、厚さ八分位に、朴の木で作つたものを用ゐます。朴の木は水氣を吸ひ込むことや、肉剝の憂ひが少ないからでございます。糊板を使用致します時は、先づ筆にて板の面を濕らし、而して使用致しますと板に水氣があるので糊延びもよく、且つ矢鱈に板につきません。

八、糊筥　袋物に使用するものよりも幅の廣い、丈夫なものを用ゐます。これは糊を練つたり廣げたりするに使ひます。

九、ゴリ板　一名コロ板ともいひ、幅一寸四分、長さ四寸四分、高さ一寸位の所が使ひよい樣です。これは朴の木で造りまして持ち易いために、手に持つ方の面の兩横の尖つた所を落して置きます。用途は針金を眞直ぐに伸す時や、幹を作る時に釜糸または紙を卷くに用ゐます。

一〇、**椿鑢**　造花用の擦鑢で大小二種用ゐます。

材料

一、**用布及び染色**　摘み用の絹及び縮緬を用ゐ、製作するものによつて、即ち必要に應じて種々な色に染めて使用致します。その染料は造花用の繪の具を用ゐ、普通の製作には左の色數があれば大抵間に合ひます。

▲マングンダー　▲セルリン　▲ローダミン　▲グリーン　▲オーラミン

而して用布には、白茶、肉色、赤、黄、白、オリーブ、金翅雀色などのものでございます。

二、**姫糊**　細工物用の色の白い姫糊の粉を暫らく水に浸して置き、その水を取り代へて、粉の分量よりも水の方が割合に少な加減にして、弱火にかけて攪拌しながら煮、色が變つた頃を見計らつて火から下します。

三、**針金**　鐵針金の二十八番及び三十番を用ゐます。二十八番は動物の足の様に丈夫を要するものに用ゐ、三十番は植物の幹に使用致します。（銅ならばこの上なし）

四、**半紙**　三分又は四分幅に裁ち、幹など作る時に針金に巻きます。

五、**青紙**　オリーブの釜糸を巻く時、下に半紙だけ巻いて置きますと、釜糸の下から白が透く憂ひがありますから、上側だけは青紙を一度巻いて、釜糸を巻きます。

六、**釜糸**　植物の幹や動物の足などを作る時、適切な色合の釜糸を巻くのでございます。

七、**打紐**　摘み細工に直接必要ではございませんが、その附屬として用ゐます。

八、**厚紙**　薄い板目紙と、厚い板目紙とを附屬として用ゐます。（張子紙も時によつて用ゐます）

九、**鐙足**　鐙足には種々ございますが、日本風の鐙足は二寸一分から四

寸五分位までのものを、製作する物によつて選んで使用致します。

二、摘み方の區別

摘み方には種々ありますが、而して用布をそれ〳〵の形に摘むには、必ずピンセットを用ゐねばなりません。

ピンセットの持ち方

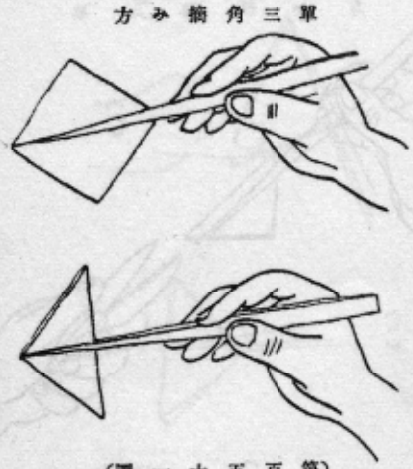


（第百五十圖）

一、ピンセットの持ち方　第百五十圖の如く手前の一本の足に拇指を、向ふの一本の足に食指と中指とをかけます。

一、單三角摘み　單三角摘は正方形の用布をピンセットの尖端で取り上げて左の拇指と食指とに持せ、ピンセットにて第百五十一圖イの如くに挟んで手前の方の切端を拇指にて向ふに折つて三角形を造ります。（次ぎに第百五十一圖ロの如くに輪の中心からピンセットを入て切の中心を挟み、挟んだまゝピンセットの尖端を手前の方に折つて角と角とを揃へて再び正しく三角形を作り、その三角形の折目の二枚重つた所を左手の拇指と食指とで抑へます。そのピンセットて切目の方即ち平な方を挟みましてそのまゝ左手に持ちかへますと、第百五十一圖の（ハ）の如く不揃ひな方が上向きになりますからその不揃ひな所だけ切り去ります。（この時は小さい日本鉄を使用した方が便利です）而して再び元の如く右手に持ち直し、糊を平に延ばした板の上に第百五十一圖の（ニ）の如く切目の直線の方をつけますと三角摘みが一つ出來たのでございます。

單三角摘み方

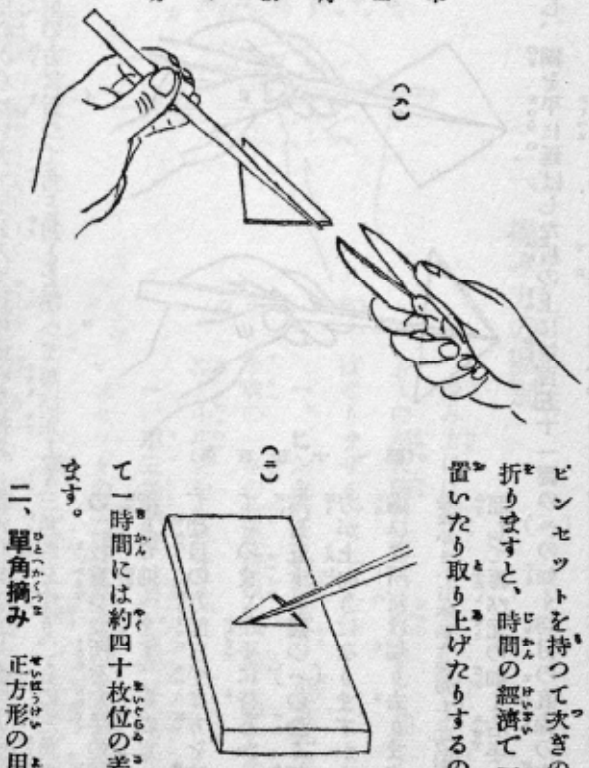


（第百五十一圖）

今使用した鋏は、使ひ終つた後小指と無名指とで挟んだまゝ下に置かないで、

ピンセットを持つて次ぎの用布を折りますと、時間の經濟で一々鋏を置いたり取り上げたりするのに比べて一時間には約四十枚位の差があります。

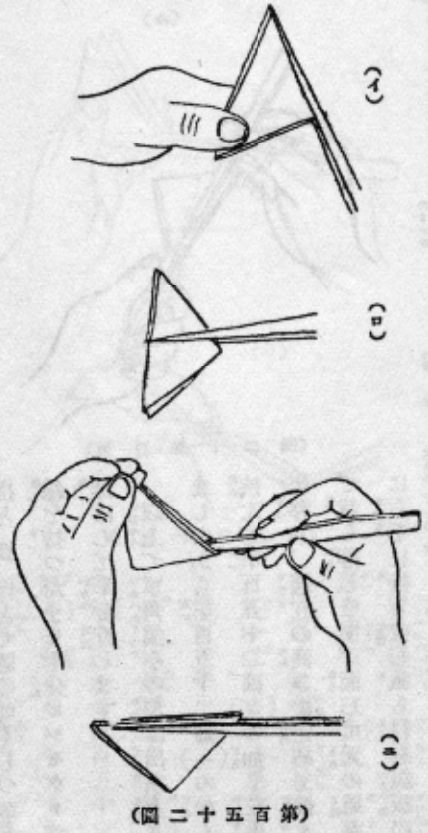
單三角摘み方



（第百五十一圖）

二、**單角摘み**　正方形の用布を單三角摘みの樣にして正しく三角形に一度折り、更に第百五十二圖（イ）の如く前と同樣の方法で三角に折り、上に折り重ねた方を左の方へ五厘だけずらせます。次ぎにピンセットの一方の足の深さだけ（凡そ五厘）三角の山よりも向ふによつ

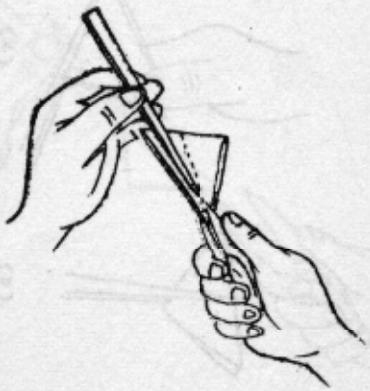
單角摘み方の圖



（第百五十二圖）

た所から左の中央にピンセットを入れ、（第百五十二圖(ロ)の如く）左の拇指で押す心持ちで第百五十二圖(ハ)の如く食指とて三度三角を折ります。この時左手の拇指と食指とて圖の如くしつかり端を持つたまゝ十分ピンセットで延ばして形を直します。

單角摘み方の圖
(ホ)

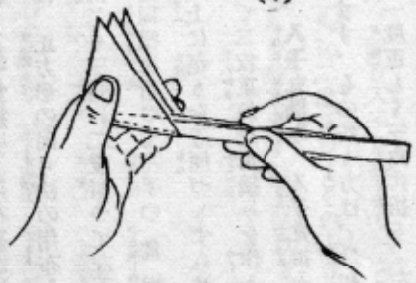


（第百五十二圖）

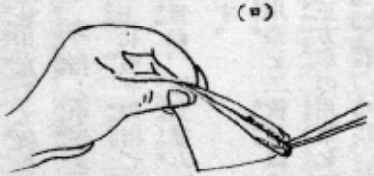
以上で單角摘みの形は出來上りましたから第百五十二圖(ニ)の如く挟んで第百五十二圖(ホ)の如く左手に移し、適宜の高さに定めて挟んで裁ち落します。而して元の通りに右手に持ち直し裁ち目を糊板のつけます。この糊板につける時、先づ用布の尖端を輕く糊板につけて一應ピンセットを放し、更に平に置きますと、ピンセットに糊のつく事はございません。

三、單丸摘み　單丸摘みは略々單角摘みと同樣の仕方で致します。即ち、先づ單角摘みと同樣に正方形の用布を三角に一度折り、更らに今一度正しく三角に折ります。（第百五十一圖(ロ)と同樣）

單丸摘み方
(イ)



(ロ)



（第百五十三圖）

次きに第百五十二圖(ロ)の如く挟んで第百五十三圖(イ)の如くピンセットを中心にして下方の二枚の輪を兩方にふりわけて圖の樣に致します。かう致しますと上端に輪て出來た三角が三つございます。次に第百五十三圖(ロ)の如く左手にて左の端をしつかり持

ち、眞中に出來て居る折り目の先きを五厘程凸ませて丸味をつけ、前の樣によく延ばして糊板につけます。

四、入子角摘み　用布を二枚重ねて角摘みにしたものでございます。その仕方は、正方形の同寸法の用布を二枚用意して置き、先づ一枚の切を、單角摘みと同じく三角に二度折つて左手の食指と中指との間に挾んで置き、更に今一枚を同樣に折つて左手の食指の上に載せ拇指で抑へ、始め折つた摘を後に折つた上に廻りを五厘づゝずらせて重ね、單角摘みと同樣に眞中をピンセットで挾んで二枚重ねた角摘みを作ります。

五、入子丸摘み　入子丸摘みは用布を二枚重ねて、丸摘みに致したものでございます。その折り方は、最初に正方形の用布を二枚用意して置き、その一枚を一度正しく三角に折り、左の食指と中指との間に挾んで置き、殘りの一枚も同樣に折つて食指の上に載せ、始めに折つた三角をその上に重ねます。重ねる時入子角摘みと反對に、上の分を周圍を五厘づゝ出して、單丸摘みと同樣に二重の丸摘みを作り高さを定めて裁つて糊板につけます。

六、三重角摘み　これは三枚重ねの角摘みのことで入子角摘みに一枚加へたもの、卽ち入子角摘みて三角を二枚重ねてそれを食指と中指とに挾ませ、更に三角を二度折つてその上に前の二重の三角を矢張り廻りを五厘控へて重ね、角摘みを致しますと上端の輪の所は綺麗に揃つて居ますから、よく延ばして高さを定めて裁ち落し板の上につけるのでございます。

七、三重丸摘み　三重丸摘みも正三角形の用布を三枚用意して置きます。これは三枚用布を重ねて丸摘みに致したものでございまして、その折り方は、入子丸摘みの樣に三角に一度折つた用布を二枚重ねて左の食指と中指との間に挾んで置き、殘りの一枚を更に同樣に折つてその上に段々と五厘づゝ外に出して前に食指と中指との間に挾んで置きましたものを重ね、三枚重ねたまゝて丸摘みに摘み、適宜の高さに切つて糊板の上につけます。

八、單角返し摘み　單角返し摘みは普通の角摘みと同樣に摘んで糊板につけ

て置き、ピンセットで挟んで糊から取り上げて左の指先きで糊のついた所を輕く扱いて糊むらをとり、ブリキ板の上に載せて乾かします。而して裁ち目の糊のついた所に淺くピンセットで折り目をつけ、最初に折つた三角の折り目にピンセットを入れて表に返し、裏より椿鍬をかけて置きます。



（第百五十四圖）

單丸返し摘み

九、單丸返し摘み　單丸返し摘みも普通の丸摘み同樣にして摘んで糊板につけて置き、後糊から取り上げて單角返し摘みと同じく糊のついた所を輕く扱いて糊むらを去り、摘を裏返して中心の折目の所にピンセットを差し込みまして兩方に開きますと第百五十四圖の如くなつて兩方に開いた切目は各四枚が糊でぴつたりつき合つて居ます。糊が乾きましたら今兩方に開いた切目即ち糊板につけてあつた所をピンセットで挟んで改めて兩方から中心に向つて折りをつけ表に返して、裁ち目の方即ち裏面に椿鍬をかけて置きます。

十、綿入角摘み　これは主として蓄などを作る時に用ゐます。折り方は造花の時と同じく、用布の中央に綿を少々入れて普通の角摘みに摘み、最後の時、左の拇指と食指とで折り曲げながら形を良くして用布の端を針金で結んで置きます。

十一、綿入丸摘み　綿入丸摘みは綿入角摘みと同樣に用布の中央に綿を少々入れ、普通の丸摘みに摘んで用布の端を切り、糊板につけます。この丸摘みの端を裁つ時には中から綿が飛び出さない樣に注意せねばなりません。

十二、目玉の製作法　目玉を作るにはチャン（一名杉脂）一錢と油煙（又は鍋炭）を少々と晒蠟少しとを混ぜて小さい茶碗に入れ、火にかけますとよく溶けますから楊子の尖端で攪拌し、全部柔かに溶けた所を見計らつて火からおろし、手早く楊子の尖端にて皿につけますと、目玉が出來ます。而して目玉の太いのが要る時には楊子の尖端を太くし、小さい目玉の欲しい時には楊子の尖端を小

さく致して置きます。また目玉を作つて居る間に茶碗の中のものが固りましたならば再び火にかけて柔かくして作ります。

十三、糊の延べ方　先づ糊板に筆て平に水をつけ、糊筥で糊を取つてぶつぶつのない樣に適宜の濃さに練ります。その濃さは摘みの大小、用布の地質によつて各々異りますが、總じて用布が縮緬の時は糊を薄く、絹の時は濃く、摘みの大きい時は糊を厚く、小さい時には薄く致します。而して延すには初め糊を同じ所に纏めて糊筥の右の端を少し上げる樣にしながら、左の方から右の方に糊を引きます。一度で平に延びなかつた場合には糊筥の左の端を少し上げながら、右の方から左の方に糊を引いて平に致します。

三、實習

一、蝶の簪

蝶の簪は、簪の先に可愛らしい蝶を一匹とまらせた、稚子髷や島田に似合はしい趣きのある華やかなものでございます。

材料

白絹並幅二寸。赤絹並巾一寸。鼠色絹半巾一寸五分。白打紐一尺。長さ三寸の簪の足一本。二十八番の針金一尺五寸。鼠色の釜糸少々。厚い板目紙の一寸五分角一枚。

製作の順序

寸法書　色合隨意

一寸四分	二枚	
一寸一分	二枚	赤絹共入子丸摘み
七分	二枚	
六分	二枚	
八分	二枚	白絹共入子丸摘み
六分	二枚	

（第百五十五圖）



同

作り方

（一）先づ板目紙の兩面に鶯色絹を張つて自然に乾かし、第百五十五圖と同樣な蝶型を今貼つた厚紙にて取ります。

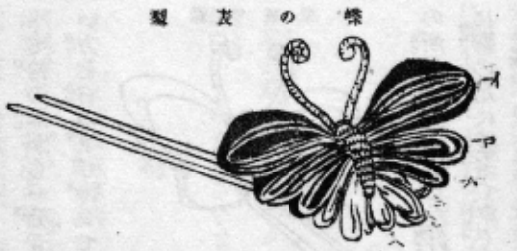
（二）次ぎに長さ一寸位の針金をゴリ板て眞直ぐに伸し、鶯の釜糸を卷き第百五十六圖の如く針金の端を三分許り鉤の手に曲げ、その鉤の手に糊をつけて、蝶形の中心丸印の所に差し込み鉤の手の上に三分位の半紙を動かぬ樣に貼ります。



（第百五十六圖）

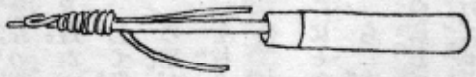
（三）次ぎに寸法書の通りに各々の用布を裁ち切りて古雜誌の間に挾み、而してその順に摘んで糊板につけて置きます。

（四）次ぎに針金の鉤の手の上に紙を貼つた蝶形の面に、寸法書の順序に、第百五十七圖の樣に一寸四分二枚をイの如く、一寸一分二枚をロの如く、七分二枚をハの如くつけ、面して六分、八分、六分をその順序で兩方同じ樣につけます。



（第百五十七圖）

蝶の翅の卷き方

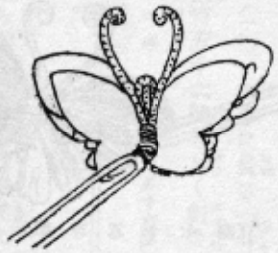


（第百五十八圖）

以上て羽の摘みは全部つきましたからこれを自然に乾かし、その上に白の細い打紐て虫を作つてつけるのてございます。

（五）虫の作り方は、二十八番の針金を一尺二寸位の長さに切つてゴリ板てよく伸し、長さ一尺の白の打紐を左の手に持つて眞直ぐに下に垂れ、針金を右の手に持つて上の方から打ち紐の中に廻しながら差し込みます。全部通し終りましたらば針金を兩端に等しく拔き出して置きます。

（六）次きに打紐の一方の端より二寸五分這入つた所から二つに折り、第百五十八圖の樣に折り曲げた輪の端を目打錐の尖端より三分位這入つた所とを揃へて輪の端から一分五厘の所を左の拇指と食指とで堅く摘み、打紐の丈の長い方を右の手で持つて目打錐と短かい方の端とを中に入れて巻きつけます。而して巻いた長さが約五分位になり、長い方の丈の端が一寸七分位になつた頃を見計つて目打錐を抜き取り、巻き終つた所から三分位離れた所を二本添へて巻いた方へ卽ち逆に折り返し、更にその三分の所を第百五十九圖の樣に巻き際から二本共鈎の手に折り返し、その二本の鈎の手の所を蝶型に通した針金と一つにして釜糸でしつかり巻いて動かぬ樣にし、更に簪の足に釜糸で堅く巻きつけて止めて置きます。かう致しますと蝶形の摘みの間に、打ち紐で出來た虫の胴がつきますから、その形を調へ、且つ打ち紐の



蝶の裏型

（第百五十九圖）

先きに出て居る針金を打ち紐と平に切つて、その端を蝶の觸角の樣に少し兩方に開かせて、目打錐の尖端でその端を巻いて置きます。

これで第百五十七圖の樣に全部出來上つたことになります。

二、葉書差し

葉書差しの面に、クリーム色の薔薇の花を一輪匂はせ、小さい蝶を飛ばせた面白いものでございます。

材料

クリーム色絹並幅一寸。オリーブ色縮緬半幅一寸。白縮緬一寸角一枚。造花用蕚一つ。薔薇の香少々。葉書差し代紙一枚。オリーブ色の釜糸。三十番の針金七寸。青紙少々。雞の羽根少々。綿少々。

製作の順序

寸法書

薔薇の花		色合隨意
	七分	六枚
	六分	六枚
	五分	六枚
	四分	六枚
葉	六分	二枚
	五分	七枚
	四分	十三枚
蕾	五分	一枚
	五分	一枚
蝶	五分	二枚
	三分	二枚
二分五厘		一枚（胴）

クリーム絹單三角摘み

オリーブ縮緬單丸摘み

オリーブ縮緬單丸摘み

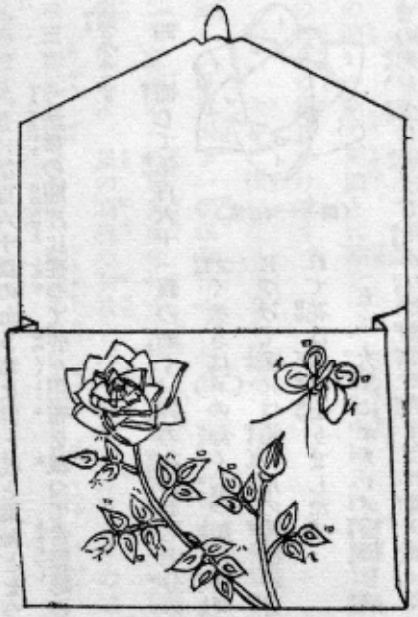
綿入角摘み

白縮緬單丸摘み

作り方

（一）長さ三寸五分の三十番針金を一寸と二寸五分との二本に裁ち切り、二本共ゴリ板で眞直ぐに伸し、一方の端が細くなる樣に七分の背を紙を長い方に、次に今巻いた上五分を短い方に各先きを少し斜に裁つてゴリ板でよく巻ます。

（第百六十圖）



にオリーブの釜糸を巻き尚別に針金に直接釜糸を巻いて葉軸と致します。

（二）次ぎに第百六十圖の如き形に幹と枝と葉軸とをつけます。

（三）寸法書の順序に從つて各々用布を裁つて古雜誌の間に挟んで置き、順に摘みます。

（四）而して第百六十一圖の如く、外の花瓣即ち七分の三角摘み六枚をイの如く次ぎはロの如く前の瓣と交叉させ中心に集まる樣につけて蕊には造花用の薔薇の香を少し入れます。それて花は出來上りました。



（第百六十一圖）

（五）次ぎにオリーブ縮緬を摘み、板につけてあるまゝの形を少し廣げて丸い方を葉軸に第百六十圖の如く六分二枚をイの樣につけ、五分七枚をロの樣に四分十三枚をハの樣につけますと、葉はすつかり出來上ります。

（六）次ぎに滑を綿入子の角摘みに摘み、根本を針金で括つて括つた下側から殘りの用布と針金とを切り捨て切り口を小枝の先きに貼りつけて蕾の形に作り、夢のオリーブ縮緬の單丸摘みの端を三つに放し、放した方が蕾の頭に行く樣にして蕾の上に貼りつけます。而して用意してあつた夢を火にて温ため、少し軟くなつた所で一方の面を三分の一だけ切り去り、その切り去つた所と上の開いた所の周圍とに糊をつけ、蕾を中に入れて第百六十圖の樣に、一寸許りの針金の端につけます。

（七）次ぎに蝶になる用布を摘み、第百六十圖の蝶の樣に、五分二枚をイの如くつけて大きい羽根を作り、三分二枚をロの如くつけて小さい羽根を拵へ、二分五厘の一枚を丸味の方が大きい羽根の方へ行つて頭の形に見える樣に胴の替りにつけ、鳥の羽根の羽枝を二本取つて分け、その二本を一寸位の長さに切つて根元に糊をつけ、觸覺の樣に末端を少し開き加減にして虫の頭の下に差し込みます。

以上で葉書差しは全部出來上つたことになります。

三、團扇

白絹地の團扇の表に、蘆に螢を二匹飛ばした見るからに涼しさうな、團扇でございます。

材料

鶸色絹並幅五寸。黒絹一寸角一枚。赤絹一寸角一枚。青紙。綿少々。團扇を一本。三十番の針金少々。

製作の順序

寸法書

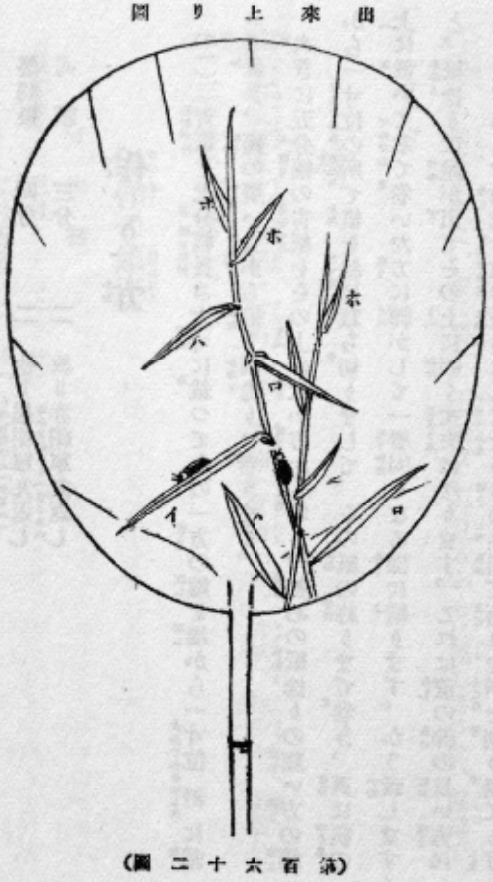
蘆の葉	三寸	一枚
同	二寸五分	二枚
同	二寸	二枚＝鶸色絹單角摘み
同	一寸五分	二枚
同	一寸二分	三枚
螢羽根	四分	二枚＝黒絹單丸返し
同頭	三分	二枚＝赤絹單丸返し

作り方

（一）青紙を七分幅長さ六寸に裁つてその一方の端を端から一寸位斜に裁つて置き、幅の廣い方から固く紙捻りに巻きます。

次ぎに五分幅の青紙をその上に太い方から巻き、初めの紙捻りの細い方の端から一寸位の所で紙を斜に裁ち切りまして、その紙の終りまで巻き、更に机の上に置いて掌で巻いた方に轉がして一層固くなる樣に縒ります。かう致しますと、紙捻りに艶が出てその上に固く丈夫になります。これは蘆の幹の長い方になりますから、約六寸位の長さにして太い方の手垢で汚れた所を切り捨てゝ了ひます。

（二）それと同樣の方法で八分幅の青紙一枚で長さ四寸位の紙捻を一本作つて置き、第百六十二圖の樣に少し曲げて團扇の表に糊で貼りつけます。



（第百六十二圖）

（三）次ぎに各々の用布を寸法書の順に切つて古雜誌の間に挾んで置き、黑絹と赤絹との丸返しを作ります。

（四）次ぎに蘆の葉を鶸色絹で摘み、極めて腰を低く裁ちます。而して摘みの太い方を幹につけて、三寸をイ）の如く、二寸五分をロ）の如く（二寸を八）の如く一寸五分をニ）の如く一寸二分をホ）の如くつけますと葉は全部出來上つたことになります。

（五）次ぎに赤絹と黑絹とで摘んであつた丸返しに極小の丸鍍を當てゝ置きます。

（六）次ぎに三十番の針金に三分の半紙を卷いて長さ一寸位に二本切り、その針金の一方の端に一寸糊をつけて捻りながら綿をつけ、米粒位な小さき綿坊主を拵へ薄糊をつけて、捻りながら形を調へ、滑かに致します。今の綿坊主を墨で黑く染め、火にかけて乾かします。

（七）次ぎに綿坊主の所だけ切り落し、その一方の面に糊をつけて圖の如く

盤をつけます。羽のつけ方は赤絹の丸返し摘みの丸い方を頭に、黒丸返し摘みは尖つた方を眞直ぐになる樣に極少し裁ち落して、丸い方を尾の端の方に各々摘みの裏の方に糊をつけ、赤絹が八厘位見える樣に黒の摘みを赤の上に重ねかけて羽根の形につけます。

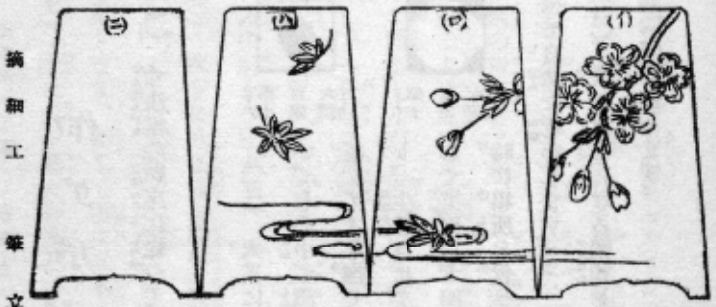
以上で大體形は出來ましたから、かすかに薄墨で盤の足と觸角とを書きます。

四、筆立

神代杉の筆立に華やかに咲き亂れた老櫻の一枝と、龍田の川に紅葉がひらひらと散る模樣を現はした趣味深いものでございます。

材料

肉色縮緬並幅二寸。鐵色絹並幅四分。赤絹半幅一寸六分。黃絹半幅一寸。白絹半幅二寸五分。青紙少々。造花用の鼠色紙少々。櫻の香四つ。三十番の針金



（第百六十三圖）

入寸。

製作の順序

寸法書

櫻の花	五分	二十枚	肉色縮緬單丸摘み
同蕾	四分	五枚	
同葉	四分	十四枚	鐵色絹ブローン中央暈し。單角摘み
同蕊	四分	五枚	鐵色絹ブローン四隅暈し、單丸摘み
紅葉	七分	六枚	赤絹セルリン中央暈し、單角返し
	五分	四枚	
	三分	四枚	
同	六分	二枚	黃絹グリーン中央暈し、單角返し
	五分	一枚	
	三分	一枚	

作り方

（一）寸法書の順序に従つて各々の用布を裁つて古雑誌の間に挟んで置きます。

（二）次ぎに葉になる鶸色絹を五六枚重ねてお皿にお湯を注いでその中で濕らし、紙の上に取り上げ、皺の寄らない樣に刷毛にてよく撫て、その上を半布或は半紙を以て押へて水氣を取り、生乾きになつた頃を見計らつてブローンの繪の具を筆に浸して第百六十四圖の樣に中央を暈し、次ぎにそれを裏返すと同時に場所を代へ　もう一度染めて手拭の如く洗つたもの、上に並べて自然に乾かします。

暈し圖　第十百四（六圖）

暈し圖　第十百五（六圖）

（三）次ぎに夢になる鶸絹を同樣の方法にして、第百六十五圖の樣にブローンで四隅を暈します。

（四）次ぎに赤絹をセルリンて、黃絹をグリーンて各々その中央を同樣の方法にして暈し、乾かして置きます。

（五）次ぎに三十番の針金を長さ二寸五分位に一本切り、ゴリ板でよく伸し四分幅の青紙を二枚、一方の端程細くなる樣に薔薇の幹と同樣の方法にして巻き、その上に更に三分幅の鼠色紙を一枚手際よく巻きつけ、机の上に横たへて掌で轉がしながら凸凹のない樣に固く捻ります。而して殘りの針金をゴリ板て伸し、一分幅の青紙を平に巻きつけ、机の上に轉がして掌で固く捻り、一寸位の長さに五本だけ切つて二寸五分の針金と共に、第百六十三圖の樣に筆立の（イ）の面に貼りつけます。

（六）次ぎに寸法書の順序に従つて櫻の花と蕾とを摘み、花瓣に五片づゝ抱き合ふ樣にして丸味を外側に向かせ、尖つた方を中央に集めて、位置よく花の形に貼ります。而して蕾は五本の葉柄の先きに一つづゝ格好よくつけます。

（七）次に葉と夢とを摘み、第百六十三圖の（イ）と（ロ）との面に、圖の如くつけ

るのでございます。蕚は丸い方を葉柄につけて裁ち目を三つに開き、尖つた先きが蕾の中央と兩横とにつく樣に貼りつけます。

（八）すつかり糊の乾いた所を見計らつて花瓣の丸味の中央に薄糊を少しつけ、その上を筋鏝を以て抑へ、花瓣の形に凹ませます。而して香の裏に糊をつけピンセットで挾んで花の中心につけますと櫻の花は全部出來上ります。

紅葉の葉の方けつの



（第百六十六圖）

（九）次ぎに紅葉の葉を寸法書の順序に角返しに摘み大の鏝を當て裏の方に糊をつけて大の葉を筆立の（ロ）の面と（ハ）の面とにつけます。そのつけ方は第百六十六圖の樣に赤絹の七分の葉六枚を二つに分けて三枚づゝを（イ）の樣につけ、その兩横に一文字にして五分の葉を二枚づゝ（ロ）の樣につけ、三分の葉を二枚づゝ（ハ）の樣につけます。而して美濃紙を最色に染めて二分幅に裁ち固く紙捻りに捻り、長さ一寸に二本切つて（ハ）の葉の間に葉柄としてつけます。

（十）次ぎに筆立の（ハ）の面に黃絹の六分の葉二枚と、五分一枚と三分一枚とを百六十六圖葉のつけ方の半面の如くつけます。而して葉柄は二分幅の青紙の紙捻を一寸許りつけます。

以上で紅葉はつきましたから、ゼラチンを少し溶かした水で胡粉を溶いて水をあしらひますとすつかり出來上りましたのでございます。

五、寫眞挾み

乙號寫眞挾みに、ダリヤとコスモスの滿開の花と蕾とをつけた、華やな美しいものでございます。

材料

赤絹並幅二寸六分。鶸色絹並幅二寸。オリーブ色絹並幅二寸五分。白絹並幅一寸。黃色の木綿糸少々。鶸色の釜糸少々。青紙少々。三十番の針金二尺。綿

少々。

製作の順序

寸法書

ダリアの花　一寸八分　八枚　赤絹セルリン四隅暈し、單丸返し
　　九分　八枚
同　蕾　九分　六枚＝赤絹單丸返し
同　萼　七分　六枚＝鶸絹プローン四隅暈し、單丸返し
同　葉　二寸五分　一枚
　　一寸五分　三枚　オリーブ色絹單丸返し
　　一寸　二枚
同　若葉　九分　二枚＝鶸色絹プローン四隅暈し、單丸返し
コスモスの花　八分　八枚＝白絹ローダミン中央暈し、單丸返し
同　蕾　五分　五枚＝白絹ローダミン中央暈し、單丸返し
同　萼　四分　四枚＝鶸色絹單丸摘み
同　葉　一寸　五枚
　　七分　十枚　鶸色絹單角摘み

作り方

（一）寸法書の順序に從つて各々の用布を裁つて古雜誌の間に挾んで置きます。

（二）次ぎに染める用布のみを取り出し、例の方法によつて（筆立參照）各々の用布を染め、手拭の上に並べて乾かして置きます。この時寸法の大きいものは皺が寄り勝ちなもの故、始め半紙を敷いた新聞の上に並べ、筆にお湯を含ませて濕らします。

（三）次ぎに用布の乾く間に幹を作ります。卽ち三十番の針金を七寸許り切つてゴリ板で眞直ぐに伸し、四分幅の半紙を二度、末の方を一寸許りの間斜に裁つて卷きつけ、更にその上にもう一枚六分幅の半紙を卷きつけ、端から一寸餘りの所で紙を裁つて置きます。而して机の上に轉がしてゴリ板で固く卷きつ

けます。

（四）次ぎにそれと同樣の方法にして五寸許りの針金に四分幅の半紙を二度巻き、その上に三分幅位の半紙を巻いて、ゴリ板をかけて置きます。この二本は後にダリアの幹になります。

（五）次ぎにコスモスの幹を作ります。三十番の針金を五寸と二寸五分との二本に切り、各々四分幅の半紙を巻き、ゴリ板で轉がしながら固くして置きます。而して各々一本づゝ鼠色の釜糸を巻きつけます。

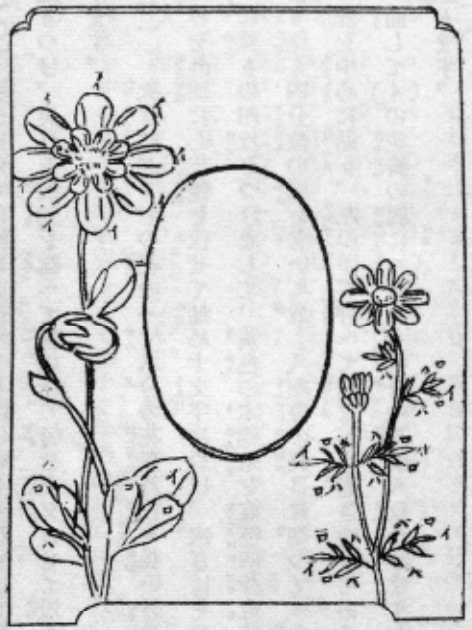
（六）次ぎにダリアの短かい方の幹の細い端に糊をつけ、盆の胴を作つた樣にして無穗樹の宵位の綿坊主を作り、薄糊をつけて滑かに丸めて乾かして置きます。

（七）次ぎに用布を寸法書の順序に摘み、ダリア及びコスモスの花瓣は三分の二の高さに、ダリアの蕾及葉は三分の一の高さに切つて糊板につけて置きます。（コスモスの葉は殊に低く）

（八）次ぎに各々の丸摘みを裏返しにして鍛をかけます。

（九）而してダリアの蕾の花瓣六枚を、綿坊主の上に、丸い方を頭の方に、尖つた方を根本の方にして始め三枚だけつけ、次ぎに殘りの三枚を同樣の方法でその合せ目の間につけます。その上に六枚の蕚の尖つた方を頭に、丸い方を莖につけて抱く樣につけ、坊主の根元から二分許り下の所

（第百六十七圖）



を少し曲げて蕾を下向きに致します。

（一〇）次ぎに六寸の幹を第百六十七圖の如く少し曲げて寫眞挾みの左の方に貼りつけ、夫れと根元を揃へて蕾の所で幹を交叉させて短かい方の幹を貼りつけます。

（一一）次ぎにダリアの花の一寸八分の花瓣八枚を長い針金の尖端にイの樣に丸みを外側にし花瓣を伏せて始め十文字につけ、次ぎにその十文字の花瓣の間々に殘りの四枚をつけまして、黃色の木綿糸を直徑四分位になる樣に一方の端より堅く四分位の紙を卷いて置き八厘位の高さに切つて一方の面に糊をつけ花の蕊を中心に貼り、左の手で押へて居ながら卷きつけてある紙を剝ぎ取ります。而してイの花瓣の間にロの如く九分の花瓣八枚つけますとダリアの花は出來上ります。

（一二）次ぎにダリアの二寸五分の葉一枚を第百六十七圖の葉のイの如く蕾の幹の根元から約一寸上つた右の所に丸味を葉末にして伏せてつけ、一寸五分の葉三枚をロの如く一寸の葉二枚をハの樣につけ、最後に若葉を花と蕾との下に二の樣につけて置きます。

以上でダリアは出來上りましたから、次ぎにコスモスを作ります。

（一三）コスモスの長き幹を第百六十七圖の樣に少し曲げて寫眞挾みの右の方に貼りつけ、根元から七分上つた所に二寸の枝をつけます。

（一四）次ぎに黃色の木綿糸を直徑二分位にしてダリアの蕊と同樣に紙を卷き、五厘の高さに切つて一方の面に糊をつけ、コスモスの花を作る所に貼つて紙を除いて置きます。

（一五）而してコスモスの花瓣の尖端に糊をつけ、ダリアの花瓣と同樣の方法にして蕊を中心に十文字に貼り、その十文字の間に更に四枚づゝつけて花を作ります。

（一六）次ぎにコスモスの蕾の花瓣五枚の尖つた端に糊をつけ、枝の尖端に重ねかける樣にして、丸みを上に、尖つた方を根元にして五枚つけます。

（一七）次ぎに腰を低く摘んだ葉と夢とをつけます。そのつけ方は、始め夢四枚を尖つた方を根元に、丸みの方を頭にしてコスモスの蕾の上に並べてつけ、次ぎに葉の一寸五枚を（イ）の様に、七分十枚を（ロ）の様に、五分十五枚を（ハ）の様につけますと寫眞挟みは全部出來上ります。

六、柱掛

滿開と半開との白菊に小さい蕾を一つあしらつた情趣豊かな柱掛でございます。

材料

白絹並幅二尺。白縮緬並幅一寸。オリーブ色縮緬並幅一尺二寸。オランダ少々。綿、青紙、オリーブ色釜糸少々づゝ。三十番の針金三尺。

製作の順序

寸法書

滿開の花　二寸一分　四枚
　一寸九分　十五枚
　一寸七分　十五枚
　一寸五分　十五枚　白絹單角摘み
　一寸二分　十五枚
　九分　十枚
　七分　八枚

半開の花　七分　三枚
　八分　六枚
　一寸　十二枚　白絹單角摘み
　一寸一分　一枚
　一寸三分　一枚

蕾　八分　五枚＝白縮緬單丸摘み

葉　一寸五分　七枚
一寸三分　十九枚
一寸一分　廿五枚
一寸　三枚
オリーブ縮緬單丸摘み

蕾　六分　九枚＝オリーブ縮緬單丸摘み

作り方

（一）二十八番の針金を一尺四寸、八寸、三寸、の三つに切つて各々ゴリ板をかけて眞直ぐに伸して置きます。

（二）次ぎに各々例の如く枝の末の一方が細くなる樣にして、丈一尺四寸の針金には一寸幅の半紙を一度巻きゴリ板て堅く巻いた上にまた八分幅のものを巻いてその上に八分幅の青紙を一枚巻きつけ、丈八寸の針金には一寸幅の半紙を一度巻き、その上に八分幅の青紙を一枚巻きます。次ぎに丈三寸の針金には一寸幅の半紙を一枚巻き、その上に三分幅の青紙を一枚巻いて置きます。

而して各々オリーブ色の釜糸をその上に巻きつけます。これは三本ともに菊の幹に致します。

（三）次ぎにその幹になる針金を附錄第九圖の樣に曲げて柱掛の板に貼りつけます。

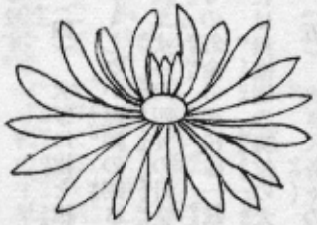
（四）次ぎに綿を細かく（約二分位の輪）刻み、水溶きをしない固い糊でじめ〳〵しない範圍の固さによく練つて置きます。而して夫れをピンセットの尖端にて丈一尺四寸の針金の端には二錢銅貨に少し肉を持たせた位の大さに、丈八寸の針金の端には一錢銅貨に少し肉を持たせた位の大さに、丈三寸の針金の端には無患樹の實位の大さに盛つて置きます。

（五）次ぎに各々の用布を寸法書の順序に從つて裁ち、古雜誌の間に挾んで置いて、その順に花と蕾とを摘みます。

（六）而して順序に從つて滿開の花から先きに花瓣をつけます。この花は平なものを手前の方から見た形に作るので自ら花の中心が上の端になり、手前の

方に花瓣が多くつきます。卽ち二寸一分の花瓣四枚を第百六十八圖に參照して兩横に格好よくつけ、次きに一寸九分の花瓣十五枚を綿盛りの周圍に配等してつけます。その順で次の花瓣は前の花瓣の間々に少し控目につけます。最後に最も小さい花瓣が中心の周圍に集まる樣に致します。

花のつけ方



（第百六十八圖）

（七）全部花瓣をつけ終つた後更に花の格好を整へ、オランダを直徑四分位の大さに卷いて裏側に固い糊をつけ、花の心の樣にしつかりと貼ります。

（八）次きに半開の花を作ります。一錢銅貨位の綿盛りの上の端に、先づ蕊をオランダにて直徑三分の大さに卷いて貼りつけます。而してそのオランダの花の心を抱き圍む樣な形に、寸法書の順序に從つて小さい花瓣から先きにつけます。

（九）次きに蕾を作ります。先づ三寸の幹の竹の無櫛櫛大の綿盛りの中央に白縮緬の丸摘みを尖つた所から丸みの端まで糊をつけて綿盛りの上に丸い方を上にしてつけます。

（一〇）次きに葉を寸法書の順に摘んで二分の一の高さにして糊板につけて置きます。而して附錄第九圖を參照して先づ葉の位置を見定めてから一寸五分の葉七枚をイの樣に、一寸三分の葉十九枚をロの樣に、一寸一分の葉二十五枚をハの樣に、一寸の葉三枚をニの樣に順次につけますと葉は全く出來上ります。

（一一）次きに蕚を摘んで半開の花に五枚、蕾に四枚、コスモスの蕾の蕚の樣にしてつけると、柱掛は全部出來上つたことになります。

注意　この菊の花はあまりピン〳〵と勢よく花瓣が跳ねてゐては出來榮えが面白くありませんから、花瓣の用布を裁つ前に幾度も捻へながら斜に引つ張つて糊を落し、而して寸法通りに裁つて摘みますと、花の形を自由に變化させる事が出來て興味があります。

六、額

大小の金魚が青い水草の中を游いて居る、涼しい趣きを表したものでございます。

材料

白絹一尺五寸。肉色絹一尺。赤縮緬五寸。簿肉色縮緬三寸。オリーブ絹一尺。白と青との釜糸少し。綿少々。三十番の針金。

製作の順序

寸法

大金魚　尾（イ）三寸二分　一枚
（ロ）三寸一分　一枚
（ハ）二寸九分　二枚

（ニ）二寸五分　二枚
（ホ）一寸八分　三枚
（ヘ）一寸六分　三枚
（ト）一寸五分　二枚
（チ）一寸三分　三枚
（リ）一寸　一枚
（ヌ）八分　二枚

白絹赤四隅霞し、罫角摘み
赤は、オーラミンとローダミンとを合せて脊鰭の赤と等しくすること。

鰓　八分　二枚＝肉赤縮緬入子丸摘み（肉入外）
脊鰭　二分　四十枚
二分五厘　三十枚
三分　五十枚　赤縮緬罫丸摘み
二分五厘　二十枚
二分　三十枚

腹　二分　二十枚
二分五厘　三十枚　肉縮緬罫丸摘み
二分　二十枚

口　四分　二枚＝赤肉縮緬入子丸摘み

摘（肉外）

脊鰭　イ　四分　二枚
ロ　五分　二枚
ハ　六分　一枚
ニ　八分　一枚
ホ　一寸　一枚
ヘ　一寸二分　一枚
白絹赤中央畧し、單角摘み

横鰭　イ　九分　二枚
ロ　八分　三枚
ハ　七分　一枚
ニ　六分　二枚
ホ　五分　三枚
ヘ　四分　一枚
ト　三分　一枚
白絹赤四隅畧し、單角摘み

小金魚尾　イ　二寸六分　二枚
ロ　二寸五分　三枚
ハ　二寸　二枚
肉色絹單角摘み

ニ　一寸七分　二枚
ホ　一寸五分　二枚
ヘ　一寸　一枚
ト　九分　一枚
チ　八分　一枚
リ　七分　一枚
ヌ　六分　一枚
肉色絹單角摘み

鰓　六分　二枚
肉縮緬共入子丸摘み

鱗　二分　三十枚
二分五厘　三十枚
三分　三十枚
二分　五十枚
肉縮緬單丸摘み

腹　二分　二十枚
二分五厘　二十枚
白縮緬單丸摘み

二分　二十枚
四分　二枚
肉縮緬共入子丸摘み

脊鰭　イ　四分　三枚

ロ　五分　二枚
ハ　六分　一枚
ニ　七分　一枚
ホ　七分五厘　一枚

横鰭
イ　七分　二枚
ロ　六分　三枚
ハ　五分　三枚
ニ　四分　三枚
ホ　三分　二枚

水草
七分　百五十枚
二寸五分　三枚　オリーブ絹、單角摘み
三寸　三枚

作り方

（一）先づ附錄第十圖第十一圖の金魚の外側の點線通りに二尾の型を張子紙にて作ります。（薄い板目紙にても良し）

（二）木綿綿を細かく鋏で切り水溶きをせぬ糊にてよく練り、前に作つた金魚の形の上に綿盛りを致します。その綿盛りの仕方は、口の邊より脊の方へ順次に高く、腹より尾の邊りに到つて低くし、尙尾の部分に五分許り入つた所まで盛ります。その形は總じて實物の金魚に倣つて作り、ピンセットにて强く抑へて盛りますと乾いて後形が變りません。萬一形の變つた時は一應鑢鎚で凸凹を直し、その上に改めて綿盛りを加へて形を整へます。而してよく乾かした後更に鑢鎚にて打つて完全なる形と致します。

（三）神代杉の額板を苅萱のタワシにて木目通りによく擦つて磨き、板の面を綺麗に艶出しをして、附錄第十二出來上り圖の如く魚の綿盛りを配置よく並べて一番短い釘を胴の彼方此方に動かぬ樣に打ちつけます。

（四）次きに尾となる肉色絹と白絹とを幾度となく斜に引つ張つて糊を落し、再び布目を元通りに直した後、すべての用布を寸法通り裁つて順序よく雜誌の間に挾んで置きます。

（五）大の金魚の尾及び脊鰭横鰭白絹赤暈しの部の用布を、お湯にて濡らし紙の上に置きます。（最も用布の大きい時は皺が出來る憂がありますから始め紙上に置いてお湯を含ませた筆又は刷毛にて用布を濡します）而してハンカチーフ類の布にて水氣を去り生乾きの所へ、オーラミンとローダミンとを溶いて脊鰭の赤縮緬と略々同じ色になつた頃に四隅を染めます。

（六）斯くして準備が終つて、暈した用布も乾いたならば、大の金魚の尾、即ち寸法書の順に摘んで十分延し、腰の高さを稍々低く切つて糊板の上に並べて置きます。

（七）その金魚の尾を附錄第十圖と寸法書のイロハ號とに合せて、先づ三寸二分のイを中央に、摘みの先きを少し胴に重ねかけてつけ（ロの三寸一分をその右に、（ハの二寸九分二枚の内一枚をロの隣に、（ニの二寸五分をその右に一枚、（ホの一寸八分三枚の内一枚を前のニの右に、（への一寸六分三枚の内二枚をその右に、而して前に殘して置いた（ホニハを順に右へ〳〵とつけて右の方の尾は終ります。

（八）次きに鰓の入子丸摘みを少し廣げて、三日月形に圖解の鰓の如くつけます。

（九）二分四十枚より始まつて二分三十枚に終る寸法書の脊鰭を赤縮緬で單丸摘みをなし、順に從つて胴の端より（尾の摘み先に少し重ねること）（附錄第十圖參照）つけます。つけ方は心持ち摘みを開き加減にして胴の點線の右の側へさも鱗の如くつけます。鰓の邊りより頭は小さいのが普通ですから、摘みのまゝの形でつけた方がよろしうございます。

（一〇）腹鰭の單丸摘みを、附錄第十圖胴の點線の左側へ脊鰭と同樣の方法でつけまして次きに口を摘みます。

（一一）肉赤入子丸摘み二枚を上唇と下唇とに致します。先づ一つの摘みの輪のを上にしてつけ、ピンセットを輪の中に差し入れて、兩端が放れない範圍で一文字に開き、中央をふくらませて兩端をそつと仰へると上唇となります。下唇はそれと同樣の方法にて輪を下にするだけの差てございます。

（一二）脊鰭横鰭は尾のつけ方と同じく寸法のイロハ號と圖のイロハ號と合せてつけます。脊鰭は、イイロロハニホヘの順につけ、横鰭は大をイイロロハニホの順に中をロロニホの如く、小をホヘトとつけまして大は出來上ります。

（一四）小の金魚は大と同一の方法て少しの違ひもありません。たゞ尾の（ヘトチリヌは向ふの尾の端が見えて居る所なので、これを最初につけます。而してイイロハニホホニハロロの順につけるのてございます。

（一五）以上の如くして二尾の摘みは全く濟みましたから、端書の白い所の紙を直徑一分五厘位の大さに切つて一方の面に糊をつけ目のつく所に貼つて、その上に周圍三厘位下の白が見える大さの黒い目を、目玉製作法によつて作つてつけます。

（一六）次きに水草の莖は三十番針金にオリーブの釜糸を巻いたものに淡糊を引き乾かして適宜に切つて貼るのてございます。而して水草を摘み草が如何にも水にたよ〳〵として居る樣に優しくつけますと一入趣きが深うございます。（犬の水草六枚は針金なし）

（一七）水は三十番針金を適宜に切つて、兩端を細くするために中央に半紙を巻いてその上に水色の釜糸を巻き、附錄第十二圖の如く水をつけて完成致します。

三壜細工

壜細工と申しますのは、フラスコの様に口の細長い、胴の太い透明な硝子壜の中に、その壜の口の大さよりもずつと大きいものを入れる趣味ある一種の細工物でございます。

此の細工の方法は普通世間では秘傳とか何とか申しまして極めて秘密にされてゐる事でございますけれど、私は多數の方と樂しみを分つことに致さうと思ひまして、何人にても出來る、尤も簡易で、しかも面白いものを二三種說明することに致しました。

一、器具と材料

壜細工に使用する器具と材料とは、製作するものによつて色々種類がございますが、本講義に必要な器具と材料とを列擧致しますと、凡そ左の通りてございます。

器具

一、竹棒　煮物箸位の長さと太さの青竹で作つた棒を二本用意致して置きます。之れは壜の中のものを摘むのに用ゐます。

竹棒（第百六十九圖）

一、鈎棒　一方の端を鈎の手に曲げた直徑一分位の大さで、長さ一尺二寸餘りある針金でございます。之れは壜の中のものを引き上げる時に、その鈎にひつかけて取り出すのに使用致します。

鈎棒（第百七十圖）

一、鈎附ピンセツト　長さ九寸餘りの普通のピンセットの根元に鈎をつけた

ものて、ピンセットの方は物を挟む時に用ゐ、鉤の方は壜の中の物を引き上げたり、格好を直したりする時に使用致します。

鉤附ピンセット　（第百七十一圖）



この外、曲尺、鋏、鉛筆、針などの樣に、普通一般に使用するものは色々ございますが、特に壜細工用の器具としては略々以上の三種があれば結構てございます。

材料

一、硝子壜　フラスコの樣な形をした口の細長い、胴の太い透明の硝子壜てございまして、色々のものを、その中に入れて外から眺め樂しむのてございます。而して壜の中に物を入れる時には、先づその壜の內外をよく洗つて汚れを落し、乾いた手拭を竹棒のさきに挾ませて、水氣を拭き取り消らかにしてから使用致します。

一、口栓　口栓は壜に細工物を入れてからその中に埃が這入らない樣に口にする栓てございまして、多く神代杉て作られて居ります。而してその形は第百七十二圖のイの樣に中央に小さい穴のある德利の口栓の樣な丸い平たいものと、ロの樣に中央に小穴のある厚さ二分位て、（イ）よりも凡さの大きいものと、（ハ）の樣な形をした厚さ三分位てその中央に穴があつて細い竹を通したものとからなり、その組み立て方は、先づ（イ）（ロ）を順に重ね、（イ）（ロ）の中央の穴に（ハ）の細い竹を通しますと、第百七十三圖



（第百七十二圖）

（第百七十三圖）



の樣な口栓が出來上ります。

この外特種のものは種々ございますが、必要に應じてその時々に説明することに致します。

實習

一、松毬

中壜の中に六個の松毬を入れて、その内の五個は梅の花辨の樣に平に、殘りの一個はそれよりも稍長くして五個の中央の下に垂れる樣にして、何れも光り玉を通した糸で格好よくつるした典雅なものでございます。

材料

松毬六個。白の絹糸一丈。光り玉少々。中壜及その口栓一個づゝ。

製作の順序

（一）用意してある中壜の中をよく洗つて埃を落し、乾いた手拭で壜の内外の水氣を拭き取つて置きます。

（二）次きに黒の絹糸を一尺五寸に五本と、二尺五寸に一本だけ切つて、その各々の糸の中央で第百七十四圖の樣に松毬の心の端をくゝり、その糸の兩端は程よく撚つて置きます。



松毬

（第百七十四圖）

（三）次きに齒磨の楊枝に石鹸をつけて六個の松毬の鱗の一片〳〵を入念に磨き、清水で五六度すゝぎ、最後のすゝぎ水の中に二分間ばかり浸して置きます。すると大きく開いてゐた松毬が水がしみ込みました爲めに心をつゝむ樣にして堅く細く萎んで壜の口よりも小さくなりますから、それを水の中から引き上げて乾いた手拭に包ん

て水氣を取り、各々の糸の端を一所に結んで、一つ〳〵を壜の中に入れます。而して松毬が壜の中央にぶら下る樣につるしてその糸の端を竹又は木切に結びつけ、二三日間日光に乾します。

（四）斯うして二三日經過致しますと、濡れ萎んだ松毬は自ら乾きまして元の樣にパッと大きく開きますから、開いた所で一尺五寸の糸で結びました五個の松毬は梅の花の花辨の樣につるし、二尺五寸の糸をつけました殘りの一個は五個の中心に一段低く下に垂れる樣にして糸の長さを定め、各々の糸に光り玉を通します。

（五）而して口栓のイとロとの中央の穴に六本の糸を通し、長さ六分位の細い針金を二重に折つてロの口栓の穴の上に置き、六本の糸を二つに分けて反對の方向から二三回その針金に卷きつけ、堅く結んで糸を切つて了ひます。以上て全く出來上りましたから、ハの口栓の竹の棒をロの口栓の穴に拔けない樣にさし込んで置きます。

注意　壜細工に用ゐます松毬はなるたけ心の細い、そして松毬の鱗の樣なものが大きく開いたものを選びますと、入れる時に便利な許りでなく、入れてから壜の中で大きく開くので殊に美しく見えます。

二、井戸に朝顏

壜の口よりもずつと大きい井戸に滿開の花をつけた二本の朝顏をあしらつたものを中壜の中に入れて、加賀の千代女の、

朝顏に釣瓶取られて貰ひ水

の景を見せた、一寸面白い工夫のものでございます。而して壜の口よりも大きい井戸を入れる所がこの細工の興味をそゝる所でございます。

材料

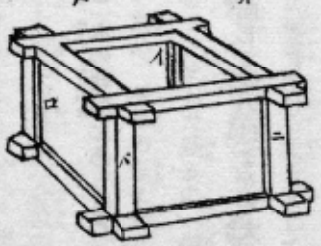
壜細工用の井戸一組と朝顏を一對。光り玉を少々（或は南京玉）中壜及びその口

栓一個づゝ。

製作の順序

（一）例の如く壜の掃除をして置きます。

（二）次ぎに井戸の四隅の柱を第百七十五圖の如く便宜上イロハニと定めます。そして外側から見えないところ即ち内側の上の方に(1)(2)(3)(4)と、下側に一二三四と標をつけます。すると井戸は一々破はしましても其の標に依つて再び組み立てる事が出來ますから一度破はして組み立てゝ見まして、柱の兩端の細い所などは容易に組み立て得られる樣に、木の角を少しけづつて置きます



（第百七十五圖）

（三）次ぎに破しました井戸枠を長いピンセットで一つ〳〵挾んで壜の口から入れ、數字を正しく合せて組み立てるのでございます。此の時木の組み合ふ場所は一々糊をつけて正しく接ぎ合せて、ギク〳〵と破れさうに動いたり、形が崩れたりしない樣に注意を要します。かうして井戸を組立てます場合に氣をつけましても出來上りましたその上には疵がついてゐますから最初組立てました即ち下の方が疵が少うございます。それでピンセットや竹の棒でクルリと引つくり返して疵の少ない方を上にして置きます。

（四）次ぎに二本の朝顔に趣を見せて曲げ、その根本を五分ばかり折り曲げて置きます。

（五）次ぎに一本づゝピンセットで井戸の兩側に入れ、五分ばかり折り曲げた根本の所を下から井戸枠の中に差し込んで朝顔の根を隱して置きます。次ぎに白の絹糸を長さ八寸に切り一方の端に釣瓶を一つ結びつけ、光り玉または南京玉を通して糸が七分ばかり殘つた頃井戸車にくゝらせて其端をもう一つの釣瓶に結びつけますと、糸に玉のない所が四五分出來ますから玉をその所に引き寄せまして端から二寸位の所を玉のない糸ばかりにして、井戸車の溝にからま

せ糊でつけて置きます。

（六）次ぎにそれを壜の中に入れ、繩の長い方を井戸枠の上に載せ、短かい方は朝顔の蔓をからませて千代女の心を見せます。

（七）次ぎに井戸車の横木の穴に二重に捻つた絹糸を通し、（ロの口栓の穴に引き出し、長さ六分ばかりの針金を二重に折つたものに巻きつけて糸を結んで切り捨て、ハの口栓の竹棒を二分五厘の長さに切つて上から差し込みますと、井戸に朝顔の壜細工は全く出來上ることになります。

注意　井戸に朝顔の時は（イの口栓は用ゐません。

三、親子猿

大壜の中一杯になる樣な赤い大きな親子の猿が抱き合つて座布團の上に座つてゐる單純ながら、子供らしい面白いものでございます。

材料

六寸（隨意）角の絣縮緬一枚（親猿の身頃）。三寸角一枚（親猿の頭、寸法は身頃の二分の一）。四寸角一枚（子猿の身頃、親猿の三分の二角）。二寸角一枚（小猿の頭、寸法は身頃の二分の一）。幅九分、丈一尺一寸の親猿の帶と幅七分、丈九寸の子猿の帶（色は共に隨意）。幅三寸、丈六寸の座布團用の用布一枚。綿少し大壜及びその口栓一個づゝ。

製作の順序

（一）先づ壜を洗つてよく水氣を拭き取つて置きます。

（二）次ぎに親猿の身頃に第百七十六圖の如く四方の幅の中央にしるしを一つつけ其れより左右五分の所に標をつけ四隅とも各々三角に折つて中央の五分の所までグシ縫ひになし、風車形になる樣に片返しにして共糸を以て縫ひ留をかけ、

外表に返します。すると中央が一寸角に明いてゐますから、その周圍を二重の絲糸で細かく縫ひ、足と手と胴になる所とにフウワリと綿を入れ、糸を引き締めて花結びに結んで置きます。

（三）　次ぎに親猿の頭になる用布の四隅の角を丸く落し、一分位の縫ひ代で周圍を縫つてフウワリと綿を入れて糸を引き締めますと、圓い頭の格好になりますから、胴の頭をつける標の所に、それをくけつけます。

猿の身頭

（第百七十六圖）

（四）　次ぎに帶切れを幅一杯に縫ひ、外表に返して丸く綿を入れ、丈の兩端を三つ或は五つに折つて美しくくゝり、親猿の胴に廻して後で結んで置きます、

以上で親猿は出來上りましたから、それと同樣の方法で子猿を縫ひます。但し子猿の篤附寸法は親猿の五分にした所を四分と致します。又腹の中央の穴は縫つた糸を綿を入れましてから締めて四度ばかり結んで切つて了ひます。

（五）　次ぎに座布團の用布で適宜な形に座布團を作り、フウワリと綿を入れて普通の座布團の樣に閉ぢて置きます。而して壜の中に先づ座布團を入れ、位置を正してから親猿の手と足の綿を疎して胴の中の綿を腹の穴から拔き出し形を細くして壜の中にねじ込みます。そして腹の中から出した綿をピンセットで再びつめ込んで竹棒やピンセットで形を整へ穴の周圍を縫つた糸の端を引き上げ壜の口に近寄せて糸を引き締め、堅く四度程結んで切り捨てます。

（六）　次ぎに子猿を其のまゝねじ込み格好よく親猿の懷に抱かせます。

（七）　以上てすつかり出來上りましたから口栓を離れない樣にしつかりつけて口を致して置きます。

四編物

編物にも種類が澤山ございますけれど、紙數に限りのある本書には一々說明致し難うございますから、先づ編物の基礎になるものを二三種程り講義することに致します。

一、器具と材料

本講義に用ゐる器具と材料とは略々左の品々でございます。

器具

一、鉤の編棒　角製と金製との二本の鉤の編棒を用意致して置きます。而してその角製のものは毛糸を編む時に用ゐ、金製のものはレース糸を編むのに用ゐます。

二、四本針　中細用の四本針を二本用意致して置きます。

材料

主として毛糸とレース糸とを用ゐます。

二、編み方

編み方にも種々と種類はございますけれど、すべてのもの〻基礎編みとなるものを擧げますならば、左の三種でございます。

（イ）鎖編み　鎖編みはあらゆる編物の編み始めに必ず用ゐる編み方でございまして、その仕方は第百七十七圖の樣に、短かい方の端を自由に動かし得る樣に一つ詰んで輪を作り、その輪の中に鉤棒を通して鉤の端に長い方の糸をひつかけてそれを引き出しますと、第百七十八圖の樣


一　細編

（第百七十七圖）


二　鎖編

（第百七十八圖）

に鎖の形になりますから、必要な數だけ、同じ方法を幾度でも繰り返します。

一　編　堅



（第百七十九圖）

一　編　堅



（第百八十圖）

三　編　堅



（第百八十一圖）

二　編　堅



（第百八十二圖）

（ロ）**堅編み**　堅編みのことは一名帽子編みとも申します。その編み方は、

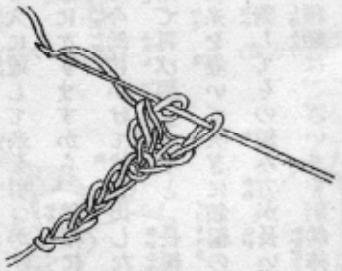
鎖編みの次の中に第百七十九圖の樣に鉤棒を通して糸を引き出しますと、鉤棒には前からかゝつてゐた糸とで二本になりますから、其の二つ更に第百八十圖の樣に鉤に糸を引つかけて抜き出しますと、堅編みは第百八十一圖の樣に出來上りますから、必要な數だけ第百八十二圖の樣に次の鎖編の穴に同じ方法で編

一　編　長



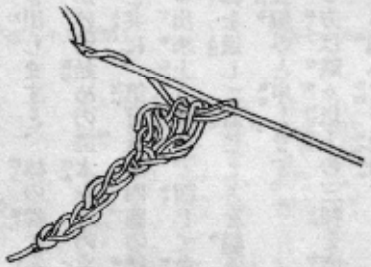
（第百八十三圖）

二　編　長



（第百八十四圖）

三　編



（第百八十五圖）

みせます。

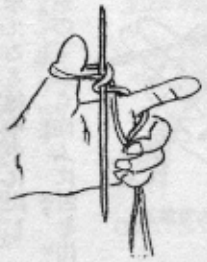
（八）**長編み**　これは一寸堅編みと編み方は似て居ります。堅編みの時と同樣に一本糸のかゝつてゐる鉤棒に第百八十三圖の樣に一同だけ糸を巻きつけ、次ぎに鉤を鎖編みの穴に通して糸を引つかけて抜き出しますと、棒の端に糸が三本かゝつてゐる事になりますから、鉤棒に糸をかけて始めの二本をその糸で綴り、殘りの一本は今鉤にかけて抜き出した一本と共に、第百八十四圖の樣に新たに鉤にかけた糸で再び綴りますと、長編が一つ出來上ります。而して第百八十五圖の樣に針に糸を巻いて次ぎに鎖編の穴に棒を通して同じことを編みます。これは堅編みに對してその編み方が長いので長編みと申します。

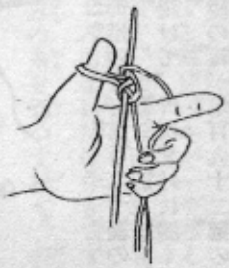
この外まだ色々の種類はございますが鉤棒で編む方は略々以上の三種を應用すれば出來上りますから、次ぎに四本棒を用ゐてする編み方を説明することに致しませう。

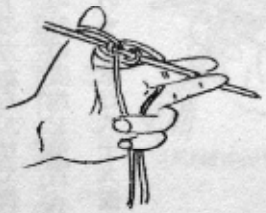
（二）**編み始めの仕方**　先づ糸の一方の端は一尺位の長さにして（編む品物によつて長さは定まり、編む品物の幅或は丸さの寸法の三倍長くするのを通例と致します）糸を二重に折り、一尺位にしたその端を左の手の拇指の方にして、食指と拇指とにその輪をかけ、糸の弛みを加減して二本の糸を無名指小指とて抑へます。

次ぎに四本針の針を二本その尖端を揃へて右の手で筆を持つ樣にして持ち、第百八十六圖の樣に針の尖端で左手の拇


（第百八十六圖）


（第百八十八圖）


（第百八十七圖）


（第百八十九圖）

指と食指との間の糸を向ふから手前に引き、その針の尖端を第百八十七圖の樣に拇指の下に垂れてゐる糸に下の方からかけて拇指に添はせた拇指の所に出來てゐる輪の中に出し、更にその針の尖端を第百八十八圖の樣に食指の方の糸の下から向ふに針を出し、其のまゝ第百八十九圖の樣にその針の尖端を上から拇指の輪の中にくゞらせ、拇指の輪を第百九十圖の樣に放し、針の糸を第百九十一圖の樣に拇指の外側に掛けて、拇指を外に開く樣にして引き締めます。すると編み初めになる卽ち基礎の輪が第百九十二圖の樣に二つ並んで出來上ります。


（圖一十九百第）


（圖二十九百第）


（圖三十九百第）

次に其の針の尖端を第百八十七圖の樣に、又第百八十八圖第百八十九圖を第百九十一圖までの樣に致しますと基礎編みが一つ增したのでございまして針に三つになりましたのでございます。此の方法卽ち第百八十七圖から第百九十一圖までを幾度となく繰り返して入用な目だけ作ります。而して最後の止め方は二度ばかり糸を結び、短かい方の糸を切つて捨て、針を一本抜いて一本だけ殘して置きます。

表編みの仕方


（圖三十九百第）


（圖四十九百第）


（圖五十九百第）

（ホ）**表編みの仕方**　先づ基礎編みをした針と糸とを左手に持ち、右の手に他の針を一本筆を持つ樣にして持つて針の尖端を基礎編みの始めの穴の中に第百九十三圖の樣に手前の方から通して左手で持つてゐる糸を掬つて左右兩手の

中指に助けさせながら基礎編みの穴の中から糸をかけたまゝ第百九十四圖の樣に手前に抜き出し、其の基礎編みを第百九十五圖の樣に左の針から一つはづして糸を締めますと、左の方の針の目が一つ減じ、右の方の針に左の方より一段長くなつて目が一つ出來たことになります。この編み方を表編みと申します。

裏編みの仕方



（第百九十六圖）



（第百九十七圖）



（第百九十八圖）

（ハ）**裏編みの仕方**　裏編みの仕方は表編みと同樣にして左右とも針を持ち、右手の針の尖端を表編みの時と反對に左手の針の目の穴の向ふから手前に第百九十六圖の樣に通し、食指の糸を右の針の尖端にかけ、左の拇指と左右の中指とに手傳はせて穴の中から第百九十七圖の樣に向ふ側に出します。すると（第百九十八圖）右の針に目が一つかゝりますから左の針の目を表編みの時の樣に一つ抜き取ります。この裏編みは裏の方に表編みと同樣のものが出來、表の方に表編みの裏と同樣のものが出來る一寸目前きの變つた編み方でございます。

（ト）**目の減し方**　これは編みながら編み目を色々の形に工夫する時に用ゐる編み方でございまして、二つの目を一つの目にして、目を一つ減す方法でございます。その編み方は表編みで減す時には表編みと同樣の方法で右の針で左の針の目を同時に二つかけて表編みを致します。裏編みで減す時には裏編みと同樣の方法で同時に二つかけて編みます。

（チ）**目の增し方**　これもトの場合と同樣の時に用ゐますもので、その仕方は糸を右の針の尖端で手前から向ふに一つ掬ひまして次を編めば宜しいのでございます。

四本針を用ゐます時は以上の編み方を一通り心得へて置きますなら、大抵のものは編むことが出來ますから、實習に取りかゝりませう。尙本書の四本針を

用ゐる編み物の實習には、説明する上の便宜上、表編みのことは『表』と言ひ、裏編みのことは『裏』と言ひ、目を減す時は、それが一度ならば『二一度』と言ひ二度の時は『二二度』と言ひ（以下同じ）、目を増す時はそれが一度ならば『一作』二度續けば『二作』と云ふ符合を用ゐてございます。故に十九表、一作、二一度三裏、三表。とある時は、十九度表編みをなし、一つ目を増して次ぎに一つ目を減し、三度裏編みをして三度表編みを致すのでございます。

實習

一、日の丸銀貨入

日の丸銀貨入は白レース糸で編んだ袋の表に赤レース糸で日の丸の形を編み込んだ面白い銀貨入でございます。

材料

赤レース糸少々。白レース糸五本巻一つ。（但し色は随意。）

製作の順序

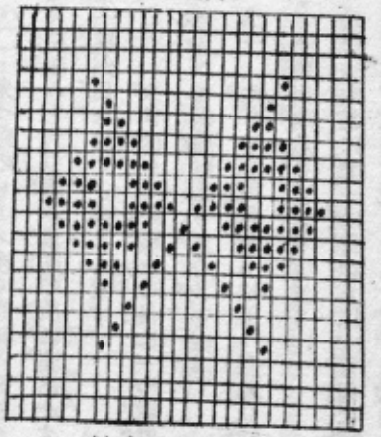
（一）先づ白のレース糸で筒編みを三つ編み、輪にして堅編みで止め、その輪に堅編みを六つ編み最初の所に止めますと六つの堅編みで丸くなりまして、第一堅が出來たことになります。

（二）次ぎにその堅編みの目に一つ宛堅編みをなし、三つ目位に同じ穴に二つ宛入れて四段ばかり編み上げます。

（三）次ぎに五段目からは五つ目毎に同じ穴に二つ宛入れてもう五段編みますと十段出來ることになります。

（四）次ぎに十一段目からは十目毎に同じ穴に二つ宛入れて更に五段だけ編みますと都合十五段になり、可成り大きな皿の様なものが出來上りますから、此處からは第百九十九圖の様に赤のレース糸を接合せて目を増しも減しもせず

に十段だけの間で日の丸の形を作ります。而して日の丸の上に五段だけ白のレース糸で目の數を變へずに編みますと、銀貨入の胴は出來上つたことになります。



（第百九十九圖）

（五）次ぎに紐を通す飾り穴を作ります。始め長編みを一つ編み次ぎに鎖編みを三つ編んで第二百圖の樣に堅編みの目を二つ飛んで長編みを一つ編み、更に又鎖編みを三つ編んで堅編みの目を二つ飛んで長編みを一つ編んで一周致します。

（六）二段目には鎖編みを三つ編んだ所に長編みを一つ入れ、次ぎに鎖編みを三つ編んで次ぎの鎖編みの中に長編みを一つ編みます。段だけ編みましたら

ば、四段目には第二百圖の上の樣に鎖編みの中に長編みを五つ宛編み入れて一周し、五段目には白のレース糸で長編みの一つの目に堅編みを入れ、鎖編みを二つにして更に次ぎの長編みの目に堅編みをして一周致します。かうして白で緣を取りましたら、鎖編みを一つして糸を切り、輪を抜き出して切り端が見えない樣に他の穴に通して隱して置きます。

（七）以上で袋の方は全部出來上りましたから、次ぎに紐を作つて通します。卽ち糸を二重にして長さ一尺ばかりの鎖編みに編んだものを二本作り、紐通しの飾り穴の第一段目に第二百一圖の樣に紐を二本並べて通し、而して一本の紐の端は左に、一本の紐の端は右の方に引き出して共糸の房をつけますと、日の丸銀貨入は全く出來上つた事になります。

飾り穴に紐を通す圖



（第二百一圖）

飾り穴に編みの圖



（第二百圖）

二、寝冷え知らず

寝冷え知らずは長編みと堅編みとを取り交ぜて工夫した、子供用の温かい重宝な品でございます。

材料

白毛糸と赤毛糸とを凡そ三オンスづゝ。

製作の順序

（一）先づ赤の毛糸で鎖編みを四十編み、二段目には同じ色の毛糸でその鎖編みの目に長編みを一つ宛致します。

（二）次ぎに三段目は白の毛糸で長編みを一段編みます。其の二段目の編み初めと編み終りとの目にだけ長編みを三つ宛其の他の目には一つゞ入れて、編みます。而して糸を切らずに裏に返し、裏を見ながらその長編みの目に堅編みを一つ宛入れて一段作ります。

（三）五段目には再び赤の毛糸で、三段目の時と同様に編み初めと編み終りとの目に三つ宛入れて長編みを一段編み、その糸を切らずに裏返しにして一つ宛堅編みを編みます。

（四）斯うして編み初めと編み終りとの目に三つ宛入れて長編みを同じ糸で堅編みを一つ宛入れて一段を編んでは糸の色を變へて、赤も白も二十五段になる迄編みます。すると全部で五十段となり、末廣がりな胴が出來上りますから次ぎに兩足をつけます。

（五）最終の編み目の數を五等分し、兩端の五分の二を足とし、中央の五分の一を股の所に致します。足の作り方は端から五十だけ鎖編みをし、足になる二分の二の標の所に編み續けますと、その五分の二と鎖り編みとて輪が出來ますから、目の數を減しも增しもせずに其の儘の數で長編みと堅編みとを一段づ

丶しては糸の色は變へて、白赤ともに十段づゝ編み都合二十段になつた所で鎖編みを二つして糸を切り、切り端を編み目の間に隱して置きます。

左右の足を何れも斯うして編みましたらば、足の部分を除きました胴の三方の周圍の凸凹を隱すために、一つの目に一つ宛堅編みをして置きます。

（六）次ぎに赤の毛糸を二重にして長さ一尺餘りに鎖編みを四本作り、胴の編み初めの兩端と、胴の丈の中央の兩横とに各々一本づゝ紐としてつけ、その端に赤白の毛糸で房をつけると、寢冷え知らずは全く出來上ります。

三、涎かけ

四本針を二本だけ用ゐて編みました赤ん坊にふさはしい、美しい、涎かけでございます。

材料

並の毛糸四オンス。極細一オンス。（何れも色は隨意でございますが、兩者の色は配合よきものに色を變へると出來上りが美しくなります。）

製作の順序

（一）先づ始めに二本の針で四本針の編み始めの仕方によつて、二十五の目を作ります。而して左の如き順序によりて十二段だけ編みます。卽ち、

（一段目）十九表、一作、二一度、一作、二一度、一作、二表。
（二段目）十表、十一裏、五つ殘し（編まずにその儘にして置く）
（三段目）十五表、一作、二一度、一作、二一度、一作、二表。
（四段目）十一表、十一裏、五表。
（五段目）二十一表、一作、二一度、一作、二一度、一作、二表。
（六段目）十二表、十一裏、五つ殘し。
（七段目）十一裏。六表、一作、二一度、一作、二一度、一作、二表。
（八段目）二十九表。
（九段目）五表、十一裏、七表、一作、二一度、一作、二一度、一作、二表。

（十段目）二十五表、五つ殘し。

（十一段目）十一裏、八表、二一度、一作、二一度、一作、二表。

（十二段目）六つ被せ（左の針の目を一つ編まずに右の針にうつし、次の目を一つ編んで今うつした目を之れにかぶせてはづします。これを一つ被と申しますから此の仕方を六度致します。）十八表、一つ殘し。

以上十二段を編みますと一つの模樣が出來上りますから、此の十二段を二十五度繰り返して編みますと、涎かけの形が出來ます。而して最後の針を鎖編みて止めて置きます。

（二）次ぎに外側と兩横端との三方に飾りをつけます。卽ち極細で一つの穴に二つ宛思ひ切り長い長編みを三方に編み、その上に鎖編みを三つしては長編みと長編みとの間に堅編みを一つし、又鎖編みを三つしては次ぎの長編みと長編みとの間に一つ堅編みをして長編みの上に全部編みますと、クシヤ〳〵縮れて美しい飾りか出來上ります。

（三）次ぎに胴と同じ毛糸を二重にして長さ二尺位の鎖編みの紐を作り、更にその鎖編みの二つの穴に糸をかけてもう一度鎖編みを作り、同じ方法てその上にもう一度鎖編みを作りますと、太くて丸い紐になりますから、その紐を内側の方に、出來上り圖の如く目を三つ宛飛ばして裏表に等しく出して通し、紐の兩端に共色の毛糸て房をつけて置きます。

以上て涎かけは全部出來上つたことになります。

儀式用折紙水引

日本は神代の昔から、人に品物を贈る時には根引きに致しましたり、小松につるしたり、若木の小枝を折り添へるなどの風流な習慣のあることが物語などの中に見えて居ります。時勢の變遷につれて斯うした風雅な習慣は次第にすたれて了ひましたけれど、鮮魚の類を贈るのに竹の小管を添へるなどは、今も猶行はれて居りますが、何時となく他の多くの物は唯紙に包んで水引をかけるに止まる樣になつたかと思ひます。

この品物を紙に包むその包み方、水引のかけ方も、時勢の變遷につれて次第に變化し、何事にも簡略主義の行はれます今日では餘程變つてゐる樣に存じます。而してその流儀もさま〴〵ございますが、私は各流の中からたゞ時勢に適應すると思ふもののみを選んで、それに自分の考へを加へ、一つの流儀を立てることに致しました。斯う致しますまでの經路及び各流の比較研究などを一々説明すれば限りなく長くなりますから、此處には私の考案した中から日常必要なもののみを擧げることに致します。儀式用折紙と申しますのは、品物を包む包み紙のことでございます。

一、器具と材料

本講義に要する器具と材料とは凡そ左の通りでございます。

器具

鋏及び尺度などの如き日常用ゐます器具を除きましては、疊針か目打錐を一本用意致して置きますのです。

材料

材料として主に各種の水引、元結ひ、大中小の奉書紙、表紙などを使用致し

ます。

二、儀式用折紙と水引の結び方の種類

儀式用折紙と水引の結び方の種類は多種多様でございまして、私の研究して居ります種類のみでも六百三十種程もございます。然しそれ等は悉く日常生活に必要なものゝみと限らず、中には可成時代と隔たり、縁遠い様な感じの起るものゝないとも限りませんから、その内から時代にともなつて必要なもの百五十種を選びまして日々教授して居りますが、此處にはどなたても心得て置かれた方がよろしい様な尤も必要なものゝみを擧げることに致します。

三、製作上の心得

水引の色の種類と用ゐ方

これらの水引は祝儀、不祝儀、平常の贈答細工物などゝその向き〳〵によつて色々選びます。而してその長さも五寸から五寸違ひて八尺までございますから、品切の大小によつて長さを見計ひながら用ゐます。

儀式用の水引の色の上下

儀式用の水引の中央から二色に分れて居りますものは、その一方が上位となつて左になり、他の一方は下位となつて右になる習慣でございます。これを反對に致しますと、淺間しく心なき業に見えますから、改めて前に擧げました儀式用の水引によつて説明致しますと、次きの通りでございます。

向つて右(下位)……赤紅赤金黒
向つて左(上位)……白白金銀白

而して金銀の水引の場合には一寸考へますと、金の方が上位になつて左に行くべきはずの様に思はれますけれど、銀の方が金よりも潔白な色だと言ふ所から上位になつて左になります。

妻大圖

祝儀用と不祝儀用との水引

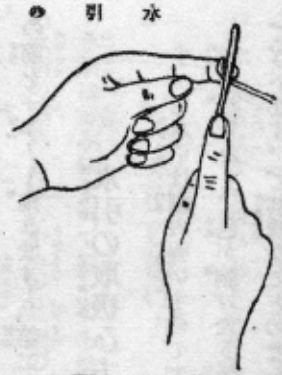
儀式用の水引六種の中、黒白と白との二種は不祝儀の時のみに用ゐます。もし黒白或は單に白のみの水引がない場合には、白の元結を五本集めて水引の代用を勤めさすことに致します。殘りの四種は祝儀と贈答との何れの時に用ゐても差支へございません。けれど普通紅白は重々しくじつとりとした所があり、金銀は何かしら華やかに、赤白と赤金とはそれ〳〵に趣きがございますから、各々それにふさはしい場所を見計ひて用ゐます。

水引の結び方

普通一般に用ひられてゐる水引の結び方は、不祝儀の時は結び切りにして、その兩端がしほ〳〵と頭垂れた樣に下に向け、贈答品の時或は御出産とか新築とか言ふ御祝ひの時、その他幾度あつても宜しい御芽出度い場合には花結びの

樣に結んだり、その他樣々の結び方に致します。而して同じく御芽出度い祝儀

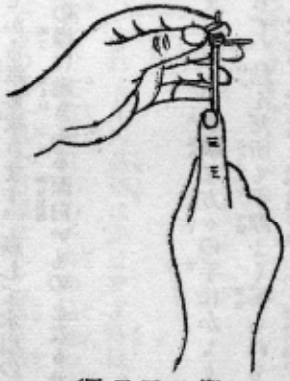
水引の結び方



（第二百二圖）



（第二百三圖）



（第二百四圖）



（第二百五圖）

ても病氣全快祝とか婚禮などの樣に二度とあつてならない場合には結び放しにして、その兩端を勢よくピン〳〵と跳ねさせて置きます。これは再びあ

ることを止める心持ちを現はし、同じ祝ひても度重らない様にと言ふ意味を含ませたのでございます。そしてその結び切りの端は決して切り捨てず、餘り長過ぎましたら、恰好よく端を捲いて置きます。その巻き方は右の手に目打錐を持ち、左の食指と拇指とで水引を一分ばかり外に折て第二百二圖の様に目打錐の尖端から五分ばかりの所に添て抑へ、第二百三圖の様にクル〳〵と左巻きにして捲き第二百四圖の様に最後にギュット力を入れて、錐に捲きついてゐる水引を兩方から抑し、よく捲き癖をつけてから錐を抜きます。斯して水引の五本の筋を一本〳〵捲きますと、第二百五圖の様に趣きある面白いものとなります。

水引の取扱ひ方

すべて水引は糊の強いものでございますから、不馴な方々の手にかゝりますと糊が落ちたり、色が剝げたり致し勝ちて、結んだ所も手際よく參らぬものでございます。て其様なことのない様に、最初に水引の中央を持つて兩方とも底力を入れて、そつと五度ばかり指先きて扱きますと、指先きの脂肪が水引に移つて、素直になり扱ひ易くなるものでございます。

水引の掛け方

水引は好みによつて種々なものに結び、それ〴〵の品切にかけます時は、始め水引の染め分けの中央を品物の中央に當て、左右何れかの一方の品物の幅に合はせて折り、次ぎに品物の下に敷き、一方の折り目を目標にして更に殘り一方を折つて掛けるのでございます。

この外注意すべきことは種々ございますけれども、實物を製作するに當つて述べることゝ致し、次ぎに實習に取りかゝります。

實習

一、金銀包と紙幣包及び水引の掛け方

金銀包

金銀包は金貨及び銀貨を包む折り紙の仕方でございまして、不祝儀用の外は何れの所に用ゐても差支ございません。

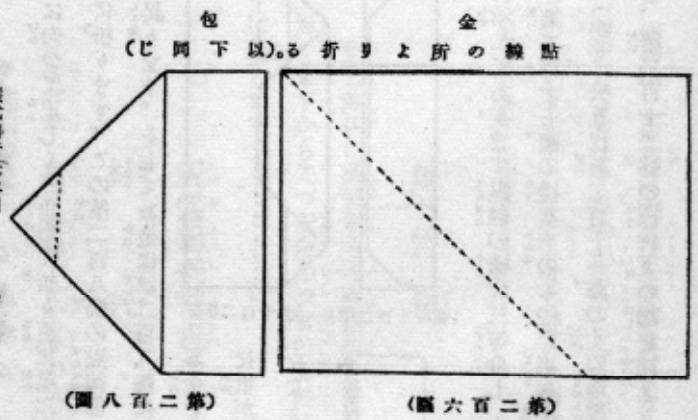
材料

小奉書紙一枚。金銀の二尺五寸の水引一本。

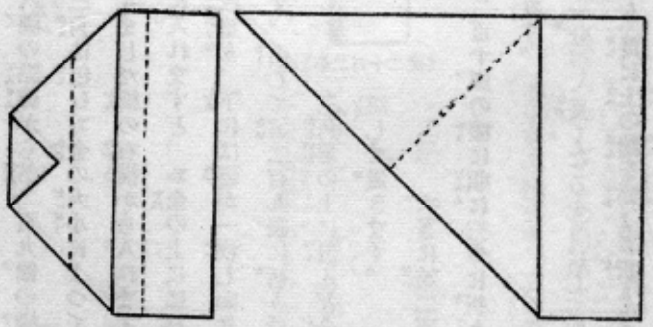
製作の順序

（一）　先づ包み紙から前に折る事に致します。用意してあります小奉書紙の表を下にして第二百六圖の樣に紙を縦に置き、第二百七圖の樣に左手前の角を正しく三角に折り返します。

（二）　次ぎに第二百八圖の樣に第二百七圖の左の向側の角の點線から右の手



（第二百六圖）　（第二百八圖）



（第二百七圖）　（第二百九圖）

前に向つて正しく三角形に折り更に第二百八圖の點線から第二百九圖の樣に三角に折ります。この第二百八圖の點線即ち三角は包むお金の大小によつて廣さが異ります。そしてお金は第二百八圖に折りました紙の右横から入れますのでお金を中に入れますと、お金の上には三角形に紙が三枚重り、下には僅か一枚しかない事になります。而して第二百九圖に折りました三角形の上に包んだ金高を記して置きます。


（第二百十圖）


（第二百十一圖）


（第二百十二圖）

（三）　次きに第二百九圖に示してあります點線の樣に三等分し、第二百十圖の樣に順に三つに折りますと第二百十一圖の樣な形のものが出來上ります。

（四）　次きに第二百十一圖の丈の兩端が一分づゝ長くなるやうにして四等分し、第二百十二圖の樣に下の端を筋より折り、更に上の端を筋より折りますと、四分の二の長さの長方形の包みとなり、そして上の端と下の端とが二分重ることになります。此の包み方を金銀包と申します。而してその出來上りの包み紙の紙の耳が向つて左になる樣にして縦に置き、水引をかけます。（水引の掛け方は次の項の終りで説明致します）

紙幣包

紙幣包には祝儀用と不祝儀用との二種類がございまして、各々その折り方が異りますから先づ祝儀用紙幣包を前に折り、而して不祝儀用のものを折ることに致します。

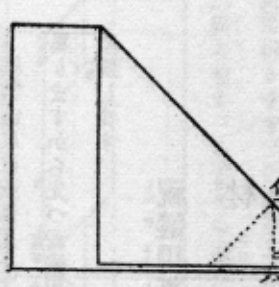
祝儀用紙幣包

材　料

小奉書紙一枚。金銀二尺五寸の水引一本。

製作の順序

（一）先づ小奉書を金銀包第十二圖と同樣に筋を入れて折りますと、第十二圖の樣になりますから、右の手前の筋を（ロ）とし、それより三寸の所を（イ）として輪の方が揃ふ樣にその三寸を折ります。而してこの三寸の所で襞斗を折るのでございます。



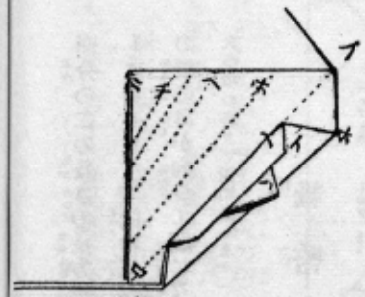
（第二百十三圖）

（二）その折り方は（ハニ）を外側に折つて第十三圖の樣に四角を作り、割出し寸法によつて折ります。

割出し寸法は

一（イニ）の間は三寸

一（イホ）の間は（イニ）の間の三分の一卽ち一寸



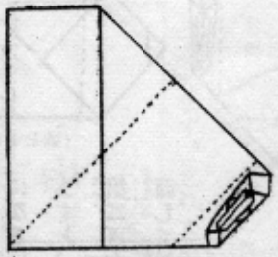
（第二百十四圖）

一（ロホ）の間は五分

一（ホヘ）の間は（イホ）の間と同寸法

一（ヘト）の間は（ホヘ）の間の三分の二

一（ニチ）の間は（ヘト）の間の三分の二

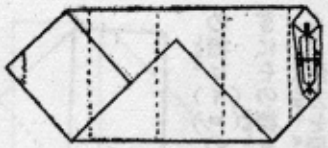

（第二百十五圖）

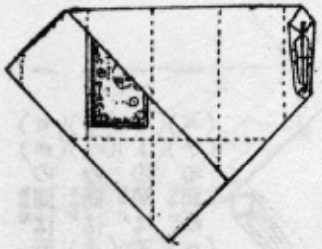

（第二百十六圖）

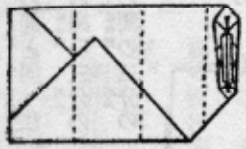
（三）（イニ）の間の紙の端は割出し寸法通りに標をつけ、（ロニ）の間の紙の端には（ロホ）の間だけを五分に標をして置きます。

（四）次ぎに（ホ）の筋を外表に折りますと、（ヘ）の標は（イロ）の筋卽ち中央に重なりますから、その中央から（ヘ）を中表に折り、次ぎにその標を外表に折り、（イ）と重ねますと第二百十四圖の右の樣になりますから、兩方を同樣に折りますと、襞斗は全く出來上りましたのでございます。

（四）次に第二百十五圖の樣にその熨斗の左横から五分離れた所を、熨斗の紙の頭の輪の所を揃へて折り目をつけ、第二百十六圖の樣に左の三角の端を手前の三角から直ぐに二つになる樣に折つて、又元の通り卽ち第二百十五圖の樣に開きますと、筋がついて居ります。此の筋を重ねて手前の三角を第二百十七圖の樣に向ふから一寸五分位の所まで折ります。面して第二百十七圖の樣に丈の二分の一より少し廣く、凡そ三寸五分の幅にして折り目をつけ、その折り目から紙の厚さだけ幅を狹めて紙が盡きるまで卷きますと、五度目に紙が一卷きに足らない半端に殘ります。


（第二百十七圖）


（第二百十八圖）


（第二百十九圖）


（第二百二十圖）

（五）次ぎに折目をつけたものを第二百十八圖の樣に開き、紙幣を入れて第二百十九圖の樣に左端と手前とを折り、次ぎに左から順に卷きますと、第二百二十圖の樣になります。續いて卷きますと、最後に熨斗の所を折り込む樣になりますから、第二百廿一圖の樣に熨斗の左横を左の手に持て、殘りの紙を筋から折り返します。之れで祝儀用の紙幣包は出來上つた事になります。


（第二百廿一圖）
紙幣包出來上り圖

不祝儀用紙幣包

材料

中奉書紙一枚、白の一尺五寸の水引一本。

製作の順序

（一）用意してある中奉書紙の表を下にして横に置き、中に包まうと思ふ紙

幣の幅より凡そ五分廣くして向ふの端から標をつけ、その標から紙の厚さだけ位寸法を短かくして、次第に手前の方に標をつけますと、最後に半端な紙が殘りますから、その半端な所に金を置き、一巻まいて中の紙幣が抜け出ない樣に丈の兩端を少しばかり三角に折り、更らに標をグル〳〵と折つて巻きつけ、最後に紙の耳の方を下にして平に置きます。

（二）次に金銀包第二百十一圖の樣に丈の兩端を一分づゝ廣くして丈を四等分し始め右の端を（四分の一に一分加へたもの）折りその上に左の端を折り重ねますと、左右の端が中央の所で二分重なるとになります（第二百十二圖と同樣）

（三）以上て全部折り上つたことになりますが、此の折り方は祝儀又は普通の時に用ゐます場合には、最後の紙の端即ち耳を向つて左横にして熨斗をつけて使用し、不祝儀の時には耳を反對の横にして熨斗をつけずに用ゐます。

紙幣包の水引の掛け方

祝儀用及び贈答の時の水引は普通花結びにしたり、ピンと上の方に端を向かせて結び放しにして、その端をクル〳〵と螺旋形に巻いたりなど致し、不祝儀用の時には結び放しの端を下に垂れ加減に致します。簡單といふことを主眼にして見ますと、それても十分禮儀には叶つて居りますけれど、今少し趣きあるものに致しますならば、祝儀用及び贈答用としては鮑結、わな鮑、かたがへし、二本鮑の四種の結び方があり、不祝儀用には逆鮑といふ結び方がございます。つぎにその一つ〳〵に就いて委しく結び方を説明致しませう。

祝儀用の水引の結び方

（甲）鮑　結

鮑結は袈裟結に似て袈裟結より遙かに簡單な容易い結び方で、すべての水引の結び方の基礎となるものでございます。

結び方

（一）　始め水引の中央を以て左右の兩端に向つて四五度扱き、手觸りが十分しなやかになりました所で、銀の方の先端で第二百二十三圖の樣に楕圓形の輪を作へます。

（第二百二十二圖）
鮑結　田來上り圖

（二）　次に中央の境目から約二寸餘り離れ金の方を第二百廿四圖の樣に前に作つた銀の楕圓形の上に重ね其の先を、銀の端の下をくゞらせて、金の方でも楕圓形を作る樣な心持ちで第廿四圖の樣にし、第二百廿六圖の樣に金の端を銀の楕圓形の手前の下から出して、次きに金の上を通して、更に向ふの銀の下に引き出します。

（三）　以上で鮑結は出來上つた譯でございますから、次ぎに格好よく形を調へます。卽ち金銀共に水引の五本の線が重つたり、跨つたりして居ない樣に、一々叮嚀に指先きで竝べて落ちつかせ、折り紙の幅に從つて水引の長さを定め水引の掛け方の方則によつてかけまして程よく結び目を締めますと、出來上り圖の樣に美しい鮑結が出來上ります。

（第二百二十三圖）

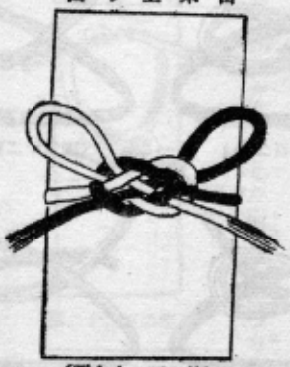
（第二百二十四圖）

（第二百二十五圖）

（第二百二十六圖）

猶鮑結は折り紙にかけました時に結び目がつと上の方に跳ね上り勝ちなものでございますから、其處へ心を止めて出來る限り水引が眞直ぐに一文字の形になる樣に注意致し度いものだと思ひます。而して結び殘りの金銀の端は、折り紙の外側に一寸許り出して五本の筋の長さを揃へ

て切つても宜しいし、出來上り圖の樣に鮑結の上の所で輕く一つ、大きく結んでその兩端を揃へて切つても面白うございます。また少し手數はかゝりますけれど、金銀の兩方の殘り端を程よき長さにクル〳〵と美しく卷いて置きますと趣きを添へるものでございます。婚禮の祝ひの如くすべて切ることを忌む場合には必らずそれを用ゐることに致します。



（第二百二十七圖）

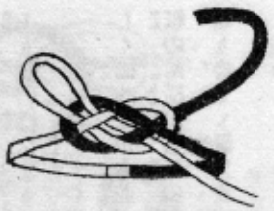
（乙）わな鮑

わな鮑は鮑結から變化した一種の結び方で、鮑結に結んだ水引の殘り端が長い場合に、それを切り捨てることの惜しい時に結びます。而して之れは結んだ端が引つ返して居りますから、二度も三度もあつて宜しいお祝ひの時及び贈答用にのみ用ゐ、二度あつてならない婚禮の祝ひとか、その他再びあることを欲しない時には決して用ゐてはなりません。

結び方


（第二百二十八圖）

（一）先づ例の如く水引を扱いて十分しなやかに致し、銀の方を左に、金の方を右にして第二百二十八圖の樣に普通の鮑結を結びます。


（第二百二十九圖）

（二）次ぎに銀の殘り端で第二百二十九圖の樣に下から上に向けて靜かに曲げて左の方に輪を一つ作へ、鮑結びに結んだ銀の筋と同樣の穴をくゞらせて、その端を右の下の所に引き出します。

（三）次ぎに金の殘り端で銀と同樣にして右の方で輪を作へ、第二百二十九圖の銀の樣な道順で、初の銀の下をくゞらせ、次ぎに金の上を跨せ、また銀の下に通して次ぎに別の銀の上を跨

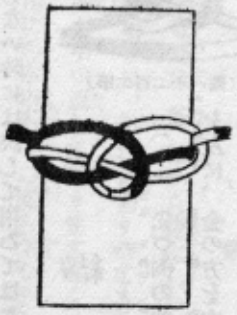
せ、最後に金の下にくゝらせて、その端を左の下の方に引き出しますと、出來上り圖の樣になります。

（四）以上てわな結は出來上つたことになりますから、水引の五本の筋を正しく揃へながら並べて形を調へ、折り紙にかけて程よく締めます。而して折り紙の兩横から外の方へ凡そ一寸位長く伸して出來上り圖の樣に殘り端を揃へて切り捨てゝ置きます。

（丙）かたがへし

かたがへしも鮑結から工夫致しましたもので主として金包の上にかけ、その結んだ形も、かけた所の形も、何れも上品な高尚なものでございます。

（第二百三十出來上り圖）



結び方

（一）先づ常の方法で銀の方を左に、金の方を右にして普通の鮑結を作ります。而して第二百三十一圖の樣に、中央の境目の所が短くなる樣に鮑結の輪を兩方に引き、兩方の輪の長さを折紙の幅と揃へて水引の五本の筋が重り合つてゐない樣に丁寧に指先きで並べ、且つ鮑の輪が動かない樣に瓣をつけて置きます。

（第二百三十一圖）

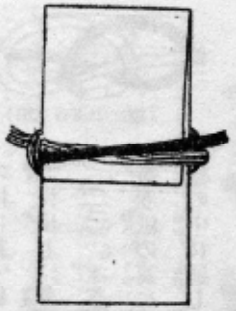


（二）次ぎに左の方に來てゐます銀の殘り端を第二百三十二圖の樣に折り紙の幅に合はせて裏に折り、折り紙の裏を廻して右の方に出し、銀の水引の輪の中に通して金の端の上に出します。

（第二百三十二圖）



（三）次ぎに金の殘り端を銀の殘り端と同樣の方法で折つて、折り紙の裏に廻し、出來上り圖の樣に左の横に出して金の水引の輪の中に通して銀の上に出します。



（第二百三十三圖）

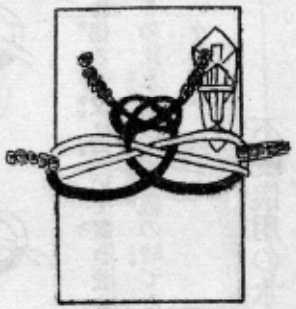
以上でかたがへしは出來上つたことになりますから、水引の五本の筋が重つてゐない樣に正しく並べ、形を調へて折り紙の兩横へ水引の端を二寸程殘して切り捨てゝ置きます場合によりましては切り捨てないで卷いても宜しうございます。これを裏から見ますと、第二百三十三圖の樣な形になつて居ります。

（丁）二本鮑

二本鮑は二本の水引を使つて普通の鮑結を結び、その殘り端で更に小さく鮑結を一つ結んで殘りの端を目打錐でクル〳〵と美しく卷いたもので、折り紙にかけた形はかたがへしに似た所がございます。

結び方

二本鮑出來上り圖



（第二百三十四圖）

（一）　金銀の同じ長さの水引を二本扱き易い樣にして置き、先づ一本の水引を金の方の右に銀の方を左にして持ち、中央の境目から二寸許りの所を重ねて、第二百三十五圖の樣に楕圓形の輪を作へます。

（二）　次に殘りの一本の水引を取り第二百三十六圖の樣に水引の中央が左横になる樣にして組合はせますと第二百卅七圖の樣になります。

（三）　次ぎに丁寧に水引の五本筋を並べ、折り紙の幅に揃へて輪の長さを定め（中央の境目は各々輪の横になつて居なければなりません）更らに第二百三十八圖



（第二百三十五圖）



（第二百三十六圖）

の樣に金の方の殘りの端でもう一つ鮑結を結んで形を調へ、殘りの端を目打錐で美しく卷いて置きます。


（第二百三十七圖）


（第二百三十八圖）

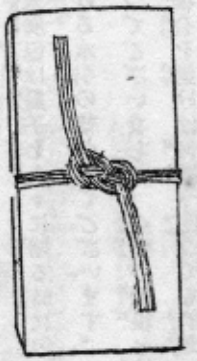
（四）　以上て二本鮑は出來上つたことになりますから、出來上り圖の樣にそれを折り紙の上に載せ、銀の殘り端をかたがへしの時の樣にして裏に折り、二本ともに反對の橫に出して兩端の鮑結の輪の中に通し、程よき長さに切るか又は卷いて置きます。

この二本鮑は不祝儀の時でない限り、如何なる折へ使つても少しも差支へございません。

不祝儀用の水引の結び方

逆鮑結

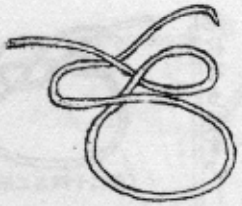
逆鮑結出來上り圖

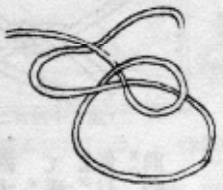

（第二百三十九圖）

不祝儀用の水引の結方は逆鮑が唯一種あるばかりてございます。その形は祝儀用の鮑結の端を下に垂れさせ、左の端を上に向かせた樣なものてございます。

結び方

（一）　先づ白の水引を例の如く四五度扱いてしなやかにして置き鮑結第二百二十二圖を作り、次ぎに逆鮑第二百四十圖の樣に輪を作へて、其端を始めに作つた輪の下をくぐらせます。


（第二百四十圖）


（第二百四十一圖）

（三）　次に後から出來た其輪を第二百四十一圖の樣に最初に作た輪の下に輪


（第二百四十二圖）


（第二百四十三圖）

つなぎをする樣に重ねます。而して第二百四十二圖の樣に後の輪の水引の下を通らせて手前の方に引き出し程よく締めますと、遖鮑は出來上ります。（二百四十三圖）これを前の折紙にかけますと、出來上り圖の樣な形になります。

二、末廣包と蝶結

材料

末廣包は扇子を人々に贈る時に包む折り紙でございまして、蝶結はその上にかける水引の結び方でございます。この蝶結は前に致しました二本鮑の應用の一つでございまして、金銀の羽根を持つた美しい蝶でありますから、不祝儀用の場合を退けば何處へ使つても差支へのない、優美なものでございます。

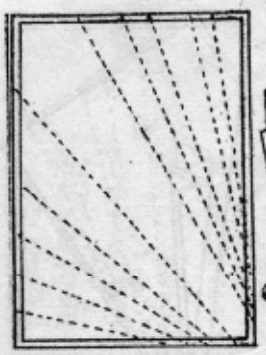
小奉書紙半枚。赤紙半枚。二尺五寸の金銀の水引を二本。

製作の順序

包紙の折り方

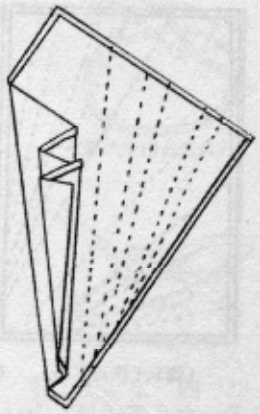
（一）先づ包み紙を前に折つて置きます。赤紙を半枚の小奉書紙より、一分づゝ周圍を狹くして正しく裁ち、所々を糊で止めて動かぬ樣に重ね、縱に重いて第二百四十五圖の樣に左橫と上の端とに各々標をつけます。

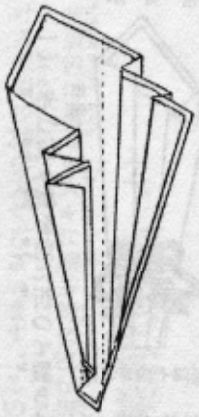
左橫の標の寸法。左上の角から初めの標は全丈の九分の三、次ぎが九分の二、九分の一、九分の一、九分の一。下左の標の寸法。右角から左へ三分、


末廣包

用來上り圖

（第二百四十四圖）　（第二百四十五圖）


（第二百四十六圖）


（第二百四十七圖）


（第二百四十八圖）

次ぎは何れも一分つゝ。

上の幅の寸法。左上の角から上の幅の十四分の六、次ぎが十四分の二、十四分の一、十四分の二、十四分の一、十四分の二。

下右の標の寸法、右角から上へ三分、次ぎは何れも一分づゝ、

（二）　各々標に筋を入れて左横を第二百四十六圖の如く折り、右横も第二百四十七圖の如く折ります、これを兩方から抱き合はせますと、第二百四十八圖のやうに末廣がりの翼斗の形をしたものになります。


（第二百四十九圖）

（三）　次ぎにその丈の細い方から三分の一に折りますと、第二百四十九圖の樣な形になりますから、之に蝶結びの水引をかけます。

蝶結の結び方

（一）　用意してある金銀二尺五寸の水引二本をよく扱いてしなやかにし、二本とも中央の境目を爪の先きで爪跡をつけて、折れない樣に、また境目がばら〳〵にならない樣に注意して內側に曲げて置きます。

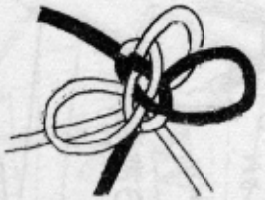
（二）　次ぎに二本の鮑結を致します。そして重ねた所を放しますと、第二百五十圖の樣に水引の境目の所が二本共に輪の中央になつて居りますから、その儘堅くしめて細長い形のものに致します。之れは蝶の胴になる所でございます。


（第二百五十圖）

（三）次ぎに四方に出てゐる水引の端て羽を作ります。即ち第二百五十一圖の樣に胴を縦にして上の方に金と銀の端を二本置き、下にも金と銀の端を二本置いて、先づ右の銀胴から五寸ばかり離れた所を拇指を向ふにして持ち、その儘クルリと廻して胴の丈の眞中の所に宜ね、其端を上の方に出します。而して胴に重つた所を元結で堅く結んで置きます。左の金も同樣に致しますと右と左との大羽が出來たことになります。



（第二百五十一圖）



（第二百五十二圖）

（四）次ぎに全體を倒さにして銀の方を右にし大羽の時と同樣の方法で、胴から三寸離れた所を持つて輪を作り、第二百五十二圖の樣に其端を胴の中央から眞直に横に出して、元結で結んで置きます。之れを裏から見ますと第二百五十三圖の樣になります左も同樣に致しますと、小羽が左右に出來上ります。即ち第二百五十四圖の樣になります。而して前に作つた大きい方の羽根を頭から略二寸ばかり離れた所と尾から五分の所とを少しそらして、角を立てる樣に致しますと、出來上り圖の樣に美しい羽根の形になりますから、左右とも此の方法で形を整へます。



（第二百五十三圖）



（第二百五十四圖）

（五）次ぎに頭の上に出てゐる兩端を、目打て外側を次第に長く、内側を短くしてクルくと巻いて觸角を作りますと蝶になります。之れを出來上り圖の樣に前に折つた折り紙の上に載せ、兩横に長く伸び出してある端を裏に廻して結び、その端に長短をつけて目打て巻いて置きますと、扇子包みは全く出來上ります。

この蝶結はその他種々な品物にかけて差支ございませんけれど、蝶をつける時に扇子包みと同樣に蝶を倒さに

致します。之れは品物を先方に進める時、蝶が舞ひ込むと云ふ意味を見せたものでございます。

三、雌蝶、雄蝶

雌蝶雄蝶は結婚式の時に銚子につけるものでございます。

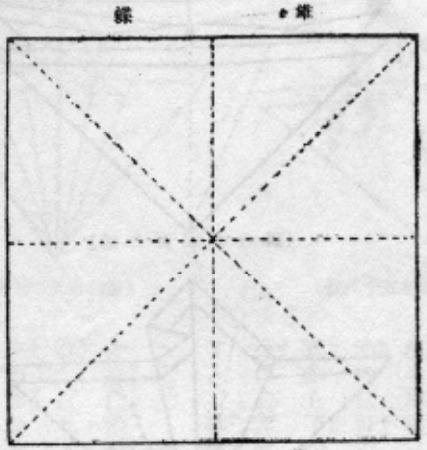
材料

中奉書一枚。赤紙一枚。金銀二尺の水引四本。同一尺五寸の水引二本。赤と青の細工用の二尺の水引を一本づゝ。

製作の順序

折り方

（一）先づ蝶の胴を折つて置きます。即ち中奉書を半枚に裁ち切り、その半枚の大さで更に正方形のものを二枚作つて置きます。而して赤紙をその正方形のものより周圍を一分づゝ廣くして五方形に裁つて置きます。



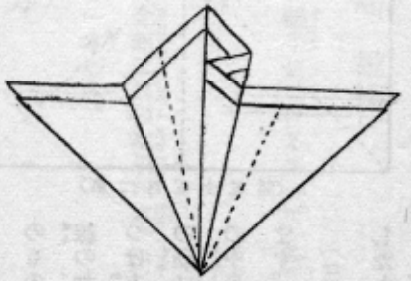
（第二百五十五圖）

（二）次ぎにその四枚の正方形のものに各々第二百五十五圖の點線の如き折り目をつけます。そのつけ方は、角から角に向つた二本の筋は紙を表に折つてつけ、縦横の中央の筋は紙を裏に折つてつけます。

（三）以上で順序に出來上りましたから雄蝶から折ります。赤白の紙一枚づゝをとつて赤を中にして正しく重ね、角から角に向つた筋を合はせて折りますと、第二百五十六圖の様な形のものが出來上ります、之れを更に手前

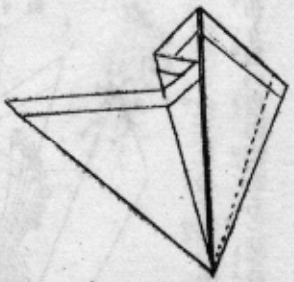
の方にある紙のみをとつて中央の筋までの圖を二等分し、第二百五十六圖の點線の如き筋をつけて、その筋から正しく折りますと、第二百五十七圖の左横と同樣なものになります。之れを更に二等分して同圖の左横の點線から折りますと、同圖の右横と同樣のものが出來上ります。かうして手前の紙を兩方ともに折つて置きます。

（第二百五十六圖）

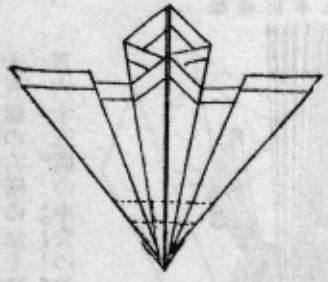


（第二百五十七圖）

（四）次ぎに後に殘つた紙を第二百五十七圖の右の樣に中央から二等分して折りますと、第二百五十八圖の右横の如くなります。更にその折り目から二分の深さにして同圖の如く筋を入れ、その筋から更に折りますと、右横の方が第二百五十九圖の如くなりますから、左横も同樣に折ります。而して中央の尖つた所の丈の三分の一だけ卽ち第二百五十九圖の上の點線から下の尖つた所を上に折り、次ぎにその三分の二だけ、卽ち下の點線から下に折り返しますと、雄蝶は全く出來上ります。



（第二百五十八圖）

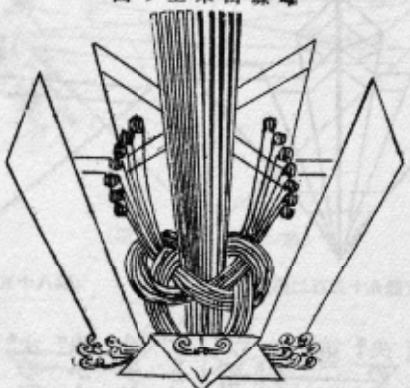


（第二百五十九圖）

（五）次ぎに雌蝶を折ります。折り目をつけた赤白の紙を一枚づゝ取り、正しく重ねて雄蝶第二百五十六圖の樣に折り、手前の方の紙を中央の節から三等分して第二百六十二圖の右横の如き筋を入れ、その初めの筋から折つて第二百六十三圖の如き形となし、更に折つて第二百六

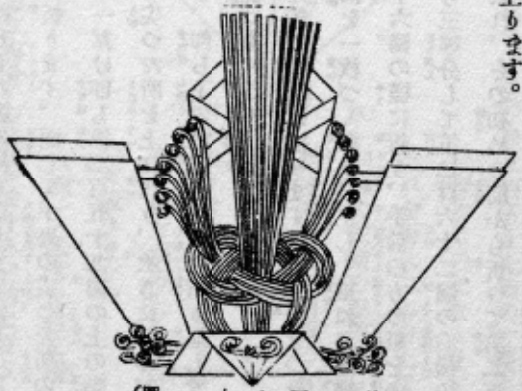
十五圖の右横の如く致します。左横も同樣の方法にして折りますと、第二百六十五圖の中央の如きものが出來上ります。

雌蝶出來上り圖



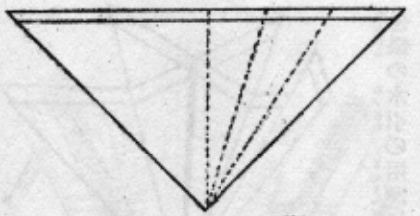
（第二百六十圖）

雄蝶出來上り圖

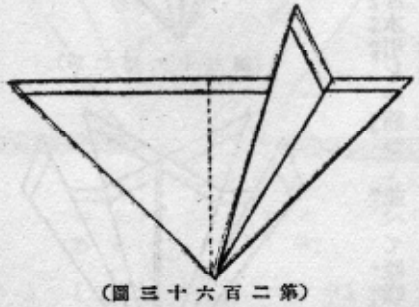


（第二百六十一圖）

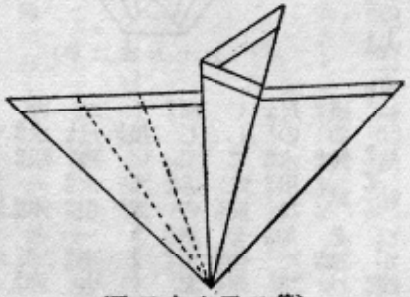
（六）　次きに後に殘つた紙を前の紙の折り目の横の端から三等分して、第二百六十五圖の右横の如き筋をつけ、その三分の一だけ卽ち點線から前の方に折り返しますと、第二百六十六圖の如く丈が右横に出來ますから、左横の方も同じ方法で折り、第二百六十六圖の如く丈



（第二百六十二圖）



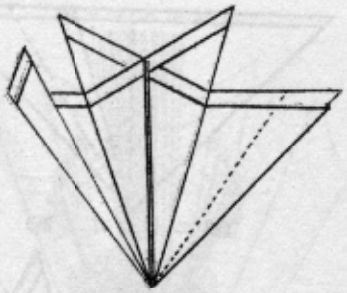
（第二百六十三圖）



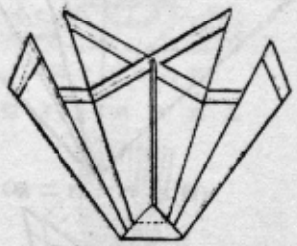
（第二百六十四圖）

三分の一だけ下の端から折り、更にその三分の二だけ折り返しますと、雌蝶は出來上りますから、之れに水引を結んでかけます。

水引の結び方



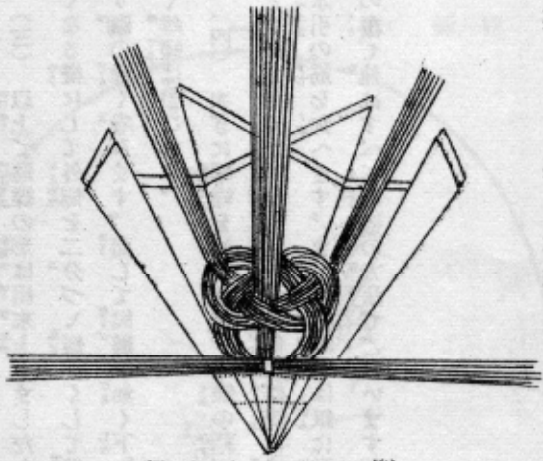
（第二百六十五圖）



（第二百六十六圖）

（一）　金銀の二尺の水引一本と、赤の二尺の水引一本とよく扱いて置きます。而して赤の水引をほぐして二筋を金銀二尺の水引に加へて普通の鮑結を結び、金銀の水引の兩側に赤水引を一筋づゝ並べて雌蝶の上に重ね、鮑結びか蝶の丈の中央になる樣にして軟くしめます、

（二）　次きに金銀二尺の水引を一本中央から二つに切り、金銀の筋を一筋づゝ殘して、その殘りを鮑結の下に横にして翼とし金銀一尺五寸の水引を中央から正しく二つに折つて縦にして鮑結の水引の中央と、翼の中央とをその間に挟み、鮑結の水引と共に動かない樣に元結で結んで置きます。而して之れを雌蝶の丈の折り返した所に第二百六十七圖の如く挟み、前に殘して置きました銀の筋を出來上り圖の如く裏の方で折り返した折り目から一分五厘許り下つた所に二ヶ所出して之れを結び、その端を目打で巻いて二巻半だけ殘して他は切り捨てます。次きに金の筋は同一



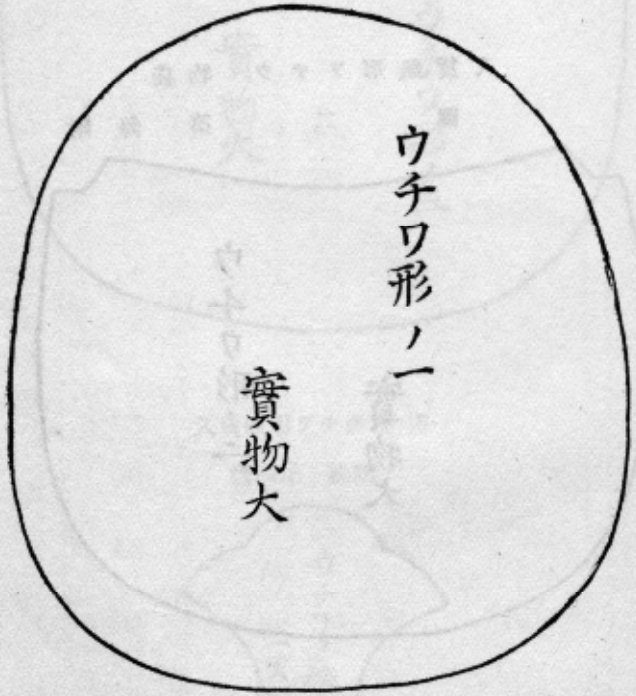
（第二百六十七圖）

じ穴に表の方から裏に通して後に銚子に結ぶ紐と致します。

（三）　以上で略蝶の形は出來上りましたから、鮫結の水引の端と、中央が長くなる樣にして外側を二分づゝ短かくして端を切り、各々の筋と目打で出來上り圖の如く卷きます。而して同圖の如く下に横たへてある鬚を卷きますと、全く雌蝶は整ひます。

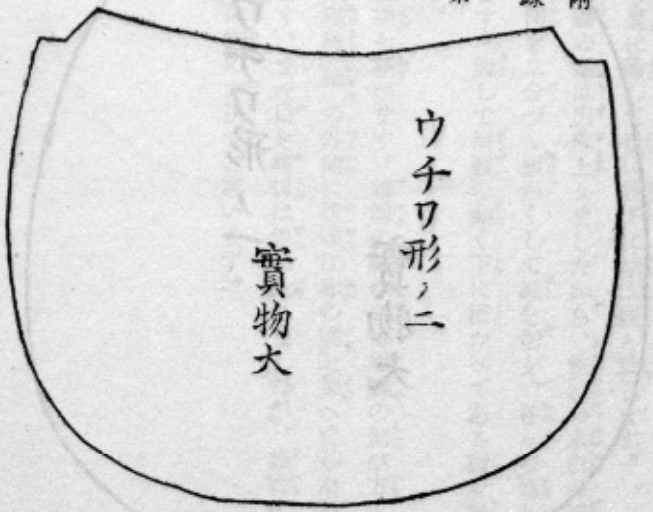
（四）　次ぎに雄蝶を結びます。雄蝶の結び方は雌蝶の結び方と少しも相違はございませんが、唯鮑結の外側に雌蝶は赤の筋を加へましたが、雄蝶は青の水引の筋を加へます。また目を雌蝶は銀に致しましたが、雄蝶は金にするだけの事で他はすべて同樣の方法でございます。

附錄　第一圖　袋物　ウチワ型銀貨入



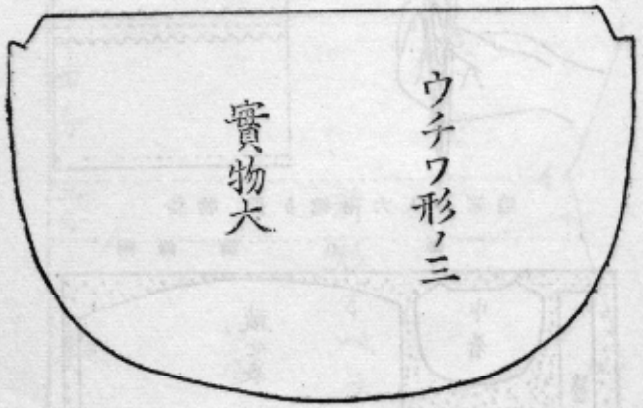
附錄　第二圖

袋物　ウチワ形銀貨入



附錄　第三圖

袋物　ウチワ形銀貨入



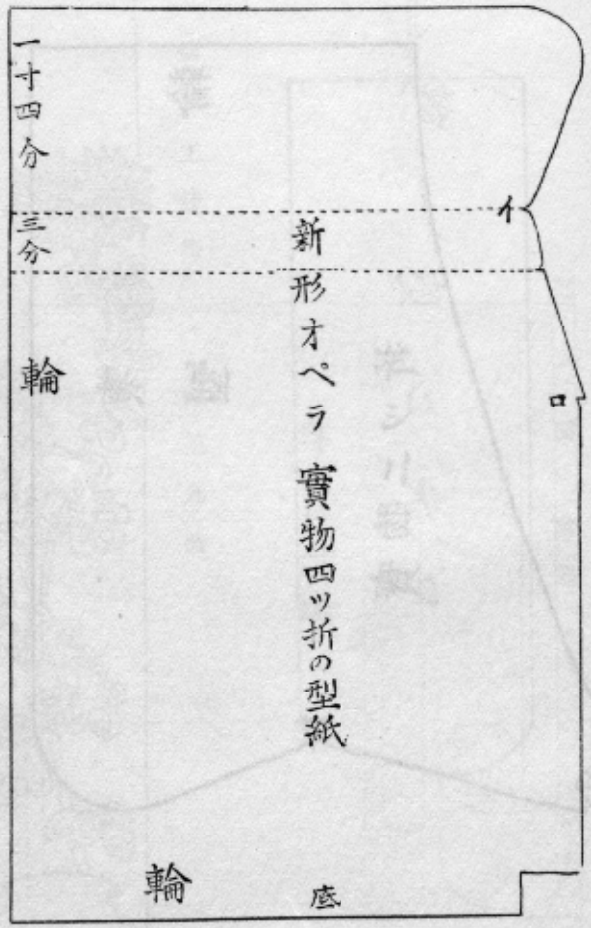
附錄　第四圖

袋物　ウチワ形銀貨入



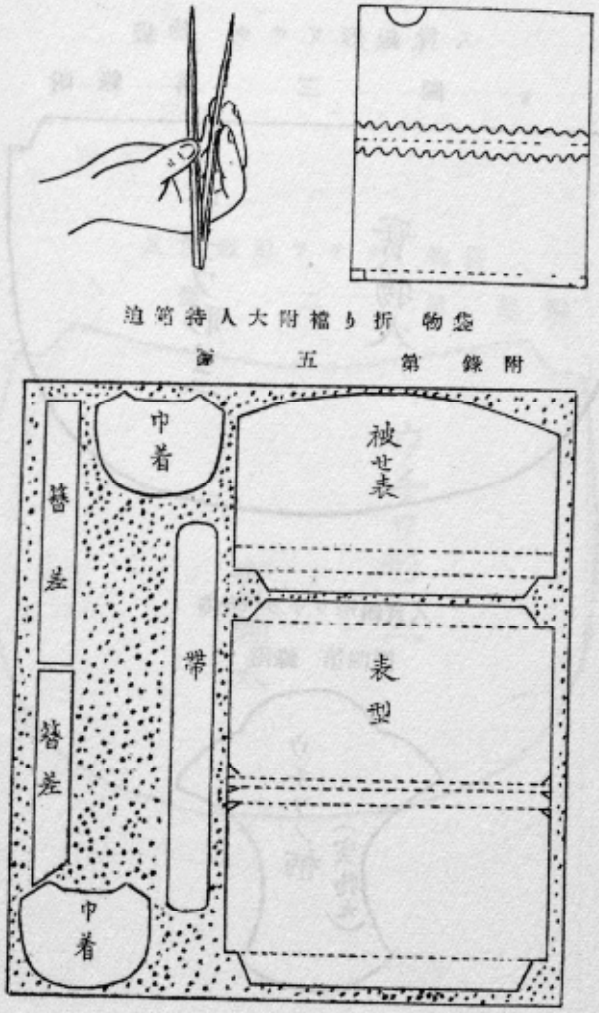
附錄　第六圖

袋物　オペラバッグ



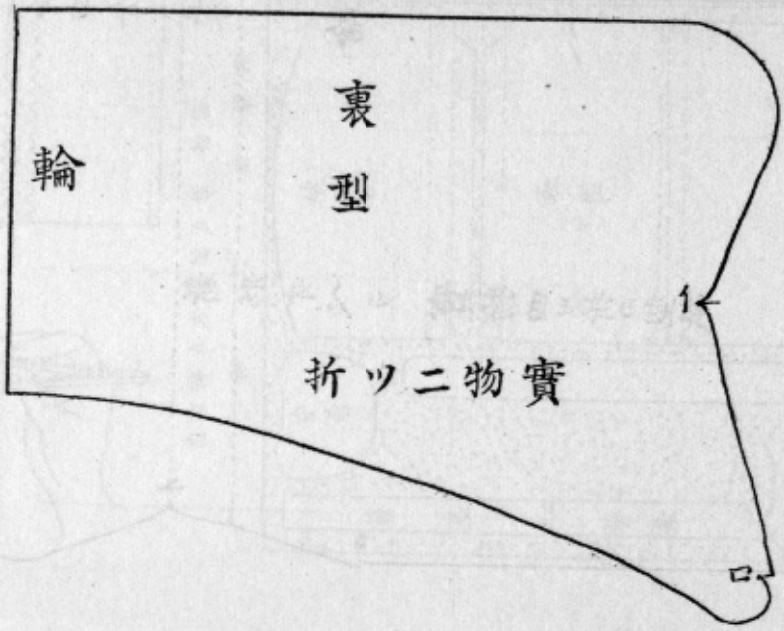
附錄　第五圖

袋物　折り襠附大人持箱迫



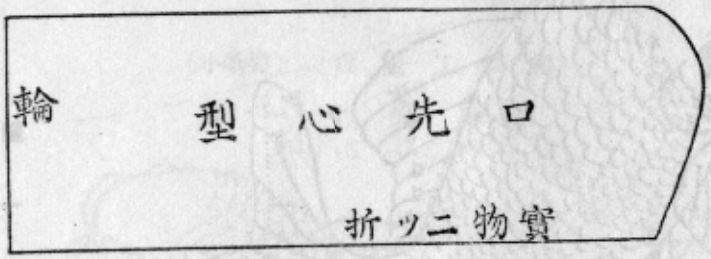
タツバフベオ物

附錄　第七圖



ノツバラベオ物袋

附錄　第八圖

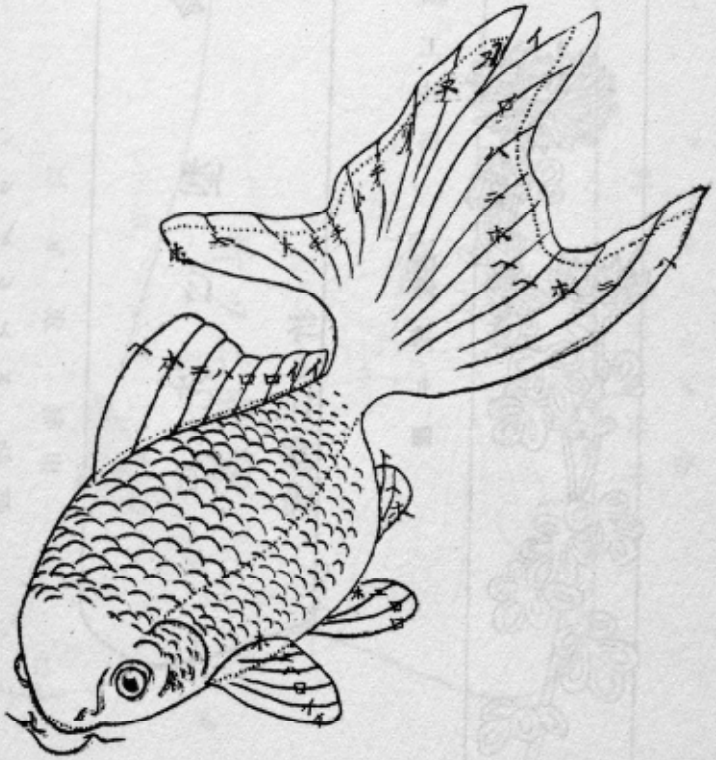


圖九第錄附　　袋物工細革





附錄　第十圖　摘細工金魚（實物大）



附錄　第十一圖　摘細工金魚（小物實）

昭和貳年六月十日印刷
昭和貳年六月十五日發行

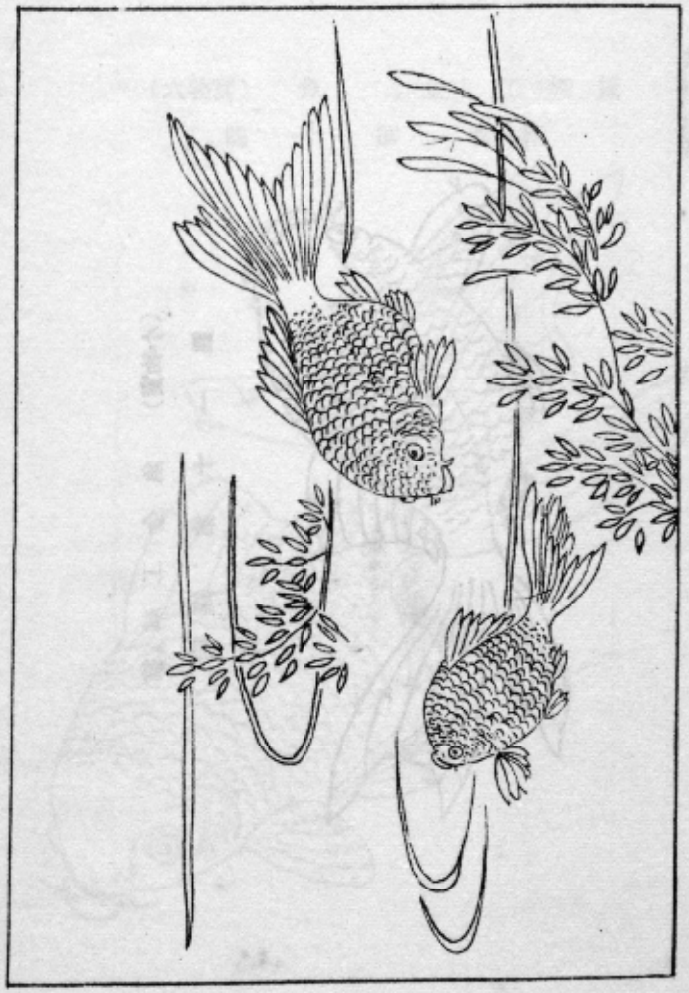
おさいく物叢書
定價金二圓

著作者　大妻コタカ
東京市神田區今川小路一丁目四番地

發行者　福岡益雄
東京市芝區金杉新堀町十二番地

印刷者　單式印刷株式會社
代表者　和田助一

發行所　東京市神田區今川小路一丁目　金星堂
電話　九段二九六九番
振替　東京二三二八番



第十一圖　金魚の額　錺工細密

婦人の讀物

大町桂月先生著	模範女子作文	定價金貳圓 送料金八錢	
報知新聞記者 古莊國雄先生著	第一線に立てる女性	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢	
府立第三高女教諭 中澤美代子先生著	洋食の拵へ方	定價金貳圓 送料金八錢	
大妻技藝月校長 大妻コタカ先生著	おさいく物新書	定價金貳圓 送料金八錢	
女子教育研究會著	現代婦人の作文	定價金壹圓五拾錢 送料金八錢	
東京朝日新聞記者 清澤洌先生著	モダンガール	定價金壹圓參拾錢 送料金八錢	

（單式印刷 複製）

